請候、

右之旨、大納言ゟ被申入候旨、口上、

○中略、

五月十日、甲申、雨、

一万里小路殿ゟ、觸書到來、

火用心之儀、常々可被仰付候得共、

准后樣、來ル十六日、御産家御里御殿ニ、御移被遊候間、彌以可被入御念候、

右壹通、

火用心入念ノ事

御産祈禱

〔久我建通日記〕○宮内省書陵部所藏本

五月一日、晴、當番加勢中山大納言、

○中略、

一准后御産ニ付、加梨帝母護摩供、御祈始日時、十七八日之内ニ相當候樣、内々御世話卿被示、依之、殿下申入、日時内勘文勘進之事、陰陽頭參合ニ付申渡、出來、被附兩公内覽了、以兒上于御前、

一同上ニ付、非常付無人ニ付、加勢伺定被　仰候、明日夫々可被申入之、

○中略、

十日、雨、午後晴、當番予、

○中略、

一准后御産ニ付、山門ニ於テ、護摩法被行、御撫物被納ニ付、朱辛櫃一合皆具、來十四日辰刻、被申出旨、藏人辨被示、宜賴入候、御文庫ヨリ取出、御殿ノ御文庫ニ有之、奉行豐岡三位〈申渡取出了、

護摩法

〔殿樣御玄關日記〕○長谷信篤家記　雜新史料編纂會所藏本

五月廿三日、酉、雨、

一從池尻樣來、

覺

一銀六十六匁　鯛二尾　一折

一同六匁五分　右壹壹ツ竪脚二重縒

右〆七十貳匁五分

獻上品一人割

四十四方樣ニ割、御壹方壹匁六分四厘、

右ゝ去ル十六日　准后樣御着帶ニ付、御近習御一同御組合獻上御割合ニ御座候、當月晦

日迄ニ、當家へ御差出可被下候、○中略、

五月廿日　　久我三位中將殿家

正親町三條中納言樣　　早川　勇

○中略、

六月一日、巳、晴、

一御參　内　巳刻前、

一去月十六日、御催御献物御割合廻文差出、來十五日迄ニ取集候旨申入候事、

〔土山武宗和宮御用掛記〕○京都府立圖書館所藏本

五月十一日、

○中略、

一來ル十六日、

准后樣御著帶ニ付、御獻上、被爲進等、相伺候樣、藤御乳ヲ以申出、嘉永三年之御振合ヲ以、尾張ヲ以奥ニ相伺候處、御先例之通、鰯一折三連御獻上、

准后樣へ御まゑ一折被爲進候樣、御使御用掛相勤候樣、同人ヲ以御申出、鰯・御まゑ等取

獻上品ハ嘉永三年ノ例ニ依ル

計之儀、同人へ申入、藤御乳ヲ以申上、

〔平田職修日記〕○宮內省圖書寮所藏本

五月十四日、○中略、

一御着帶內見也、當方如先例出仕不致也、重服有無不論也、

御著帶內見

○中略、

十七日、○中略、

一御着帶之御裝束撤却ニ付、予略束帶、辰半刻比御取次ニ出仕掛參候、出仕、飛香舍出仕巳半刻也、撤却濟、

未刻退出候ヘ、

著帶裝束撤却

〔言渡〕○孝明天皇紀所載

五月十五日、內山本尊、今日上洛之旨、伏原三位被屆候、右ニ付、先例前日以女房奉書被仰出候儀、近頃無御座候處、於今度ハ、今日女房奉書被出、明日御迎可有之被仰出候由、

內山本尊上洛

〔庭田嗣子心覚〕○伯爵庭田重行所藏本

三月五日、

夜ま入、准后ゑ表向の御着帶御ゝんもん、長ゑ御使にてゑ、表口向女中へも仰出らるゝ、准后ゑへ御獻ま參る、御口祝ふし、長ゑ御使のセつハ、御さいめん、御口祝も御戴のよし、來

表向御著帶日時定メラル

ル五月十六日巳ノ剋と御治定也、准后ゟ御礼使ゟ〳〵、

○中略、

五月十五日、

御拜有、石清水社御法樂有、小御所よてよみ上、御通題也、准后ゟ明日ゟ御着帶ニて、めて度御下りニ成られ候ニ付、くろうニおゝしめし候ニて、ゐせちゟ・嗣子・督のすけゟ・別當ゟへ、御服戴候、御宿の御人數少將ゟ・衞門ゟへも、御同樣被下候、あせちゟ・嗣子・少將ゟハ、御白絹、御三人へハ、御むまんを・御もゝ色とんぼ也、

退下ニ就キ賜物アリ

十八日、

今日准后ゟへ、大御乳人使ニて、御うふやの御道具共、進せられ候、地白のうさひらふて、參らせられ候、御ゆる〳〵とて、四ツまへ歸り參らせられ候、添使小大夫參る、親康法眼・三角攝津介、表初て拜らん、御小座敷上段の御入口御座御まへニ、御とゝ為大ゟ御伺ハを、誘引近江守也、内見も有、二度め、廿八日午剋と仰出させられ候、

產室道具遣ハサル

准后着帶ノコトムスビ文ニテ申入アリ

〔御降誕ニ付和宮樣より進せられ物御留〕○靜寛院宮御日記所載

三月五日、　御所より、來る五月十六日、　准后ゟ御着帶御治定あらせられ候よし、長橋ゟゟ、むすひ文にて御申入、夜に入候まゝ、明後七日ニ、御歡仰入られ候樣御申入、御文計、

七日、　御所　准后ゟへ、御歡仰入られ候、杉原よこ散、

〔中山績子日記〕

五月四日、

御かり床、いし伺、准后ゟ御着帶に付、御乳附橋本ゟ・おゟを御まう人仰付ゟ〳〵、今日初めて參ゟ、こゝふさよても、御祝酒・御くわし下さる、御いとゝ為、

○中略、

十八日、

御き嫌よく、新いし伺、親康法眼・三角攝津介伺、ゆういむ近江守、次のうかゝひ、廿八日午刻仰出され、大御ちの人准后ゟへ、御うふや御道具もち御使ニ參らるゝ、御着帶日參ゟ〳〵むつかゝのら、御おそく成、今日進しゟ〳〵、大御ちの人歸り參ゟ〳〵、よろ敷よし申入ゟ〳〵、紅御つ紮帶戴、

醫師伺

內々著帶日ヲ正月二十二日ト定メラル

〔坊城俊克日記〕○孝明天皇紀所載

正月十六日、准后內々御著帶日時、陰陽頭昨日召設、申渡、今月廿日迄、內勘文勘進、兩內覽了、獻上、

以兒、清書廿二日、被仰出申渡、清書被附、又兩內覽了、獻上、

〔土山武宗日記〕○宮內省圖書寮所藏本

正月廿二日、

○中略、

一准后様、御内々御著帶被爲濟候旨、從奥右京大夫ヲ以被　仰出、翌日、奥へ恐悦申上ル、

著麻上下詰合也、

〔中山績子日記〕

正月廿二日、

御き嫌御よし〳〵、准后ゑ御内々御着帶ニ付、辰刻過御參り、御こしの御間まて、御下帶遊ハし進しゐく、すくふ御下り、いし一とう伺、さんとも伺、彌御人しん御治定申上、山本・高し彡參り言上、御祝申上る、夕ろさ御上り、大すけ・長はしゐ參る、ゐ以よ・おゑを御まう人よりの口上申參り、大御ちの人う巻給、長はしゐへ申さるゝ、口祝、准后ゑ御はゝまて御參り、御口祝・御すい物・御すゝり・御重さのふまて、御盃まいる、大すけ・新大すけゐ・長橋ゐ・伊豫ゐ・大御乳人・駿河との、御祝ニ參り、御すゝ以ゑ比、上ろう盃・御くわし戴候也、こふたへも御よせさのふ上ろゐく、女中よりもする〳〵五まん、准后ゑよ宣御すゝりふさ肴いさゝき候也、

〔中將内侍房子記〕○孝明天皇紀所載

内々著帶

御祝言上

格子ノ間ニ於イテ内々御著帶ノ儀

正月廿二日、准后ゑ御内々御著帶に付、四ツ半頃御參りあろはし、御格子の御間にて、御みれひあろはし進せられ候、御こし御はかまにてあらせられ候、准后ゑ御地あかめし候也、御する〳〵と濟せられ、御退出あろはし、御里御殿へ御下り也、御みれくりに、新大典侍ゐ・なかはしゐ・大御乳人參らるゝ、七ツ半ころ御する〳〵と、御上りにてあらせられ候、

〔庭田嗣子心れ得る〕○伯爵庭田重行所藏本

正月廿二日、

准后ゑ御内々御着帶ニ付、めて度御里御殿へ御下り、辰ノ半比ふり、御地赤めし御參り、御こしは御間ニて、おもし被遊被進候、直ニ御下り、御みおくり新大ゑ・長ゑ・大御ちの人御參り、さんど伺、筆頭初、伺のいし衆、皆々伺まて、表向以よ〳〵御ふんしんの御事御治定申入、筆頭御七、こふさゑへも御治定申入事言上ま參り、する河とのまて申入らるゝ、大ゑ御聞、御申入御返とうに、准后ゑいよ〳〵御ふんしんニ御治定のよしめて度、猶御する〳〵の樣と、する河とのまて、兩人へ御申あそはし候へハ、直ま兩人御悦申入候事、さるの剋過、御する〳〵御上り、御出迎、大ゑ・大御ちの人御參り、其後上らぬ御使まて、御内〳〵御着帶、御する〳〵すまろゐく、御上りニ付、御百彡一折、御そふ一一々、外ま御よをさらふ上らせゐく、女中へ御よをさらふ・御硯ふさらふ戴候事、女中ゐもする〳〵一折進上、こ

内々著帶ノ爲里殿ニ入ラル

一ノ間ニテ御盃事

ふさゐニハ、獻上ゐし、御上り後、御袴・御繪元結まて御參りあそはし候、一ノ御間ニて御すい物・御すゝり御重さのふこて、御盃ゐ、御ていきん、御手長やくふり、袴也、准后ゐへも、御吸物出て、御ていきん袴ふし、女中も中ノ口まて、御吸物戴く、すゝニて、盃有、准后ゐへ御上り、後御祝ま參る、兩大すゑゐ・長ていしゐ・大御ちの人・する河とのハ、御祝酒御戴のよし、いよ殿ハ、御先例ゑ、おゝハ皆〳〵御口祝計戴候事、朝ゑ着ゝへ也、御内〳〵御着帶の御ゝんもん召、御内殿へ仰付有以前ま、長ゐ御使へ被進申入候事、

内々著帶

〔御降誕ニ付和宮様より進せられ物御留〕○靜寛院宮御日記所載

安政五年午正月二十二日、准后ゐ御内々御着帶の御さたなから、御歡仰入られ事あらせられず、

里殿退下

〔橋本實麗日記〕○東京帝國大學所藏本

廿二日、己亥、晴、○中略、傳聞、准后御方御懐胎、今日御内着帶云々、恐悦之事ニ、

〔議奏裏松恭光通達〕○内閣文庫所藏本　武家書翰往來所載

○正月二十二日禁裏附大久保忠良等へ

准后、自唯今里殿ニ　御退出、申刻還參之旨、被申出候、仍爲心得申入候、以上、

正月廿二日

大久保大隅守殿　都筑駿河守殿

裏松大藏卿

〔非藏人日記坤〕○東京帝國大學所藏本

正月廿二日、己亥、晴、當番議奏裏松大藏卿殿、其餘參集、傳奏衆參侍、

一准后御方、巳剋計、御下、申剋、還御參云々、

〔土山武宗日記〕○宮内省圖書寮所藏本

正月廿二日、

一准后樣、巳剋過里御殿へ御下り、申剋還御之旨、被仰出有之、

〔議奏久我建通通達〕○武家書翰往來所載

○正月二十四日禁裏附大久保忠良等へ

准后、里殿ニ御退出之旨被申出候、仍爲心得申入候、以上、

正月廿四日

大久保大隅守殿　都筑駿河守殿

久我大納言

〔非藏人日記乾〕○東京帝國大學所藏本

正月廿四日、辛丑、陰晴、當番議奏權大納言殿、傳奏衆參侍、

一准后御方、里殿江御退出也、

〔東坊城聰長日記〕○宮内省圖書寮所藏本

正月廿四日、○中略、

一准后里殿ゟ御退出之旨、議奏被示、（從准后取次も、同事告來、）

一准后御子細御所勞ニゟ、從昨夜、來月十三日中、御引籠之旨、從准后取次申越、

〔土山武宗日記〕○宮内省圖書寮所藏本

正月廿五日、○中略、

廿四日事、

一准后樣、御子細之御所勞ニ付、昨夜ヨリ二十日之間、御下り之旨、被　仰出候段、同役當番ヨリ、廻狀申來、

但、御子細御所勞、表通り御平日ニ付、同役申合、　御機嫌伺等、別段不參、

幕府、目付岩瀨忠震（肥後守）ニ、琉球人參府用掛ヲ命ズ。

〔幕府沙汰書〕○東京帝國大學所藏本

五月十六日、○中略、

御目付
（直温、堺奉行）
一色山城守代リ　岩瀨肥後守

當秋琉球人參府御用取扱被　仰付之、

右於新部屋前溜、遠藤但馬守（風説、若年寄）申渡之、

○安政年錄・高麗環雜記ニモ、マタ本書ト同一内容ノ記事アリ。

〔水戸藩〕御城書海防部〕○公爵德川圖書所藏本

五月十七日、

當秋琉球人參府御用取扱被

仰付旨、

右昨日、遠藤但馬守申渡之候、

但、其節承付不申候付、今日認上ケ申候、

御目付
岩瀨肥後守

幕府、麻生藩主新庄直彪（駿河守）ニ金千兩ヲ貸與シ、災殃ヲ救フ

〔老中申渡〕○子爵小笠原長生所藏本　○内藤信親日記所載本

○五月十六日麻生藩主新庄直彪ヘ

五月十六日、○中略、一、廻り出掛ケ、波之間列座ニゟ、○内藤信親日記

安政五年五月十六日

武器庫燒失等震災風損

五月十六日、〇幕府沙汰書

新庄駿河守

先達て、領分出火ニて、陣屋向武器藏燒失、其上居屋敷震災風損等折重り、且近年領分損毛も有之候ニ付、拜借之儀被相願、可爲難儀と被　思召候、當事御事多ニ者候得共、出格之譯を以、金千兩拜借被　仰付候、返納之儀者、御勘定奉行可被談候、

月番申渡

右、月番被申渡、書付被渡之、〇内藤耆親日記

右於渡之間、掃部頭・老中列座、中務大輔申渡之、〇幕府沙汰書

〔堀田正睦日記〕〇伯爵堀田正恒所藏本

五月十六日、

一四ッ御太鼓ニて出宅、登　城四半ニ二寸前、

一伺泊方日向守、

一罷出無之、

一波之間列座、新庄駿河守ニ、出格之譯を以、拜借金被　仰付旨、月番被申渡、〇中略、

一退出、九半打五寸廻り、

（幕府沙汰書　安政年錄　高麗環雜記　溫恭院殿御實紀　柳營實記）

〔佐倉藩記錄〕〇伯爵堀田正恒所藏本

五月十二日、

一新庄駿河守拜借金願之儀ニ付御勘定奉行申聞候書付一通

右、土佐守を以上ル、

越中守

「（朱書）十四日、同人を以下ル、」

仙臺藩主伊達慶邦陸奥守　條約調印ニ關シ、幕府ノ諮問ニ答フ。

〔仙臺藩主伊達慶邦答申書〕〇伯爵堀田正恒所藏本　堀田正睦外國掛中書類所載

〇五月十六日老中へ

（表紙）「（朱書）「午五月廿三日、寫、」」

勅答之趣相達候ニ付松平陸奥守差出候書付」〇堀田正睦外國掛中雲類

今度（イ脱）墨夷一條ニ付、御三家初諸大名之存意御尋之

叡慮之趣、堀田備中守ゟ達有之、謹て奉畏候、右之儀者、去冬も被成下　御尋、其節も言上仕候通、實ニ重大之義ニて、不肖之私躰申上候も如何ニ候得共、往古ゟ、

御國體ニて者、支那・阿蘭陀・朝鮮・琉球と格別、其外と不被爲近付御事と、津々浦々之賤の男賤の女迄も心得居候所、弘化年中ゟ嘉永ニ至り、近海ニ乘入し（異船渡カ）ゟ、當節之形勢ゟ罷成、和

外夷侮慢ノ擧動

幕府措置ヲ誤ル

親通商之義と、
本朝闔國之理談も色々御座候中、近來ニ至り、御麓近く乘入、侮慢之擧動相及候處、是全
本朝武威之衰、諸民惰弱之弊を伺ひ、又甘口を以、和を結ひ、段々願立を以、海陸縱横仕、頻
ニ　御府内ニ押入候手段、小より大ニ及し、頻ニ蠶食して、
本朝併呑之深謀ニ可有御座、誠以
神州之御大事無此上御場合ニゐ、
御國家之　御安危、此所ニ止り候儀と、被爲於　廟堂、不被爲知召御儀、決ゐ無御座候得
共、其節以　御果斷、去年亞墨利加人　御目見被　仰付義と、無御據も深　思召と勿論、夫
々大小之御役人ニ評議被相盡、个樣被成置候末ニと御座候得共、是又　廟堂御議論ニ御決
着能成、
皇國之御耻辱と之　御英斷を以、往々
御國躰ニ對、無然被　思召候と、御斷ニ相成候ゐも、御宜御儀ニ奉存候、併左樣ニ相成候得
と、戰爭を開候と元より之義ニ有之候、左樣ニ　御英斷を以、危急存亡之時と相成候節と、
縱令當時武威相衰、士氣惰弱仕候ゐも、吾　國之儀と、義を守武を逞そる風俗、天下ニ双
無御座候、

叡慮ノ下一人ノ背クモノナシ

戰爭ニ對スル不安

叡慮を以、廟堂　御英斷被　仰出候と、誰一人奉背者可有御座哉、一致之防戰可仕候、乍
恐
東照神君か、數代高嶽之聖恩を奉蒙候莫大之儀ニゐ、於此儀と、私初　御憂慮被成置候ニ
と被爲及間敷奉存候、扨又其戰爭一度相開候得と、万民其所を不安義と、元か　御爲ニも
不相成と勿論、
京都ニゐも、可被遊　御安心期、幾年相立候ゐも、不相見得御事ゟ奉恐察候、此等之所不相
考候へと、和親通商之義、后患ふして、如何ニ奉存候得共、万機廟算被爲盡、不被爲得止事
御儀より被　仰出、卽今
京都御伺ニ能成、
勅答之御趣意を以、反復御斷ニ能成候ハヽ、忽ニ兵端も相開可申候、左候ハヽ、可被爲安
叡慮樣被爲有間敷、隨ゐと、諸民動搖仕候上のらハ、古今例も有之通、甚敷心得違之者、其
虛説伺ひ、夷人手引仕候者抔、出來申間敷物ニも無御座、左候時と、何を以
御國躰之治、何レの道ニ可有御座哉、實以被遊方有御座間敷奉存候、各國大小名自己之存
慮丈と、幾重ニも勇悍武略を以、卓見相立可申候得共、其中言行表裏之折柄、人心不居合御
時節、万機をも被爲預　廟堂之御吟味至極ニ御大切ニ奉存候、是迄仮御條約被成置候墨夷

衆議ヲ盡シ叡慮ヲ伺ハレタシ

開港御場所之義ハ、深御吟味罷成、此形勢と罷成候ゆへ、和親通商之廉ハ、兎ニ角不被相立罷成間敷哉、其他各國願立ニ隨ゆ被相許候義ハ、決ゆ如何ニ奉存候、彌々后患之大害ニ奉存候間、幾重ニも被爲盡　廟算、跡々廣大ニ不罷成樣、別ゆ御取〆り被相立、大小名共ニ奉服從

台命、一致ニ御警衛被相立外有御座間敷奉存候、和親御斷之所、私体何ぞ之方と相決兼候間、乍恐御三家始諸大名之存意をも　御考之上、大小之御役人之存意も被爲　聞、其上御英斷を以被爲伺

外人京都ニ赴キ應接スベシトノ噂

叡慮、其后之義ハ、四民何ぞも被　仰出を奉待候外無他事御事奉存候、以上、

五月十六日　松平陸奥守

尙以申上候、下田奉行ゟ同席ニ達之趣ニゆ承知仕候ニハ、事ニ寄夷人京都ニ罷登應接相願候心組有之哉ニ相聞、右ハ申上候迄も無之、此儀ハ決ゆ如何之御事ニ奉存候、次ニ開港之義、

京都及

江戸近海要路之所ニハ、何分夷人被　仰諭被相扣候義ニ無御座候ゆへ、本文奉申上候通之形勢、人心を御失ひ被遊候儀、是又至極ニ御大切之御義ニ御座候間、此段も申上置候、

以上、

重職出府ニ及バザル旨

（堀田正倫家記　鳥津家本安政雜記）

〔仙臺藩士〕橋本九八郎日記〔○維新史料編纂會所藏本〕

五月十五日、晴、晩雨、

○中略、

一御存慮被　仰上方ニ付、御奉行衆御列席之上、御相談有之候ニ付、態々御重役從御國元爲御差登ニ及ひ不申趣、御答仕候事、

十六日、朝曇、晝霽、

十七日、雨、午後陰、夜晴明、

一今日御機嫌伺可申上處、御用支ニ付不申上候事、

○中略、

廿三日、陰、午後小雨、

一御機嫌伺御謁申上之、

一御存意書、御退出ヘ、御奉行衆、大浪方同道ニゆ、御差出被成候事、（大兵衛城使）

蘭國領事參府掛勘定奉行永井尙志玄蕃頭・同目付岩瀨忠震肥後守・長崎奉行岡

部長常駿河守　蘭國領事「クルチウス」Curtiusト會シ、條約改訂ヲ議ス。尋デ、數次ニ及ブ

〔眞福寺詰蘭國領事參府掛日記〕○帝國圖書館所藏本

五月十六日、曇、

永井尙志等應接ノ爲眞福寺ニ至ル

笹岡小平太
古谷銹藏
向方
秋山清右衞門
神田吉十郎

一例刻交代、夫々ニ名前達、

一蘭人乘馬之節、於場所取締向之儀、前申送御一覽之事、

一松浦安右衞門、見廻相越、

一夕八時頃、永井玄蕃頭殿・岡部駿河守殿・岩瀨肥後守殿爲應接御出有之、夜五時御退散被成候、

一夜五時過、門〻ニ付、見張所〻切、

一門出切手六枚、消印之上、御目付方鈴木和助ヒ廻ス、

○十八日・十九日、永井尙志・岡部長常・岩瀨忠震、眞福寺ニ「クルチウス」ト應接ス。次ニ其史料ヲ收ム。

〔眞福寺詰蘭國領事參府掛日記〕○帝國圖書館所藏本

五月十八日、曇、

永井尙志等應接ノ爲眞福寺ニ至ル

中田海助
渡邊峯藏
向方
岡田源三郎
嶋田林三郎

一例刻交代、名前夫々ニ達、

一秋山久藏見廻る、

一蘭人乘馬之節、場所取締之儀、前申送之事、

一夕八時過、岡部駿河守殿・永井玄蕃頭殿、引續岩瀨肥後守殿御出有之、夜五時過引取、同刻門〻之事、

一門切手四枚、御目付方へ返ス、

〔眞福寺詰蘭國領事參府掛日記〕○帝國圖書館所藏本

五月十九日、曇、

一例刻交代、名前書夫々に達ス、

一小遣卯之吉出る、

一稲澤彌一兵衞見廻る、

一夕八時過、岡部駿河守殿・永井玄蕃頭殿・岩瀨肥後守殿爲應接御出有之、暮時御退散之事、

一夕七半時頃、筆者蘭人於溜池端乘馬有之、詰合ゟ罷越、

一夜五時門〆り、

中村佐七
川口彌一郎
向方
天野喜兵衞
菱田兵助

岡部長常等眞福寺ニ至ル

蘭國領事モ程ナク出立スベシ

一門出切手壹枚、御小人目付清水久三郎に返却、

〔福井藩士〕橋本左内書翰〕○橋本景岳全集所載

○五月二十三日〔同藩士〕近藤了介宛

本月十二日立の御手帖、同十八日相達致披見候、

○中略、

○亞米利加使節は當月七日、都合能引取、此節下田滯在仕居候、

○和蘭領事官も無程出立に可相成候、○本多君（修理）・村田兄（氏壽）共、海防之事に付見込有之、出府に相成申候、乍去小拙存寄も大段同樣にて、直に話合も相濟申候、乍去當時餘程困難之場合、且色々外御用も有之候故、未だ御滯留に相成居申候、

○中略、

五月廿三日　左内

了介兄

再伸、○下略、

○本書ノ全文ハ、之ヲ五月二十二日ノ條ニ、收錄ス。

〔付〕岩瀨忠震書翰〕○橋本景岳全集所載

安政五年五月十六日

○五月二十四日橋本左内宛

昨日は御紙面、退出展閲、條約二本收手此條約之事は、他に漏泄無之樣に致度、近日表向御達可有之候也、御新聞二條之内、未決の二字は最可喜、

○中略、

念四　　蟾洲

把志猛特兄

○本書ノ全文ハ、之ヲ五月二十二日ノ條ニ、收錄ス。

○二十五日、岡部長常、眞福寺ニ「クルチウス」ト應接ス。次ニ其史料ヲ收ム。

〔眞福寺詰蘭國領事參府掛日記〕○帝國圖書館所藏本

五月廿五日、雨、

向方

安原銕三郎
大竹常五郎
吉澤仙四郎
柴田勘太夫

一交代、名前書出ス、

一小遣定吉出ル、

一安藤源五左衞門、爲見廻罷越、

一夜五ツ時、門〻りニ付、見張所〻切る、

一門切手五枚、御小人目付栗島彦八郎ヒ出ス、

一夕八ツ半時頃、岡部駿河守殿御出應接有之、同七半時頃、御退散相成候事、

○二十七日、永井尙志・岡部長常・岩瀨忠震、眞福寺ニ「クルチウス」ト應接ス。次ニ其史料ヲ收ム。

〔眞福寺詰蘭國領事參府掛日記〕○帝國圖書館所藏本

五月廿七日、晴、

向方

竹田平八
中島兵三郎
綿脫豐次郎
柴田勘太夫

岡部長常應接ス

一例刻交代、夫々に名前達ス、

一小遣卯之吉出ル、

一今朝、永井玄蕃頭殿・岩瀬肥後守殿・岡部駿河守殿御出應接有之、四時過相濟、尤蘭人出立、來月四日之よ〳〵、治定と不相分候事、

永井尙志等眞福寺ニテ應接ス

一中田郷左衞門、見廻罷越、

一夕八半時頃ゟ、筆者蘭人溜池馬場おゐて、乘馬有之、出役竹田、向方柴田罷越、同七半時相濟候事、

クルチウス溜池邊乘馬遊歩

一例刻門〻、見張所〻切、

一門切手十一枚、御小人目付鈴木和助へ返ス、

〔岩瀬忠震書翰〕○橋本景岳全集所載

○五月二十七日　橋本左内宛

親　警

「日本行記」二本爲持差出候、御寛覽不苦、宜敷被仰上可被下候、過日懸御目置候各國條約、此節刊行世上に遍く相成候方、外國之事情も相分り、盲聾輩の爲めに可宜哉と存、此事を企居候間、御一覽濟候はゞ、御返完被下度候、尤今明日御返しには不及、

日本行記ヲ左内ニ示ス

クルチウス六月四日出立ノ豫定

○昨日は謙次郎罷出、新聞最可驚可笑事共に存候、

○蘭人も、來る四日に發足之積りに相成候、先差向き外夷之接待も無之、吾輩放逐之時愈來り申候、御一粲々々々、

○條約書中、少しづゝ加刪、又は全く除候箇所も有之候、校正次第可呈御内覽候、條約第一箇條中の第三號は、丸除に致候、

○別に新聞も無之、豐臣氏も最早措手之手段も有之間敷、見斗りは頗る美擧なり、夫に付、絶巓之震災も有之哉の兆も相見へ候、如何有之哉、

○市尹は英雄傑之手揃と相成り、定て鴻業韙績も可多と亦一歎、

○作樂も死中に活を可求と、餘程心配斡旋之樣子に候へども、其功の成否は不可知之勢、呵々、

念七　　桂　痴

端　原　盟　兄

〔岩瀬忠震書翰〕○橋本景岳全集所載

○五月二十八日　橋本左内宛

復

拜展、如諭新霽至喜、○中略、

○來月四日、蘭人發程、最早小生輩は、愈排擊之時至り申候、來月四日は、猶婢僕の三月四日の如しと一笑、

○中略、

念八　松懶畏契　爽快

○下略、

○本書ノ全文ハ、之ヲ五月二十八日ノ條ニ、收錄ス。

○六月朔日、「クルチウス」、岡部長常ヲ其ノ邸ニ訪フ。次ニ其ノ史料ヲ收ム。

〔眞福寺詰蘭國領事參府掛日記〕○帝國圖書館所藏本

五月晦日、天氣、

安原銕三郎
大竹常五郎
向方
吉澤仙四郎

一交代、名前書夫々に出ス、

大八木七兵衞

一杉浦安右衞門、爲見廻相越ス、

一筆者壹人、夕七半時頃ゟ、溜池馬場ニ乘馬有之、暮時歸る、

一明朔日昼後ゟ、蘭人、岡部駿河守殿相越候旨、長崎方上原賢次ゟ内達有之、右ニ付、廻方双方四人達ス、同役にて爲心得及文通候事、

一夜五時、門〻りニ付、見張所〻切、

一門出切手拾四枚、御小人目付堀江六五郎へ返却、

六月朔日、曇、

笹岡小平太
古谷銹助
向方
秋山德右衞門
神田吉十郎

一例刻交代、名前夫々に達、

一小遣卯之吉出、

一夕八半時出門ニゟ、領事官、岡部駿河守殿ニ相越、暮時歸、

一仁杉八右衞門、見廻有之候事、

一前書出役當番ゟ古谷・神田、廻方双方四人出、

一夜五時門ゞ、

一門切手五枚、消印之上、御小人目付清水久三郎ニ返却、

○附錄

〔長崎奉行岡部長常通達〕○帝國圖書館所藏本　德川幕府書類編纂所藏

○五月三日町奉行へ

（朱書）「午五月三日、差廻、」

〔町奉行衆〕　岡部駿河守

クルチウス岡部長常ヲ訪フ

クルチウス池ノ端仲町通遊歩ノ豫定

明四日、晝九時ゟ、和蘭領事官并筆者蘭人共、下谷池之端仲町通遊歩致〻度旨申立候ニ付、承屆申候間、其筋ニ御達有之、爲取締御組之もの、御差出有之候樣致度存候、尤雨天ニ候得ゝ延引之積有之候、依之別紙道筋書相添、此段及御達候、

五月三日

○別紙

通路

眞福寺ゟ、新シ橋・龜井隱岐守屋敷前通り、左ニ、北條美濃守屋敷・松平大膳大夫屋敷脇前、御堀端通り、日比谷御門・土井大炊頭屋敷前・八代洲河岸通・龍之口、右ニ、遠藤但馬守屋敷後通り、神田橋・本多加賀守屋敷前通り、松平左衞門尉屋敷脇前通り、昌平橋を渡り、神田明神下通り、溝口讃岐守屋敷前脇通り、湯島天神下・板倉攝津守屋敷前、右ニ、上野廣小路、夫ゟ池之端仲町、歸路仲町通り、板倉攝津守屋敷後脇前、右ニ、宗前之通り、

以上、

〔眞福寺詰蘭國領事參府掛日記〕○帝國圖書館所藏本

五月四日、晴、

中村佐七

川口彌一郎

向方

一例刻交代、名前書夫々ニ出ス、　天野喜兵衛
一小遣貞吉出る、　嶋田林三郎
一昼四半時出門ニ付、蘭人下谷池之端邊ニ罷越、同夕八半時頃立歸候事、
　但、右出役、御双方廻方四人、詰合ゟ川口・島田罷越ス、
一服部孫九郎、爲見廻罷越ス、
一夜五時門〆、
一門出切手八枚、御小人目付小野益太郎返却、
五月五日、曇、昼後雨、

クルチウス遊歩

一例刻交代、夫々名前書出、　安原銕三郎
一由比萬太郎、見廻有之候事、　大竹常五郎
一夕七半時頃、通弁官罷越、同夜四半時、相歸候事、
　右出役、飯田町詰合中島・柴田相越ス、
向方
吉澤仙四郎
大八木七兵衛

一右同刻、御門〆切相成事、　中田海助
一門出切手八枚、御小人目付栗島彦八郎へ返却、　渡邊峯藏
○中略
同八日、曇、
向方
大八木七兵衛
岡田源三郎

クルチウス溜池馬場ニテ乘馬

一例刻交代、名前書夫々ニ達、　中村佐七
一秋山久藏見廻、　川口彌一郎
一夕七時頃、蘭人兩人溜池端馬場おゐて、乘馬有之、
一夜五時、門〆之事、
一門切手八枚、御目付方堀口六五郎へ返ス、
五月九日、晴、
向方
天野喜兵衛

一例刻交代、名前書出ス、
一小遣卯之吉出る、
一夕七時頃、筆者蘭人溜池端馬場ニ乗馬有之、詰合ら兩人罷越ス、
一安藤源五左衞門見廻、
一夜五時門〆リ、
一門出切手五枚、御小人目付天笠鉢太郎ニ返却、
○中略、
五月十一日、晴、

一例刻交代、名前夫々ニ達、
一小遣茂七出る、
一仁杉八右衞門見廻リ相越候事、
一筆者蘭人、夕七時頃ら、溜池馬場おゐて乗馬有之、同七半時過、相歸候事、
一例刻門〆、

島田林三郎
雉岡小平太
古谷銹助
向方
秋山德右衞門
神田吉十郎

一門切手貳枚、消印之上、御小人目付齋藤榮助ニ返却、
同十二日、

一例刻交代、例之通名前達、
一小遣久助、
一朝五半時過、中島三郎右衞門見廻相越、
一筆者蘭人、夕七時頃ら、例之馬場ニ乗馬有之候ょ〻之處、延引相成候事、
一例刻門〆、
一門出切手十四枚、消印いゐし、御小人目付栗嶋彦八郎ニ相渡ス、
五月十三日、晴、

竹田平八
中島兵三郎
向方
綿脫豐次郎
柴田勘太夫
渡邊峯藏
川口彌一郎
向方
菱田兵助
岡田源三郎

一五時交代、
一名前書例之通達ス、
一小遣久助出る、
一由比万太郎見廻、
一夕七時頃、領事官并筆者共、溜池端馬場おゐて、乗馬有之、
一夜五時、門〆、見張所〆切、
一門切手四枚、御小人目付齋藤榮助に出ス、
同月十四日、晴、

クルチウス乗馬ノ際群衆ニ對スル取締

一例刻交代、名前書夫々に出ス、
一小遣定吉出る、
一服部孫九郎見廻、
一夕七時頃、筆者於溜池乗馬有之、返り懸ケ切通し邊に相廻り候事、
一蘭人乗馬之節、馬場内に多人數入込、指輪等貰候もの有之、役々附添罷在あゝら、外見不取締ニ相見候間、御取締向、見守番人に申付呉候樣御目付談ニ付、取締向申付置候得共、尚明日御出役之節、御心附之事、

中村佐七
渡邊峯藏
向方
天野喜兵衛
島田林三郎

一夜五時前、門〆り、
一門切手十一枚、御小人目付小澤勢十郎に返却、
五月十五日、天氣、夕刻雨、

一例刻交代、夫々に名前書差出ス、
一中田郷左衛門見廻り相越ス、
一蘭人乗馬之節、於場所取締向之義ニ付、前申送り御一覽之事、
一夜五時、門〆候付、見張所〆切、
一門出切手三枚、御小人目付鈴木和助に返却、
○中略、
同月十七日、雨、

安原鐵三郎
大竹常五郎
向方
吉澤仙四郎
大八木七兵衛

竹田平八
中島兵三郎
向方
綿脫豐三郎

一例刻交代、名前書夫々ニ達ス、
一蘭人乗馬之節、場所取締之儀、前申送御一覧之事、
一小遣久助出ル、
一安藤源五左衛門、見廻有之候事、
一例刻門〆、
一門出切手三枚、御小人目付鈴木卓太郎ニ返却、
○中略、
五月廿四日、曇、

一例刻交代、名前書夫々ニ達ス、
一小遣久助出る、
一服部孫九郎見廻る、

中村佐七
川口彌一郎
向方
天野喜兵衛
嶋田林三郎

柴田勘太夫
替夫代り
吉澤仙四郎

一夕七時頃ヶ、筆者蘭人溜池馬場ニ為、乗馬有之候事、
一夜五時門〆ニ付、見張所〆切、
一門切手六枚、御小人目付竹中半之助ニ出ス、
○中略、
五月廿六日、曇、

一例刻交代、名前達、
一小遣定吉出る、
一筆者蘭人夕八半時頃ヶ、溜池馬場おゐて乗馬有之、同七時過相済、
一秋山久藏、見廻有之候事、
一例刻門〆、見張所〆切、
一門出切手五枚、消印之上、御小人目付小澤勢十郎返却、
○中略、
五月廿八日、晴、

笹岡小平太
古谷銹助
向方
秋山德右衛門
神田吉十郎

渡邊峯藏

一例刻交代、名前書達、
一小遣茂七出ル、
一高橋吉右衞門、見廻相越、
一夕七半時過、溜池ゟゝニおゐて、筆者闌人乘馬有之、
一夜五時門〆、
一門切手五枚、御小人目付山本文之助へ返却、
同月廿九日、晴、

一例刻交代、名前書夫々に達ス、
一小遣久助出る、
一稲澤彌一兵衞見廻る、

中田海助
向方
菱田兵助
大八木七兵衞

中村佐七
川口彌一郎
向方
天野喜兵衞
島田林三郎

一夜五時、門〆リ、
一門出切手四枚、御小人目付小野益太郎に戻ス、

十七日 辛卯 鹿兒島藩士西郷吉兵衞（隆盛○後吉之助） 江戸ヲ發シ、歸藩ノ途ニ就ク。

六月七日、鹿兒島ニ著ス。

〔鎌田正純日記〕（○鎌田正夫所藏本）

五月十六日、曇天、寅、晝ゟ晴、出梅、
一今日四ッ八ッ致出勤候事、
一今朝西郷吉兵衞入來ニゐ候事、
一今晩西郷吉兵衞・有川七之助・堀仲左衞門入來、尤吉兵衞明日出立、暫時御國許之樣立歸、又々歸府之筈ニゐ、暇乞等いたし候事、

〔福井藩士橋本左内書翰〕（○橋本景岳全集所載）

○五月十七日（鹿兒島藩士）西郷吉兵衞宛

内用御直展、書付四通添、
以手紙得御意候、然者、昨日御來杖之節御約申置候御呈書一、並に御封物一爲持差出候間、御持歸之上、可然御披露可被下候、右要用申上候迄如此御座候、以上、

西郷吉兵衞暇乞ニ來ル

京都ノ事情

福井藩主ノ餞別

五月十七日

再伸、昨日ゟ御懇訪奉謝候、其節御賴之書付類取集差上申候、此外小拙手にて取調候者も御座候得共、其分は此節他借相成居候間、還候はば御同志君之内へ可差出候、右書付之中には、忌諱之條も有之、且　太閤之事甚惡敷認有之候得共、此は大に失事實居候、内實は太閤御聰明に相違無之よしに御座候、且又此頃にては、京師之蜂起九十四人黨、連中も大に崩れ立、纔八九人に相成候よし申來候、此等爲御心得御内々申上候、今日老降雨中御上途、嘸々御迷惑奉拜察候、此表之御用何成共承度奉存候、此麁紙並に雲丹、輕品に御座候得共、去年來御用も御賴之御事故、寡君より爲御餞別、貴兄へ御遣し被成度との御事に御座候、此段御承知可被下候、以上、

〔鹿兒島藩士　堀仲左衛門書翰〕（橋本景岳全集所載）

○六月二十六日橋本左内宛

橋本様　　堀（伊地知貞馨）拜

炎暑中御起居御安泰御奉職珍重奉存候、○中略、

六月二十六日

二白、大坂より西郷書狀參候、出足前多忙中、尊君御狀も拜見不仕、途中披見仕申候處、君公様より頂戴もの被仰付候儀にて、誠に難有次第、貴兄迄深御禮申上置呉候様申參候間、左様思召可被下候、いづれ近々拜顔可奉得貴意候、已上、

〔原田八兵衛書翰〕（橋本景岳全集所載）

○六月十六日橋本左内宛

御自披

拜啓、甚不順之候、○中略、小子も俗務紛々心ならず碌々罷在候處、毎度御丹誠御盡力之段、誠に感徹敬服仕候、賤弟事、度々罷出、御教示被下奉拜謝候、

（名古屋藩主徳川慶恕）扨尾慮之模様如何に御座候哉、定て昨夕迄には否御沙汰御座候半、何卒極密御示し可被下候、如何にも睫を燒くの切迫に候得ば、何處迄も尾慮御助け御一力に御丹誠之儀、爲天下奉仰望候、昨今御模様何分至密之御事ながら、大略御示諭可被下候、一昨日も西都より未御沙汰無之よしに承り申候處如何、今日は罷出度存候處、又々唯今より出掛候間、出前草々申上候、頓首、

六月十六日

くれ〳〵、御不快御大事可被成候、○中略、

橋本左内様　　原田八兵衛

御自披

西郷吉兵衛歸國ノ使命如何

（原註）「副書」

西吉西歸、いつ頃歸府候哉、又是は何事專務にて罷越候哉伺度候、已上、

〔鎌田正純日記〕○鎌田正夫所藏本

三月廿九日、曇天、巳、

○中略、

西郷吉兵衛數次鎌田正純ヲ訪フ

一今晩西郷吉兵衛入來、緩々相咄候事、

○中略、

四月十七日、晴天、戌、

○中略、

一今晩五ッ過ゟ西郷吉兵衛・堀仲左衛門入來、九ッ頃迄相咄候事、

○中略、

五月十日、雨天、申、

○中略、

一今晩西郷吉兵衛入來、緩々相咄候事、

○中略、

五月十四日、晴天、子、

一今日四ッ八ッ致出勤候事、

一七ッ前ゟ西郷吉兵衛・堀仲左衛門入來、跡ゟ仁禮雪庵ニも入來ニゐ、緩話ニ及、仁禮ニも暮前退去、外兩人も暮過退去ニゐ候事、

日下部伊三次ノ訪問

○中略、

五月十七日、雨天、卯、

一今日四ッ八ッ致出勤候事、

一七ッ後日下部伊三治入來、暫相咄候事、

橋本左内ノ訪問

○中略、

五月廿九日、晴天、卯、

一今日狀書ニ付、公私取込候付、別勤賴合候事、

一七ッ半頃越前藩橋本左内來訪、要用向相咄、日入前退去ニゐ候事、

〔土浦藩士大久保要書翰〕○久保來復所藏本如坐漏船居紀聞所載

○六月朔日

戊午六月朔、在阪土浦藩大久保要より書翰採要、

安政五年五月十七日

西郷吉兵衛歸國ノ途ニ就ク

六月九日西郷吉兵衛鹿兒島ニ著ス

一〇中略、〇薩州の西郷吉兵衛、四五日以前、急用ニ付下り候次相訪、同人話ニ、滿清イキリス与取合、以之外深入ゆゑ、大將名ハ不承、二人虜ニイタシ、本國へ送り候由、大敗軍と申事ニ御座候、此〇往々可患之至ニ御座候、近年之内不圖之患生〻可申儀と奉存候、

〔鹿兒島藩主島津齊彬直書〕〇公爵島津忠重所藏本島津齊彬公文書所載

〇六月九日　同藩江戸留守居　早川五郎兵衛へ

以早便申入候、愈無事珍重ニ存候、然は、西郷吉兵衛一昨日着、委細ニ承り、又越前方之文通有之相心得申候、〇中略、

六月九日、晝四ツ時、　五郎兵衛ニ

用事

〇本書ノ全文ハ、之ヲ六月九日ノ條ニ、收錄ス。

〔堀仲左衛門書翰〕〇橋本景岳全集所載

〇六月二十二日橋本左内宛

炎中無御病御奉職珍重奉存候、偖、時事相迫り何共御苦心之筈、此上御盡力之道、御働被下度、京邊へ十七日(五月)に兩策相立致都合置候間、自然　天聞には可及と奉存候間、成否は不可期事候得共、屈指相待事に御座候、右事實は、拜顏御直に可申上候、〇中略、何れ兩日中、以參旁可奉得貴意候、以上、

六月廿二日

橋本左内樣

二白、〇下略、

堀仲左衛門

十八日壬辰　幕府、砲術奬勵ノ爲、陪臣ノ大森村町打場武藏國荏原郡使用ヲ許可ス。

〔老中達〕〇東京帝國大學所藏本幕府沙汰書所載

〇五月十八日大目付等へ

五月十八日、一、備中守殿御渡、來ル廿一日觸、〇幕府沙汰書、島津家本安政雜集

五月十八日、堀田備中守殿御渡、大目付・御目付ニ、〇聞集錄

五月十八日、砲術修業之令、一、備中守殿、大目付ニ、〇還暦記殿御實紀

五月十八日、大森町打場拜借之儀ニ付、萬石以上以下ニ御書付、〇柳營實記

五月廿一日、一、大目付田村伊豫守ゟ、堀田備中守申渡諸向ニ相達候由ニ付、御城付共ニ、爲心得爲見申候書付寫、〇水戸藩御城書施防部塗壁建築

五月廿一日、〇中略、一、大御目付遠山隼人正殿ゟ、左之御觸書、御留守居ニ到來、堀田備中守殿御渡候御書付寫壹通、〇津山藩記錄

大目付ニ

當節之時勢、炮術之修業尤肝要ニ候間、御直參・陪臣ニ不拘、研究致〳〵、御國用ニ可備ヒ勿論之事ニ候、依之大森村町打場御据筒之儀、前々陪臣ニハ御貸渡不相成筈之処、以來ハ其主人ゟ相願候得ハ、御直參同樣、稽古之節拜借可被　仰付候、尤日限等之儀ハ、海防掛御目付ニ可被承合候、

大森町打場陪臣ノ使用ヲ許ス

右之趣、万石以上以下向々ニ可被相觸候、

五　月

（島津家本安政雜集　開集錄　泉恭院殿御實紀　柳營實記　水戸藩御城書海防部　邊蠻雜纂　津山藩記錄　公儀御觸留　鴨方藩記錄　安政年錄　高麗環雜記　御書付留　高崎藩御書附類　川越藩記錄）

〔大目付回達〕○侯爵池田伸博所藏本　公儀御觸留所載

回達ノ次第

○五月二十一日福井藩等江戸留守居へ

五月廿一日、大御目付中ゟ御達書、阿州樣衆ゟ到來ニ付、津山樣衆ニ致順達、

堀田備中守殿御渡候御書付寫壹通（上ニ掲グル巻中達ヲ指ス）相達候之間、被得其意、無遲滯順達、留より遠山隼人正方ニ、可被相返候、以上、

五月廿一日

松平越前守（慶永、福井藩主）殿

大目付

松平阿波守（蜂須賀齊裕、德島藩主）殿

松平薩摩守（島津齊彬、鹿兒島藩主）殿

松平三河守（慶倫、津山藩主）殿

御

松平兵部大輔（慶薩、明石藩主）殿

右留守居

〔大目付回達〕○子爵池田政保所藏本　鴨方藩記錄所載

○五月二十一日鴨方藩等江戸留守居へ

五月廿一日、

一、御隣樣衆より、大目付觸到來、松前樣衆ニ順達、

堀田備中守殿御渡候御書付寫壹通（上ニ掲グル巻中達ヲ指ス）相達候間、被得其意、無遲滯順達、留ゟ池田播磨守方ニ、可被相返候、以上、

五月廿一日

大目付

御例通

〔鳥取藩江戸留守居日記〕○侯爵池田伸博所藏本

安政五年五月十八日

五月廿一日、

○中略、

一大御目付中ゟ御達書到來、○中略、

但〳〵、大森村町打場ニ〆、砲術稽古之節、御直參同樣、陪臣ニも御貸渡之御達〳〵、

〔村垣範正公務日記〕○村垣範通所藏本

七月十九日、快晴、午後村雨、夕晴、午未風、

一今日出帆之處、逆風ニ付逗留、（ヒラヌシニ在リ）

○中略、

六月廿九日附、壹箱入、

○野州表狀一通、

○中略、

一炮術町打之儀ニ付備中守殿御渡御書付、

是ハ、御直參・陪臣差別ふく、大森村御据筒拜借被　仰付候旨、

〔久留米藩御内證記錄〕○伯爵有馬頼寧所藏本

五月廿六日、陰晴、○中略、

一大森村町打場御据筒、陪臣拜借之儀ニ付、別紙　公儀御觸書之趣（上ニ掲ゲル意中還ヲ讀ス）、御家中之面々爲承知、

向寄申傳候樣、頭中ヶ可申聞旨、岸相模より渡瀨平太夫ヶ、切紙を以申渡之、

但、御觸書之趣は、御勤向ニ有之、爰ニ略、

〔福岡藩在府家老書翰〕○候爵黑田長成所藏本　江戸御用狀所載

○五月二十八日在國同役宛

以御飛脚一筆致啓上候、

少將樣益御機嫌能被成御座奉恐悅候、於當御地

侍從樣　上々樣、益御機嫌能被成御座候、

○中略、

一大御目付衆ゟ、去廿一日、以御廻狀、大森村町打場御据筒之儀、前々陪臣ヶ者御貸渡不相

成筈之処、以來ハ其主人ゟ相願候得者、御直參同樣拜借可被

仰付旨等、委曲申來候、則寫差上之候、

○中略、

一右○中略、御書付之趣、爲心得縫殿ゟ大目付ヶ相達申候、

○中略、

五月廿八日　江戸御留守方

御國　惣　中　惣　中

〔鳥取藩江戸留守居日記〕

六月朔日、

一御家老ゟ三七郎宛、左之剪紙〇中略、到來ニ付、請書差出ス、

〇中略、

從

公義左之趣被仰出候間、左樣被相心得、此旨觸口之者共ニ後可被申渡候、以上、（上ニ掲ゲル老中達ヲ指ス）

六月朔日

〇附錄

〔如坐漏船居紀聞〕〇松代藩士山寺源大夫雜記　久保來復所藏本

當九日、深川越中島丁打場ニおゐて、紀州樣御家來森本岡右衞門ゟ申もの、紀州家砲術師範家之由、門弟數多有之、此度打心見ニ付、八日ゟ同所ニゐ四拾發打樣有之、九日、打殘り猶又打候趣、然処二拾四斤都合二拾發程も有之由、内一ツ何故哉、ボイスヲ打替候とて、門弟ニゐ繩を掛引候へ共ぬけ兼、師匠見兼ゲンノフを持參り、一人ハ繩を引、一人ハ玉を踏ミ押へ居り候處を、ゲンノフニゐ右師匠打候處、ぬけ候ちわいと相見え、火出火藥にうつり玉發〳〵、師匠胸板を打ぬゝき、外二人ハ少々言舌分り候得共忽チ死去、尤玉發し候ゟ直ニ外之玉にうつり、都合二拾發一時ニ連發、夫ゟ火藥櫃ニ移り、右火藥所屋根七間程之處燒拔ケ候趣、怪我人四拾人、右之内三拾人程、御屋敷迄飯り不申、途中ニゐ死去、但シ的達ニ戴セ自布ニて所々巻、大切之御のもの者縫家内湯て見掛候よし其外へも見掛候もの多分有之由、其外けゞ人何程ニ候哉、聢と不相分、尤　公邊御役人方御見置も可有之処、右變事之、俄ニ御延引、

右岡右工門と申仁、常々火藥櫃邊ニゐ烟艸用ひ候樣成事も有之、如何ニも疎漏成人ノ由、扨又ボイスの上を切レニゐ卷、夫ニ瀝青（チヤン）を塗り打候節、十文字ニきり候ゞ本法之処、紙ヲ一重ゟぶセ置候由、右故ゟ連發大變ニ相成候次第、誠ニ恐るへき儀ニ御坐候、既ニボイスを拔ク道具を、一人の弟子ハ取リニ參り候得共、師匠ハ夫ニも不構ゟゝる不手際、ボイス拔を取リニ參り候者と、幸ニ死を免ゝれ候由、

右と、桐畑土岐樣御子息樣委細御承知ニゐ、講武所ニ御出、蟻川賢之助ニ御話の由、多分ハ相違有之間敷、尙溢修へも頼置さり、實事相分リ次第可申上候、

戊午六月

江戸より來書抄、相澤龍太郎ト云、

〇中略、

一深川越中島ニ於て、大銃稽古有之候処、紀州樣御家來五十四五人大怪我、尤即死ハ十五六人も有之候ゟ〳〵、久保喜代馬同所ニ居合候ゟ〳〵ニ御座候、いつきも不容易事共ニ御座候、

七月十九日

明石藩主松平慶憲兵部大輔　幕府ノ諮問ニ對ヘ、外交措置ニ關シ、異見ナキヲ陳ブ。

〔明石藩主松平慶憲答申書〕〇昨夢紀事所載

安政五年五月十八日

深川越中島町打場ニ於ケル和歌山藩士ノ不慶

○五月十八日老中へ

五月十八日、○中略、

一、松平兵部大輔殿ゟ御依頼ニより御相談被進候上、今日御指出ニ相成御請書、左之通り、

先年神奈川幷下田ニおゐて御取結相成候亞墨利加國條約之趣、具ニ京都ニ被仰進候得共、不容易御變革ニ付、各存寄御尋、衆議御參考之上、條約爲御取替之方ニ御決着、別段御使を以、

別段所存ナシ

叡慮御窺ニ相成候處、別紙之通

勅答被仰出候、素より戰爭之

叡慮は不被爲　在趣ニ候得共、方今万國形勢一變之折柄、御處置之次第ニ寄候ゐは、忽仇讐之姿と相成、御全國之御大事ニ及ひ、國家之御爲不相成、可被休

宸襟期も被爲　在間敷、先般京都へ被

仰立候外御扱方無之と　思召候、既に昨年來衆議御尋之上には候得共、

勅諚之趣も御坐候ニ付、猶篤と勘辨仕、存意之程早々申上候樣、御達之趣、奉得其意候、此度之御一擧、實國家之御重事、　御配慮被爲　在候段、深奉恐入候、何分　公武之御都合宜、御雙方御安心之御見詰相立候樣奉祈願候外、別段申上候存意無御座、舊臘申上候通、只

々御下知ニ隨ひ、忠節を相勵可申奉存候、

五　月　　松平兵部大輔

萩野山中藩主大久保教義長門守書ヲ幕府ニ上リ、藩帑窮乏ノ狀ヲ陳ジ、借用金返納延期ヲ再請ス。尋デ、幕府、之ヲ許サズ。

〔萩野山中藩願書〕○子爵大久保教尚所藏本萩野山中藩記錄所載

○五月十八日勘定奉行へ

五月廿四日、○中略、

一、御勘定奉行土岐攝津守樣ゟ呼出ニ付、清野吉之助罷出候処、先日左之書面差出置候処、御附札ニゐ御差圖有之、

奉願候口上覺

長門守追々拜借罷在候御貸附方御役割金去巳年返納金、是迄度々御猶豫奉歎願、猶又當月六日、御日延奉歎願候処、御附札を以、猶豫之儀と難相整、此節早々納方可仕旨、被　仰渡奉畏候、先達ゐ中ゟ度々領分ニ上納金申付候得共、頻年之違作、其上昨年と近來稀成洪水ニゐ、堤押切、田畑大荒ニ相成候村々多分有之、極大破之場所と、一年限ニゐ普請難相成場所と國役御普請奉願、此節願之通被　仰付、難有仕合奉存候、右之外村々荒所捨置候ゐと、亡所永荒ニ相成候と眼前之儀ニ付、當節起道開發普請等ニゐ、莫大之物入相嵩、領分村々

領内村々困窮

極困窮仕、調金急速ニ難相整、延引ニ相成候間、何卒勝手方ニ為調金可仕と、種々心配手段仕候得共、昨今之処、實ニ不融通ニ為、何分行屆兼、當惑至極奉恐入候、尤領分ゟ當月下旬迄ニと無相違出金可仕旨申越候間、再應奉願候茂奉恐入候得共、何卒出格之以御憐愍、當月下旬迄御猶豫被成下置候樣奉願上候間、御聞濟之程偏ニ奉願上候、以上、

當月下旬迄猶豫ヲ請フ

幕府延納ヲ許サズ

御名家來　清野吉之助　吉野此右衛門

午五月十八日

御附札

書面、去巳年分無利足幷元利金三ヶ年割利金調達殘納方之儀と、此間茂相達候通、猶豫と難相整、此節早々納方可被取計候、

御附札

〔荻野山中藩願書〕（○荻野山中藩記錄所載）

○五月十八日勘定奉行へ

五月晦日、（○中略）

一、御同所樣ゟ御呼出ニ為、今日松下武八郎右序罷出候処、先達為差出置候御勝手方ゟ之日延願ニ、御附紙を以、御差圖左之通、

中泉役所貸附金

奉願候口上覺

遠州中泉

御役所御取扱御貸附金、長門守勝手入用ニ、先年拜借仕罷在候処、去ル卯年十二月中、半高辨損被　仰出、殘半高無利足年割上納之積り、納方之儀と、是迄之納方半減たる為き旨被仰付、難有奉承伏候、是迄御割合通り、年々返上納仕來候処、近頃領分幷江戸屋敷迄茂、震災ニ為難澁仕候処、去ル辰年八月、大風雨ニ為屋敷内住居向、家中長屋ニ至迄大破ニ相成、潰レ長屋等茂御座候次第、種々難澁仕候ニ付、無是非御猶豫奉願、昨巳年納高相滞奉恐入候得共、以後之処と何ゟニ茂心配仕、御割合通り上納可仕候、然ル処、今般右御役所御掛り御場所替ニ相成、此節滞高早々可相納旨御達御座候処、前顯之次第ニ御座候間、中々以早急之上納屆兼候ニ付、何卒格別之以御憐愍、當暮迄御猶豫被成下置候樣、此段偏奉願上候、以上、

本年末迄返納猶豫ヲ請フ

御名家來　清野吉之助　齋藤九十九　吉野此右衛門

午五月十八日

安政五年五月十八日

幕府猶豫ヲ許サズ

御附札

書面御代官林伊太郎取扱御貸附去々辰年分無利足金調達殘納方猶豫と難相整、此節早々納方可被取計候、

○附錄

〔荻野山中藩記錄〕○子爵大久保敬尙所藏本

宿場助成金上納ノ延期願

五月廿日、雨、

○中略、

一下御勘定所に、御留守居代粕谷端平左之願書持參差出候処、日延猶豫難相成、其上此度伊太郎樣御支配所替に付、旁何程上納を申義、明日に義可申上旨之御差圖有之趣之、

林伊太郎樣御取扱宿場助成金上納之儀、今廿日迄御日延奉願置候に付、拜借村之もの共、精々無油斷調金之義心懸候得共、此節到る融通不宜難澁仕、何分に義當節上納金出來仕兼、誠に以奉恐入候得共、出格之以御憐愍、當月晦日迄御猶豫被成下候へゝ、如何に義仕、上納金調達仕、差下シ可申旨、右御日延之儀に付、願度段領分役人共か申越候、兼々御達之趣も御座候儀に付、重々恐入奉存候得共、右に付、願之通御日延御猶豫被下置候樣仕度、此段奉願上候、以上、

御名家來　粕谷端平

五月廿日

國役金上納延期願

一右御同所に、左之願も差出候旨、是又御用人申聞、

長門守領分村々國役金、去巳年分不納に付、此度御達之趣奉恐入候得共、爰許にも取調仕兼候に付、早速申遣候樣共、往返日數今日迄御日延奉願置候処、昨年中度々之水災にも村々彌增困窮仕、何分取集兼重々奉恐入候得共、可相成義御座候へゝ、來月十日迄納方御猶豫被成下候樣奉願度旨、領分役人共か申越候、依之御日延御猶豫奉願候、

御名家來　粕谷端平

宿場助成金上納再延期願

五月廿日

○中略、

同廿二日、曇、

○中略、

一左之願、下御勘定所に差出、

林伊太郎樣御取扱宿場助成金上納之儀、昨日迄御日延奉願置候処、拜借村々此節別も融通不宜困窮仕候間、當月晦日迄御日延奉願候処、此度伊太郎樣御支配所替に付も、納方不仕候も、御日延御聞濟難被成下候段、被仰渡之趣奉恐入候、右に付、村方に申遣候も、日間義相掛候事に付、猶爰許差操金拾五兩、來ル廿五日相納可申奉存候、右御達之趣、早速領分に申遣候樣可仕奉存候、此段奉願候、以上、

御名家來　清野吉之助

五月廿一日

十九日　幕府、京都所司代本多忠民（美濃守○岡崎藩主）ニ、歸東ヲ命ズ。

〔土浦藩士〕大久保要書翰〕○久保來復所藏本如坐漏船居紀聞所載

○六月朔日

戊午六月朔、在阪土浦藩大久保要より書翰採要、

安政五年五月十九日

急遽本多忠民東下

一○中略、○岡崎侯、十九日之御奉書、廿五日御到來、去廿九日御出立相成申候、御地ニ茂も、定あいろ〳〵御評判被成候半、分り兼候儀ニ御座候、當方愚察ニハ、亞墨利加ノ一條に仰含御儀ニあ、御呼上ケと奉存候、五日之御用意ニあ御發駕と申儀ハ、比類ふき御急と奉存候、多分ハ御供岡崎表より御供仕候との事と承申候、

本多忠民東下ノ事情

〔形勢雜記〕○肥後藩國事史料所載

内密秘書之内書抜

一夷蠻之國々御所置振、且亞夷使節申立候假條約之儀ニ付あ者、當春以來、堀田備中守殿以下役々上京致、堂上之面々と應接數ヶ度有之、何分不容易一條ニ付、深被爲惱　宸襟候御次第を以、御三家以下諸大名之赤心被聞召度　叡慮被爲　在、當三月廿日　勅答被仰下候ニ付、早速關東表ニあ夫々諸大名に茂被相達、不日ニ上表等相揃可申候處、右書面類持參之義者、一体當表備中守殿始役々上京致候儀者手重之取扱ニあ、却あ京都おい て騷々敷相成候哉、何ま所司代在京、且武家之傳　奏も被在候事ゆへ、別段之　御使上京ニと不及、宿次飛脚を以差登し、所司代傳　奏衆談判之上、被爲及　奏聞候方可然哉之旨、掃部頭殿・老中其外役々内評之節、伊賀守殿被申別候付、一同右之手續手輕く可然哉と同意之處、右ニあと余り輕卒之御所置振ニて　叡慮之程も難計　奉恐入候事故、所司代本多美濃守を被呼下、得と及内談、何分諸事平穩相成候樣取計可然旨ニあ、則御三家以下諸大名之上書持參美濃守上京、傳　奏衆と示談之方ニ茂可有之、宿次を以差登候義者、餘り不敬之取計ニ相聞ヒ候段、掃部頭被申出、實以尤至極ニあ、則五月十九日美濃守參府可致旨、連名之奉書被差登、差急キ歸府之儀ニあ、無程諸向上書相揃候ハヽ、美濃守御暇被下持參上京致候積り、

〔飯泉喜内書翰〕○宮内省圖書寮所藏本　武家吟味書所載

○六月十一日山科正恒宛

五月十三日之尊書、去ル九日相達拜見仕候、○中略、

一珍説（夫ニ改ム）一ト綴御廻し申候、御内覽之上、もし藤井（祖馬守、西圓寺家家士）も望候ハヽ、御内見被成遣被下（マヽ）候度存候、

○中略、

先ヒ貴報旁申上度、如斯御座候、恐々謹言、

六月十一日認

出雲守樣　　喜内拜

猶々、○下略、

〔飯泉喜内書翰〕○武家吟味書所載

○六月十一日附山科正恒宛書翰別紙

五年午七月二日、但夕出、飯泉友輔　珍説、中山忠能履歴資料

珍説

（細田正映、老中）佐倉侯歸府、色々風説之内ゟ、今度ゟ誰ゟ上京ふるへ〳〵といふゟ、（松平親凰、高松藩主）讃州侯と申説ふり、當年御暇年ふれ共、御滯府被仰付候者、其爲と申事ふり、又（井伊直弼）彦根なりといふゟ、御大老の御使ゟ參る事ハあるましく、（酒井忠義、小浜藩主）若州侯ふるへしといふ、是ハ長く所司代を勤て、京師ニゟ受もよき方と承りゝれも、是等相當の説ならんゟといふ、いや左候ゟも、又咄しも新らしく成るといふもの故、矢張先々の手續ゟて、佐倉侯ふるへしと、樣々氣をもみて、小田原評定ふる内ゟ、（五）去月廿四日、（本多忠民）岡崎の御家來、（脇坂安宅、老中）龍野の亭ニ被召呼、去ル十九日、御奉書出、出府被仰出候旨、心得として御達有之候趣、御兩役其外、夫々御吹聽ありし事、速ニ傳へ承りぬ、されと如何ふる御用召ふらんといふゟ、樣々の説の内ゟ、溜格といふ説あり、又無程御養君被仰出ニ付、西丸御老中といふ説あり、又御勝手六ツかしく、御勤續成り兼、無據御内願ニゟ、御役御免といふ説ありて、評判區々ふる處、或人云、今度岡崎ゟ御召しゟ、御役替ゟても無之、矢張當春の一條之事之由、御三家以下諸大名の衆議被　聞召度との義ニ付、席々存寄

大老老中上京ノ議

本多忠民東下ニ就イテノ世評

御尋之御答書、其外不殘纒メて、所司代へ相渡、言上ニ及ぬとの御評議之趣、夫故立歸り出府と申事ニ承り候也といへど、又或人いのゟも密々承りたるゟ、アメ一條

叡慮伺として、老中態々役々引連レ上京致したるが一躰間違也、夫ゟ爲ゟ所司代もあるま、傳奏もあるまゝれど、時勢無御據御變革被遊候ゟ、爾々之由を入

叡聞候樣所司代を以、兩卿へ御達候得者可然義を、事々敷伺定いゟし候ニ付、彼是と事六ヶ敷相成り、不容易〳〵との御事ゟて、素より不容易事故、五六ヶ年已來、評議ゟ評議を詰て、御警衛其外品々御變革被成候儀之處、陸々ゟけも御存無之公卿・堂上迄、内々騷立候事抔も有之由ニゟ、遂ニ先般之如く

勅答被　仰出、埒明らぬ事ニゟ、小供の使ニ參り候も同樣の御あしらひニ付、又々上京いたしふゞ、尚更御難題可被仰出間、ゟざ〳〵上京ゟ不及、諸家之上表其外引つゝらめて、次飛脚を以所司代ニ遣し、夫より傳　奏衆を以言上いゟし、是非共御許容可有之、左モ無之候ゟも、一時ゟ戰爭ニ相成、奉安

宸襟候事難相成候間、此段得と御勘考有之度旨申上候積り之由、然るゟ彦根侯、夫ゟ餘り御不敬ニゟ宜ゟる間敷と、色々議論有之といへ共、上田侯（松平忠周、老中）勢ひニゟ、佐倉も關宿（久世廣周、老中）も不及、仍ゟ漸々次飛脚を止メて、岡崎を呼下し、委細を是ゟ託して言上せん事ゟなりゝると承る、

さて〳〵驚入たる御評定ふり、彌實説ならバ、公武御不和之基とも可相成、不容易事ニ付、程克御和議有之樣いたし度事ニ候也、

午七月七日、　久ニ借寫、○中山忠能履歴資料

（中山忠能履歴資料）

〔土山武宗日記〕○宮内省圖書寮所藏本

五月廿五日、

一所司代本多美濃守殿、御用之儀有之、參府可被致旨、被　仰出候段、御附衆達有之、

本多忠民東下ノ觸達

〔六角博通雜記〕○子爵東園基愛所藏本

五月廿五日、今日所司代本多美濃守、從關東奉書來ト云々、

〔平田職修日記〕○宮内省圖書寮所藏本

五月廿五日、○中略、

一傳聞、所司代本多美濃守、關東ヶ依召、關東江來廿九日ヶ被歸由也、

二十九日京都出立ノ豫定

〔久我建通日記〕○宮内省圖書寮所藏本

五月廿六日、晴、時々雨、當番予、宿中山、

一、昨夕申來、所司代美濃守事俄ニ參府之旨申來、何等之義歟不分明之、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記　宮内省圖書寮所藏本

五月廿六日、晴、

○中略、

一、傳聞、本田（マヽ）美濃守所司代、一昨日自關東奉書來、

〔小倉藩京都留守居三澤十太夫書翰〕○伯爵小笠原長幹所藏本　小倉藩記錄所載

○五月二十九日　在國同藩家老　小宮四郎左衛門等宛

一筆啓上仕候、

○中略、本　美濃守樣御儀、　御用召之御奉書、去ル廿五日御到來ニ付、今廿九日京都被成御出立候、此段爲可得貴意如斯御座候、恐惶謹言、

五月廿九日　　三澤十太夫

四郎左衛門樣

監物樣

二十九日本多忠民出立ス

〔如坐漏船居紀聞〕○松代藩士山寺源大夫雜記　久保來復所藏本

五月廿六日付、江戸來書抄、

一○中略、○京都所司代も、御用召のよ〳〵、西丸御老中出來ト申事ニ御座候、實否如何ゥ、

本多忠民東下ノ世評

戊午六月朔付、江戸より來書、

一○中略、○岡崎様御召〳〵も、何ゟ御不首尾、夫とも御出來ニて、溜詰位と申事、

〔九條家家臣〕島田左近書翰〕○子爵澤澤榮一所藏本井伊家史料書集錄所載

○五月〔澤根藩士〕長野主膳宛

御深密之中之深秘

○中略、

一所司代本印御用之義ニ付被召返、京都空居ニ相成、加之御返答及遲々候てハ、此節柄い
ろ〳〵上中共氣合相變り、扨々　殿下ニも御苦心御察上可被下候、何事も及遲滯候てハ
不宜之由、前件御治定之上、
勅答之御次第御遲滯ニ相成候てハ、實以不宜段、早々吳々言上有之旨被仰出候事、

〔鹿兒島藩主〕島津齊彬直書〕○公爵島津忠重所藏本島津齊彬公文書所載

○六月九日〔同藩江戸留守居〕早川五郎兵衛へ

以早便申入候、愈無事珍重ニ存候、然ゝ、西郷吉兵衛一昨日着、委細ニ承り○中略、堀田も危き
よ〳〵ニ存申候、又吉兵衛承候へゝ、本多美濃召候よ〳〵、如何ニ候哉、堀田之代りゟ、西の老
ゟと存申候、其外之樣子、細々承り可申遣候、○中略、井・上閣申合セ候ゟゝ、是迄之諸役其外、
大一變相違無之、能々聞合セ可申遣候、○中略、

勅答急ヲ要ス

本多忠民東下ト世評

六月九日、晝四ッ時、

用　事　五郎兵衛ニ

〔村垣範正公務日記〕○村垣範通所藏本

七月十九日、快晴、午後村雨、夕晴、午未風、
一今日出帆之處、逆風ニ付逗留、（シラヌシニ在リ）
○中略、
○野州内狀壹通、六月廿九日附、（竹内保徳、箱館奉行）
○中略、
織部ゟ野州へ内狀之内、五月廿二日附、（堀利忠、箱館奉行）
○中略、
同斷、六月二日附之方、
所司代急呼戻〳〵○中略、之由、○中略、申來ル、

〔湯蠻雜纂〕○水戸藩士芳根伊豫之介手錄公爵德川圀順所藏本

一酒井若狹守ニ、佐倉侯之宅ニ能出候樣達ニ相成候所、不快之由ニて斷りニ相成候へ共、
押ゟ被參候樣ニとの事ニて罷出、其後一日置て登　城致候趣、如何之密旨を傳とるや分

酒井忠義ニ對スル世評

り兼ね共、此度京都伺直〜之義を話さゞさる趣風聞す、此人所司代勤役中、京師之御覺も宜敷故、夫等之所を以被仰付〜ふらんと云、尚又此節所司代本多侯へも、召之奉書出候沙汰故、何ゞ再勤ニて、右之事取斗を被仰付事と見へ有りと云、（御城付說、○後ニ聞ク、京師之方之事、酒井侯承諾ス）との風聞有り、

本多忠民酒井忠義ニ對スル世評

〔忠成公手錄書類〕○宮内省圖書寮所藏本

○上略、

一諸司代此度被　召候、是者何ゞ貶謫と申事ニ御座候、惡敷者ゞハ隱居ふゞとも、高松之弟ニて、高松當時大ニ口ヲきゝ候間、拵へ付候て、溜格位ニ相成ゝも不相知と評判仕候、何失火之事ニ付ての咎と相聞候、其表ニても、如何之評判ニ候哉、其代ニ酒井若狹守再勤ト申、初大老へ被談候處、一旦歸り後、家來不承知ニて、斷ニ相成、又龍野へ談候處、是又嚴敷斷候付、無據若州へ談ニ相成、若州再勤ニて登りの者、右御返答も兼て被登候と噂致申候、如何御座候哉ゝとも不相分、猶追々可申上候、何分兩公ゟ大老と尾州へ之御文通出來候者、御いそき可被下候、草々頓首、

（上記之御使）

（未書）「六月六日」

二十日　新清和院（欣子内親王○光格天皇中宮）十三回忌法會ヲ、泉涌寺・般舟三昧院ニ修ス。

御十三回忌逮夜佛事

兩寺御代香

御忌先期執行セラル

〔非藏人日記甄〕○東京帝國大學所藏本

五月十九日、癸巳、陰晴、午後雨、議　奏當番大藏卿殿、傳奏廣橋大納言殿參侍、

一前新清和院御十三回忌御逮夜、於兩寺被行御法會、

〔久我建通日記〕○宮内省圖書寮所藏本

五月十九日、朝晴、午後雨、當番裏松、

一今明日、於兩寺有御法會、予兩寺御代香并詰、武傳万里小路ゝ、依爲御代香、著衣冠奴袴本供ゝ、兩寺へ菓獻上候、出門卯半刻前、歸宅未半刻斗ゝ、詰并御代香之義如例、

○中略、

一禁中へ饅頭百一折、兩役組合獻上、催坊城殿ゝ、相濟之旨被示候、

〔德大寺公純日記〕○臨時帝室編修局所藏本

五月十九日、晴、午後雨下、

一新清和院十三回御忌、來月御正當之處、御引上、

一兩役組合、禁中斗井籠一荷、朧曼頭百獻上、催坊城殿、兩寺へ菓獻、御機嫌伺參入之事无之、予依神事、兩寺不令備進、

〔菅葉〕○五條爲定日記　宮内省圖書寮所藏本

五月十九日、癸巳、雨、○中略、爲榮當番、三番詰宿等參仕、就前新淸和院御十三回忌、來月御正當之處、御引上、明日被行、於兩寺、被行御逮夜御法事、

般舟三昧院法事次第

般舟院

着座公卿

前源大納言 有長　醍醐中納言 忠順　冷泉宰相 爲理

散華殿上人

泰顯朝臣　資生　大江俊堅

奉行

（々）

泉涌寺法事次第

泉涌寺

着座公卿

（々）

散華殿上人

有仲朝臣　光輔　源常典

奉行

經之

泉涌寺法會次第

〔藏人細川家日次案〕○細川常典日記 維新史料編纂會所藏本

五月十九日、癸巳、晴、午後雨、

一前新淸和院十三回　御忌泉涌寺御法會、予參向也、辰刻比出門、途中狩衣差袴、先着觀音寺、暫時休息之後、改衣躰、參景福殿、巳刻過之、奉行藏人弁參着之上、相屆、御菓十片獻備、

一午剋斗御法事被始、光明三昧、僧侶十八口三度ニ撤、進退如例、午半刻御法事畢、

一御廟參詣、散華四五位依遲參、御法會相濟後、令參詣、未刻前退出、再歸觀音寺、被出酒肴、申刻比彼亭出門、夕景歸家、

一　着座公卿

綾小路前大納言　今城前中納言　新宰相中將 定功朝臣

散華殿上人

有仲朝臣　光輔　源常典

一同事、般舟院大江俊堅參向、

〔土山武宗日記〕○宮內會圖書寮所藏本

五月十九日、

安政五年五月二十日

一新清和院樣來六月十三回御忌當月御引上、御逮夜御法事　勅會於兩寺被行、同役虫鹿豐州被詰、

〔高辻以長日記〕○子爵高辻宮應所藏本

五月十九日、早天晴、後曇、午後雨、申比甚雨、○中略、

一卯半比、泉山へ廣君御參、御輿、麻上下、掃部・織部、女中一人、

〔曇華院日記〕○維新史料編纂會所藏本

五月十九日、癸巳、陰、

一般舟院に、清山殿御參詣、湛堂、付添大炊、

新清和院樣十三回御忌御引上御法會に付、

葩三拾片　被備之、

〔中山績子日記〕

五月十九日、

御機嫌御よし〳〵、新清和院樣御十三めくり御引上御法事御代香、おもてより、御備御くわし下計まいる、御備兩寺へ百疋つゝ、三人ゟ、あせちゟ・宰相ゟ・いよゟ・越後ゟ・能登ゟより二百疋、近衞左府ゟよゟ、御くわし二色上ゟ〳〵、御返事出る、

御代香御供物

先期執行ノ理由

御代香御供物

七回忌ノ例ニヨル

〔庭田嗣子心覚日記〕○伯爵庭田重行所藏本

五月十九日、

新清和院樣御十三めくり、來月ふゝら、御神事あらせられ候やゝれられは候也へ、御引上て、今明日、兩寺にて御法事行れ候、兩寺の御代香議奏衆參らせられ候、御内義ゟハふし、所々ゟ御機嫌伺御菓子獻上有、御精進よてハあらせられは候也、兩寺へ、兩大すゝゟ・長橋ゟより、金百疋つゝ、ゟきち・嗣子・いよゟ・越後ゟ・のとゟ・右五人ゟ、二百疋つゝ、御備へに上候、局の侍使也、左府ゟ、御機嫌伺られ候、御杉折御くゟし上られ候、

〔近衞家奥日記〕○京都帝國大學所藏本

五、十八日、壬辰、快晴、

一御機嫌よゝ、

一新清和院樣御十三回御忌、來月御正當にゟらせゟゝ所、御引上、明日・明後日ゟらせゟゝ、右に付、御七回之節之通、梅仙院ゟ御たゝめ、御まゝゟゟゟハゝ候御たつふゝら、梅仙院ゟ御所勞中の御事、こふさも、一ゝふゝ〳〵御もやゝ〳〵ゆへ、御非時御まゝゟゝにて、送らせゟゝ思〳〵めゝふゝら、御所勞中、御取ゟけ何ゝに御こゝろとも思〳〵めゝ候故、昨日、内々應修院殿へ、御相さんに、花井遣され候所、思〳〵めゝ上□□のよゝ、夫ゆへ梅仙

慶山寺ニテ佛事行ハセラル

院ゟ御ゝ〜め御七人、三仲間三人に、御非事料千五百疋送らせゝ、

一今日、慶山寺にて、

新清和院様御法事ゟらせゝに付、ゟゟて御位牌殿御寄附後も、

御參詣ゟ被ゝ〜度思〜め〜候御事、ゟさ〜〜辰剋御出門にて、御參詣ゟそハ〜候、

光格天皇様
新清和院様
に御花一筒ツヽ、御備遊ゝ〜候、薩髪ゟゟさ、御參詣にて、御對面ゟそハ〜候

ゝ、

○中略、

一靈かん寺ゟ宮様ゟ、御書にて、

新清和院様御年忌御見舞仰進ゟ、御書添にて候、眞心院様御ゟゟさつ仰進ゟ、御ちとう

漬進ゟゝ、御庭ノ枇杷も進ゟゝ、則御返書進ゟゝ、

一梅きん院ゟ御ゝ〜めゟ、御備にとて、御干くゟ〜一ゝこ御上、御こゝろゟ〜に、御重之内

御ゝも〜・御よ〜め御上ゝ、

○中略、

十九日、癸巳、雨、

一御機嫌よ〜、

一新清和院様御十三回忌御引上、今日表御居間にて、御ゟつ者ゟらせゝ、藥師山被

召、御法事ゟらせゝ、

一様庵千英
鉄樹庵大英
仙源
大梁

右に付、綾小路前大納言ゟ、石井前中納言ゟ、めされ候所、御斷に付、御非時之御品々、

御重組にて、送らせゝゝ、

一靈ゟん寺宮様・瑞龍寺様に、

新清和院様御年忌御見舞に、

水きん粽一折ツヽ、御出にて進ゟゝ、

一東門様ゟ、御くゟ〜一ゝこ、

无上覺院様より、御茶一ゝこ、

ゟ鯰の宮様ゟ、御さゝをハ〜、

眞心院樣ゟ、水玉一折、
右之通、進られ候、

〔非藏人日記坤〕○東京帝國大學所藏本

五月二十日、甲午、雨、當番議奏加勢三條中納言殿、傳奏衆參侍、万里小路殿不參、
一前新清和院十三回　御忌御當日也、來六月分御引上、於兩寺、昨今被修御法會、
一從御內儀、朧饅頭一蓋賜之、

〔德大寺公純日記〕○臨時帝室編修局所藏本

五月廿日、雨下、
一昨今兩寺有詰、御法會有之、

〔菅葉〕○宮內省圖書寮所藏本

五月二十日、甲午、雨、當番、四番詰宿等參仕、於兩寺、被行前新清和院御法會、

般舟院法事次第

般舟院
着座公卿
大炊御門大納言家信　新中納言季知　源宰相中將通富
散華殿上人

泉涌寺法事次第

保建朝臣　基正　源常典
奉行
（ヲ、）
泉涌寺
着座公卿
大炊御門大納言家信　新宰相中將定功
散華殿上人
胤房朝臣　賴德　大江俊昌
奉行
經之

〔藏人細川家日次案〕○維新史料編纂會所藏本

五月二十一日（ヲ、）、甲午、雨、
一前新清和院御忌御當日也、此日、泉山俊昌參向、予般舟院參向、卯刻ゝ、召具如例、奉行參勤之上、申屆、辰刻斗
御法事被始、僧侶十二口三度ニ撤、辰半刻比御法事了、直歸宅、
一　着座公卿　奉行長順朝臣

般舟院法事次第

安政五年五月二十日

大炊御門大納言　三條西中納言　源宰相中將

散華殿上人

保建朝臣　基正　源常典

〔土山武宗和宮御用掛記〕○京都府立圖書館所藏本

五月廿日、

一新清和院樣十三回御忌御法事御當日ニ付、泉涌寺・般舟院、

金二百疋宛臺乘御下ケ札　御花壹筒宛御下札

右御備、女中方參詣之節、御傳言ニ、

〔曇華院日記〕○維新史料編纂會所藏本

廿日、甲午、雨、

一泉涌寺ヲ、清山殿御參詣、湛堂、付添大炊、

新清和院樣御十三回忌ニ付、

葩三拾片被備之、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記　宮內省圖書寮所藏本

五月二十日、强雨、○中略、

今日　新清和院十三回御忌、御正當來六月二十日、然而御引上、當月於兩寺、被修御法會云々、

〔高辻以長日記〕○子爵高辻宜麿所藏本

五月廿日、夜來甚雨、巳比ヶ止、又午後雨、四条有溺死人由、○中略、

一般舟院へ、卯刻少シ過、廣君御參、掃部・織部、麻上下、巳比御內御玄關迄御歸、

一直ニ泉山へ御參、未半過御歸ニ、南一・掃部・織部も、下々饅頭被下由、（マヽ）至

〔平田職修日記〕○宮內省圖書寮所藏本

五月廿日、○中略、

一新清和院尊儀、昨今於兩寺御法事有之、奉行尋可加哀御正當ハ來月之、也、

〔中山績子日記〕

五月廿日、雨、

御機嫌よく、御代香長はしゐ兩寺、越後ゐも參らるゝ、御花・御くわし・御燒香、女中ゐも、

御ふしミの人々ゐ、御花、近衞ゐへ御杉折御くゐし三色、敏宮ゐよりも、玉水上ゐれゝ、こ

ふさより御くゐし一折、○中略、ゐちこゐ・大すけやしきへ下り、

當日御代香等

〔庭田嗣子心れ日ゐ〕○伯爵庭田重行所藏本

近衛忠熙當日般舟院泉涌寺參詣

五月廿日、

新清和院様十三めくり、御引上御法事御當日ふて、終日御内々御精進、嗣子も精進致候事、

御代香兩寺へ、長とし及・越後ゟ御參り、御とふ・御燒香とる、女中御香てん上候人々ゟ、御花一筒つゝ、兩寺へ御備へ、所々より、御機嫌伺、御くゆし献上有、女中衆ゟも、御くゆし進上、敏宮及ゟも、御くゆし上られ候、こふさゟもとる、梅仙院及初へ、御尋ゟ御くゆし一折十五掉被下候、御黒戸へも、御參りゟらせられ候、

〔近衛家奥日記〕○京都帝國大學所藏本

五、　廿日、甲午、雨、

一御機嫌よゝ、

一夘剋御出門、般舟院・泉涌寺へ御參詣、午半剋、還御、

一御所ゟ御ゟゝにて、今日御法事ニつき、御せつゟ御水くゆゝ一箱、御拜領遊ハゝ候、

一柳原前宰相及御參、御對面ゟらせゟゝ、

一綾小路前大納言及御參、御對面、

御尊牌前御拜礼、暫御とふゝ、御退出、

一德大寺大納言様御參、御對面暫御とふゝ、くもゝ成候、

法會參會ノ諸公卿

○中略、

一瑞龍寺様ゟ、昨日之御返書進ゟゝ、御見舞ニ御重之内、御そもゝ二重進ゟゝ、

○中略、

廿一日、乙未、

○中略、

一東門様ゟ、御法事ニ付、般泉兩日の御拜參ノ御礼、御水くゆゝ一そこ、上ゟゝ、

〔議奏裏松恭光通達〕○内閣文庫所藏本　武家書翰往來所載

○五月十三日禁裏附大久保忠良へ

前新清和院十三回　御忌於般舟三昧院御法會

逮夜　十九日

着座公卿

綾小路前大納言　　醍醐中納言

冷泉宰相

散華殿上人

倉橋左馬頭　勘ヶ由小路中務少輔
北小路差次藏人
當日　二十日
着座公卿
大炊御門大納言　三條西中納言
中院宰相中將
散華殿上人
高野左兵衛佐　石山右兵衛權佐
細川新藏人
奉行職事
葉室頭辨
同於泉涌寺御法會
逮夜　十九日
着座公卿
綾小路前大納言　今城前中納言

野宮宰相中將
散華殿上人
慈光寺右馬頭　外山宮內大輔
細川新藏人
當日　二十日
着座公卿
大炊御門大納言　正親町中納言
庭田宰相中將
散華殿上人
池尻左兵衛權佐　錦小路大和權介
北小路江藏人
奉行職事
中御門辨
右之通被　仰出候、仍爲心得申入候、以上、
五月十三日
安政五年五月二十日

大久保大隅守殿　　裏松大藏卿

〔議奏中山忠能通達〕○武家書翰往來所載

○五月十八日禁裏附大久保忠良へ

前新清和院十三回　御忌於泉涌寺御法會

當日

着座公卿

庭田宰相中將

理

八條宰相

替

右之通被　仰出候、仍爲心得申入候、以上、

五月十八日　　中山大納言

大久保大隅守殿

〔久我建通日記〕○高内倉圖書寮所藏本

五月十日、雨、午後晴、當番予、○中略、

諸儀凡テ七回忌ノ例ニ據ル

先例調査

一來二十日前新清和院十三回御忌ニ付、窺　御機嫌、獻物有無共、總ゐ可爲御七回忌之節通、但、來月御正當之處、當月ニ御引上之事、觸示之事、兩内覽申入、以大御乳人申入、相役申入、武傳令噂、自餘未取斗候、

○中略、

一來二十日御年回之節、御代香男方候哉、七回忌之節いこの、可取調、以大乳人、長橋局ゟ被尋問、口向取調候處、嘉永五年六月十九日御代香、議奏御役中烏丸中納言勤仕之旨、自餘無之、以上之事、以女房申入候、

○中略、

十一日、晴、當番坊城、○中略、

一前新(マヽ)和院御年回諸向總觸之事、今日當番卿被取斗之、

○中略、

十七日、午刻斗雷雨、午後晴、入夜再雷雨、當番予、○中略、

一前新清和院十三回御忌ニ付、廿日兩役伺御機嫌之有無取調候處、嘉永三年七回忌之節、廣幡基廣公御役中ニ候閑尋候處、一切無之由之、廣橋光成卿へ尋候處、當日伺御機嫌ハ無之、兩寺へ葩獻上之義ハ有之旨被示候、仍相役へ其旨申入候、以狀之、

一同上ニ付、般舟院ヘ本願寺、兩寺ヘ東本願寺等、拜禮之事、願書三通、武傳被附留記、以駿河伺定、願之通被申出、武傳申渡候、（内覽濟由ヘ、）

右之事、光成卿被示候、從武傳内覽有之候ヘとも、當役方も再經内覽、流例之由ヘ、段々先文及吟味候処、

安政二年六月廿九日　前新皇嘉門院三十三回忌

同　三年十一月十五日　光格天皇十七回

同　五年正月廿一日　仁孝天皇十三回

以上、從當役再度内覽無之、直ニ及披露、以其例如右取斗候、

○中略、

一明後十九日二十日等御法會、武傳詰如何ニ相成候哉、廣橋ニ尋候、（此比、万里小路引籠、廣橋一人故ヘ、）廣橋ニも此事甚々心配之由、自然武傳兩人共、不候詰例有之候ハヽ宜候閉、勸修寺ヘ被尋置候由ヘ、其上ハ兩公ヘ申入、如何可仕哉ト伺候旨、左候ハヽ、万里小路別勅ニも可相成歟云々、咄有之ヘ、

廣橋此比准后御產前ニ付、自然之節、進退甚々六ヶ敷故ヘ、

十日　暇ニ付、別勅除服無宣下例、

嘉永元年九月廿六日、俊明卿（末男死去、）被引籠、十月七日出仕、

○中略、

十八日、晴、當番中山、○中略、

一明十九日二十日之内、御代香之事、爲念以表使、女房衆ヘ尋候処、小時、明十九日兩寺御代香、男方可勤仕旨被申出、（尤當役勤仕ヘ、）當番卿以四折、以表使被伺如例、予明日詰參仕候閉、予ヲ被伺、小時被申出、予ヘ被傳候、御請申入、（御香ニ裏被出、）御花使名簿被渡候、出門卯半刻ト申入置了、

一御精進之事、口向取調候処、無御精進之儀旨、番頭代山城申出候、（御七回忌例、）

一万里小路今日別勅除服　宣下之旨、當番被示候、

〔菅葉〕○五條爲定日記　宮内省圖書寮所藏本

五月十一日、乙酉、晴、○中略、就來二十日前新清和院御十三回忌、窺御機嫌、獻物有無共、御七回之通可心得旨、坊城中納言被申渡、四辻中納言被演說之旨、自菅三位被示、以上觸于相番中、

〔長谷信成日記〕○續新史料編纂會所藏本

五月十一日、酉、晴、一、從五条來、交野ニ傳達了、

來二十日、

前新清和院十三回御忌、窺　御機嫌、献物有無共、總ゑ可爲御七回忌之節通事、

但、來月御正當之処、當月ニ御引上之事、

右之通坊城中納言被申渡候由、四辻中納言被演説候、尤番々且小番――也、

五月十一日　泰聰

新菅三位殿

到來之儘、入見參候也、

順長

同日

右之通被示候、仍入見參候、御七回忌之節、窺　御機嫌參入、献物共無之候、右御承知可

給候、御回覽後、可返給候也、

爲定

同日

〔土山武宗和宮御用掛記〕○京都府立圖書館所藏本

五月十一日、○中略、

一新清和院樣御十三回忌、來月御正當之處、當月ニ御引上、來十九日廿日、於兩寺御法事被

仰出候ニ付、嘉永五年御七回忌之節、御備之通ヲ以、相伺候樣、藤御乳ヲ以申出、奥へ右

和宮御先例ノ事取調

京大夫ヲ以、相伺候樣、御七回忌之節之通、兩寺ニ金二百疋宛、御花一筒宛、御備有之候

趣申出、藤御乳ヲ以申上、

○中略、

十八日、○中略、

一新清和院樣十三回御忌御引上御法事、明後日兩寺ニ御備、金二百疋宛、御下ヶ札二枚等、

奥へ小大夫ヲ以上ル、御臺ゟ御入魂申入、料紙中鷹二枚、小大夫へ乞出〳〵、日記役へ申渡

爲認、以上□〳〵如例、同上御花、兩寺へ一筒宛、當朝相廻候樣申付置候段、是又小大夫へ

申入置、右御花中筒相廻候樣、下掛りニ申渡、御下札二枚相渡、

一同上ニ付、御機嫌御伺、御菓子御獻上之儀、相伺候樣、過日藤御乳ヲ以申出、奥へ尾張ヲ

以申入候處、

新清和院樣ゟ、御在世

和宮樣御幼稚ニ而、御ふ〳〵ゟも御薄く被爲在候、且御内々御獻上之御事、旁御獻上ニ不

及旨、同人ヲ以申出、藤御乳ヲ以申上、

○中略、

一新清和院樣御年忌ニ付、薙髪梅僊院殿始、女中方七人ニ、粽貳拾五把被下、此儀先日藤御

乳ゟ申談有之、下掛りへ申付置ゝ、

〔曇華院日記〕○維新史料編纂會所藏本

五月十一日、乙酉、晴、

一澤村出雲守ゟ來狀、

○中略、

別紙

來月十九日廿日

新清和院御十三回忌御法事、當月十九日廿日御引上御法事被　仰出候間、御七回忌之通、御心得可被成候、

○中略、

十七日、辛卯、晴、

一新清和院樣御年回ニ付、梅仙院殿御始ゟ、御志粽十五把、奥向ニ被遣之、右ニ付、御尋と〳〵て今日左之通被遣之、

御菓子料金貳百疋　梅仙院殿御始へ　御尋　金百疋　薙髮三仲間中ニ

〔雅俗日簿〕○宮內省圖書寮所藏本

五月十一日、晴、○中略、

一言渡番頭四辻中納言、從議奏坊城中納言承云々、

來二十日　前新清和院十三回御忌ニ付、獻物有無共、總而御七回忌之通可心得云々、但、來月御正當之處、御引上之事、

○中略、

十三日、陰晴不定、溽暑如燒、○中略、

廻文到來、　來二十日

前新清和院十三回御忌ニ付、如先例爲窺御機嫌不及參入、禁中江爲窺御機嫌、御菓子臚饅頭百、

近習一同組合獻上之事、催甘露寺中納言、

右領掌候、仍申入候也、　五月十二日　忠禮

右之通被示候、御獻上否承度候、—同日　公績

山科三位殿承候、一同獻上候、宜願入候、—八幡少將江順達了、

○中略、

十八日、晴、

自八條相公、文書到來、其儀、明後二十日泉涌寺着座、新清和院十三回御忌、來月二十日御引上云々、白生單被爲着用如何云々、尤被爲着用、可無子細返答了、

四月五月白生單可然歟、殊歳六十四云々、老卿旁可無難乎、爲念窺　家公之処、尤白生單可然思召云々、

白生單著用ノコト

〔橋本實麗日記〕○東京帝國大學所藏本

五月十二日、丙戌、雨下、曉頭霽、○中略、來二十日、前新清和院十三回御忌ニ付、窺御機嫌有無、總而可爲七回御忌之節之通、且、來月御正當之處、當月御引上等之事、以廻文被示了、追又右御機嫌伺、献物御菓子臘饅頭百、催甘露寺黄門領掌旨被示、一同献上之加承傳達了、

橋本家供物ノコト

廿日、甲午、從去夜雨下、終日不止、昨今日前新清和院十三回御忌、於兩寺有御法會、奉行長順朝臣・經之等云々、御正當雖來月、被引上了、依之、爲窺御機嫌、御菓子臘饅頭百、一折、近臣組合、令献上了、窺御機嫌參上之儀無之、

〔殿樣御玄關日記〕○長谷信篤家日記　維新史料編纂會所藏本

五月十三日、亥、晴、

一來月廿日、　前新清和院十三回御忌ニ付、窺　御機嫌、献物有無總而可爲御七回忌之節通事、

但、來月御正當之処、當月ニ御引上之事、右以一紙、坊城中納言被申渡候、尤小番未勤之親族中ニも可申傳、同卿被示候、仍申入候也、

五月十一日　　公績

○中略、

右之通被示候、仍申入候、御回覽可返給候也、

同　日　　實德

御相番御連名

〔高辻以長日記〕○子爵高辻宣齊所藏本

五月十四日、晴、○中略、

一新清和院　近々故、圓通寺ニ、已比ゟ廣君御參、御仲間ゟ、御供養ニ、

幕府、駿府町奉行大久保忠寛右近將監○後伊勢守ヲ禁裏附ニ、目付鵜殿長鋭民部少輔ヲ駿府町奉行ニ補ス。

〔幕府沙汰書〕○東京帝國大學所藏本

五月廿日、○中略、

鵜殿長鋭ヲ駿府町奉行ト爲ス

大久保忠寛ヲ禁裏附ト爲ス

駿府町奉行
大久保右近將監跡

禁裏附
都筑駿河守跡

右於　御前、被　仰付之、

○中略、

御座間

御役替

小普請奉行次席
御目付
鵜殿民部少輔

駿府町奉行
大久保右近將監

席之儀者、是迄之通、取來御足高、其儘被下之、

鵜殿民部少輔

右於新部屋(十畳敷)前溜、中務大輔申渡之、

○安政年錄・高麗環雜記・水・温恭院殿御實紀ニモ、マタ本書ト同一内容記事アリ。

〔堀田正睦日記〕○東京帝國大學所藏本

五月廿日、

大久保忠寛禁裏附ト爲ル

鵜殿長鋭駿府町奉行ト爲ル

○中略、

一四ツ御太鼓ニ而出宅、登　城四半ニ貳寸前、

一伺泊方伊豆守、

一召出有之、○中略、掃部殿初一同、二之間御椽ニ列居、月番被伺

御前、會尺ニ而、

禁裏附
都筑駿河守跡

駿府町奉行
大久保右近將監跡

駿府町奉行
大久保右近將監

小普請奉行次席
御目付
鵜殿民部少輔

右

御直々被　仰含之、相濟掃部殿初一同、横

御目見、

○中略、

一退出九半打三寸廻り、

〔内藤信親日記〕○子爵小笠原長生所藏本

五月廿日、

○中略、

一四ツ御太鼓ニ而出宅、

一登　城、四半ニ二寸前、

一御機嫌、御側衆日向守方伺之、

一御錠口明、被爲

召候旨、泊方若狭守申聞、大和守先進、掃部殿初一同、奥ニ廻り、太公望御杉戸際列居、但、扇子ハ御用部屋ニ取置、

一御座間御上段

御着座、泊方左右ニ而、月番御柱際外、掃部殿初一同、例之通斜ニ着座、月番被伺

御前、三人目備中殿ニ會尺、同人より若年寄ニ會尺ニ而、御用人出、

大久保忠寛禁裏附任命

禁裏附　都筑駿河守跡

駿府町奉行　大久保右近將監　小書請奉行次席

鵜殿長鉞駿府町奉行任命

駿府町奉行　大久保右近將監跡

右

御直々被　仰含之、相濟掃部殿初一同、横

御目見、例之通畢而引、

一廻り出掛ケ、○中略、引掛ケ中之間ニ而、御役替之面々、御礼謁之、

○中略、

一御用相濟、使遣、一同退出、九半打三寸五分廻り、

〔土山武宗日記〕○宮内省圖書寮所藏本

五月廿九日、

一

右都筑駿河守跡御役被　仰付旨、御附衆被達候段、同役回狀申來、

大久保忠寛任命ノコト五月二十九日京都ニテ觸達

〔久我建通日記〕○宮内省圖書寮所藏本

五月三十日、晴、午後白雨、當番予、宿坊城、

一大久保右近將監事、都筑駿河守跡役ニ被申付候旨、美濃守方申越事、附武士書取、武傳披

御目付　鵜殿民部少輔

大久保右近將監

露、以駿河申入、小時被返出、返却候、

〔議奏記錄〕○宮内省圖書寮所藏本

六月十四日、陰、晩晴、○中略、

一武傳被附、内覽濟、

都筑駿河守爲跡役大久保右近將監被　仰付候、爲御心得申進候事、

五月

且、去月可達之處、於武家落脫理、武家々來狀、御當役迄被爲見候、其旨演說申入置候、披露濟申渡候、

鵜殿長鋭轉役ノ事情

大久保忠寛進ンデ禁裏附ト爲ル

〔昨夢紀事〕

五月廿日、御目付鵜殿民部少輔殿、駿府町奉行へ轉役せられたり、是ハ去年伊賀殿の鈴木藤吉郎ゟ金を借られたる事を直諫ニ及はれ、伊賀殿も理に責られて其金を返されたる事あり、兼ゟ此事を遺恨に思はれし折柄故、彼ノ廢立を謀るの黨に連坐せられて、遠國に遷されたりと聞えたり、是迄の駿府町奉行大久保右近將監ハ、禁裡附都筑駿河守殿の跡に轉せしなり、此人頗忠直有志の聞えあり、　橋公推戴の餘り、西城に立せられん後も、　公武の御間柄御大事なる故、已レ　禁裡附とふりて御間柄を調和せんとて、皆人の嫌忌せる役場を内願せられたりとそ、

幕府有司轉任ノ事情

〔湯蠻雜纂〕○水戸藩士芳賀伊豫之介手錄公爵德川圖書所藏本

一此節除目數々あり、正議の士を不敬、又廢立抔と名目を付除くの勢と云、土岐・鵜殿の外轉も皆然りと云、是ハ○中略、上田侯（松平忠固）の策之由ふれ共、内實ハ松平對馬守近臣謀主ニて、建儲の論を立〜者を、廢立を謀るの意ありと云ふ〜、其事を附會〜、箚子を政府へ出〜、そゟ本ニて黜竄頻ニ行ハると云、五月末迄ニハ八十許人も、外補あるへ〜との事ふり〜、如何ふるゆへよや、五月末ゟ至り小靜まふゟり、併道路以目の勢ニて人々自安せす、又眞ニ正議の士ハ志操益壯ふりと云、

大久保忠寛品川ニテ發病

〔内藤信親日記〕○子爵小笠原長生所藏本

五月十三日、○中略、

一大久保右近將監ニ、自分月番中、奉書差出置候処、同人今日着府いゟ〜候得共、品川驛より病氣ニ付、月番にも以使者着屆差出、今日登　城不致候得共、着之儀ゟ無急度御取次相模守ニ委細嘶置候、

但、今日登　城無之ニ付、如本文、

〔野宮家書類〕○子爵野宮定茂所藏本

○中略、

一駿府町奉行大久保右近將監被召、當十三日江戸着之由、

禁裏御附と申說、是ハ太分壹人之由ニ候、

一淺野和泉守、御勘定奉行と申說ニ候、

大久保忠寬轉役ノ風評

〔國事記〕○水戸藩士豐田允手錄 公爵德川圀順所藏本

午五月十六日、金孫より來る、

聞記 日下部伊三次弟鹿志村準藏之、

○中略、

一大久保右近將監被召之処、今十三日歸府有之、御用ハ未相分候事、

但、禁裏附歟、大目付・御目付・御勘定奉行抔、風聞有之よ〳〵、

駿府町奉行大久保忠寬著府

○中略、

一大久保右近將監殿、御用いまゝ不相分候事、

○中略、

五月廿三日、高橋方來ル、卽日寫了、

五月十八日

追加○下略、

〔村垣範正公務日記〕○村垣範通所藏本

七月十九日、快晴、午後村雨、夕晴、午未風、

一今日出帆之處、送風ニ付逗留、（シラヌシニ在リ）

○中略、

○野州内狀壹通、六月廿九日附、（竹内保徳、箱館奉行）

○中略、

織部方野州へ内狀之内、五月廿二日附、（瀧利忠、箱館奉行）

○中略、

○在府大名、再應之存念心指、上杉外小名一兩人、不都合之儀申出、外御旨意通り、○中略、

鵜殿民部駿町何故歟、○中略、大和殿御引之處、御出勤ニ成候よ〳〵、（久世廣周、老中）

其他模樣品々申來ル、

同斷、六月二日附之方、

○中略、大久保右近御附、

安政五年五月二十日

○中略、申來ル、

〔福岡藩在府家老書翰〕○侯爵黑田長成所藏本江戸御用狀所藏

福岡藩士鵜殿長鋭等轉任ヲ藩地ニ報告ス

○五月二十八日在國同役宛

以御飛脚一筆致啓上候、

少將樣益御機嫌能被成御座奉恐悦候、於當御地

侍從樣　上々樣益御機嫌能被成御座候、

○中略、

一御勤之廉書拔差上之候、尤御勤御先例、朱書之通御座候、

○中略、

五月廿八日

江戸御留守方　惣　中

御國　惣　中

○中略、

本文御用狀之内ニ見ル、御勤之廉書拔寫

○中略、

一御目付鵜殿民部少輔殿、駿府町御奉行被

仰付候旨、五月廿日聞書ニ相見申候、

御使者

〔萩野山中藩記錄〕○子爵大久保致尙所藏本

〔朱書〕「一種三百疋」

五月廿六日、曇、○中略、

一御目付松平彈正（正之）樣ニ、是迄鵜殿民部少輔樣御賴之処、御轉役ニ付、跡御用向、已來御賴被成度、御使者を以、左之通御贈被成候旨、是又御用人衆申聞、

干鯛　一折　　御同所樣

御樽代　貳百疋　　御用人ニ

金百疋

〔小倉藩江戸案文〕○伯爵小笠原長幹所藏本

鵜殿長鋭轉役ニツキ大久保家用賴變更ノ件

五月廿七日、○中略、

一御目付松平彈正樣此度御用御賴被仰込候付、御太刀一腰・御馬代白銀三枚被進、幷御同人樣御用人兩人御目錄金貳百疋充被下置候、前格之趣を以宜取計之旨、御留守居ニ申渡候、

但、鵜殿民部少輔樣御轉役跡、

〔飯泉喜内書翰〕○宮内省圖書寮所藏本武家吟味書所載

○六月十一日山科正恒宛

○上略、

一五月廿日後之御役替、其外御養君御内意御掛り等之事、藤井氏ニ認廻し候間、御申出し御覽可被遊候、尤同人ニも、其趣申遣し可申候、

○中略、

○大久保右近將監、御附被仰付候得共、爾來病氣ニ付引籠居候由、上京覺束ふく御座候、

○中略、

先ゝ貴報旁申上度、如斯御座候、恐々謹言、

六月十一日認

出雲守様　　喜内拜

猶々、○下略、

〔幕府沙汰書〕○東京帝國大學所藏本

七月十三日、○中略、

大久保忠寛病氣ニテ赴任セザルベシ

鵜殿長鋭赴任

時服三　羽織　　小普請奉行次席　駿府町奉行　鵜殿民部少輔

駿府ニ御暇被下(イニ付)、拜領物被　仰付、御序も無之ニ付、　御目見不被　仰付候、諸事可念入旨　上意候、

右於芙蓉間、掃部頭・老中中務大輔列座、紀伊守申渡之、

○安政年錄・溫泰院殿御實紀ニモ、マタ本書ト同一内容記事アリ。

〔大久保忠寛手控〕○子爵大久保立所藏本

文泰院様御代、私御小性相勤罷在、御様子伺居候處、凡一ヶ年三度程ッヽ、其外臨時折々、京都ニ被爲　進物有之、右御品御取極ニ相成候節ゝ、御上段ニ御並置、御服も御改、御手御突被遊、御改御坐候事、

但、御品ゝ敢御手重之御品ゝ申ニも不相伺候得共、其時々珍敷御品等、全　御實意より被爲　進候様奉伺候、

一妃嬪老年之者も、人數ニ加居候間、時宜ニ寄、兩人位ゝ御增被爲　進、且御誕生被爲在候節々、

徳川家齊等ノ朝廷尊崇

御男子樣之節三百兩、
御女子之節貳百兩も、御腹に關東より被下候ハヽ、御名儀相立可然旨、肥前守申聞候事、
一思召ニあ、折々御金等被爲
進候御事御坐候とも、
文恭院樣　御代抔之樣、御内々被爲　進無之あと、全
御手元之御足ニと不相成候由、是亦肥前守吳々申聞候事、

時務之儀公卿御尋等有之候節
心得方

大久保忠寬ノ素懷、

一外夷御處置之義と、寛永以來、鎖國之御法ニ相成候處、諸蠻蒸氣船之類發明、航海得自在、加之火器精功相極候ニ付あと、鎖國之御法と時勢難被爲遂、依之被爲應時宜、諸夷貿易御許、追々大船御製造ニ相成候、御國よりも、諸邦に御船被差遣、富國强兵之術御盡、萬國日之御船印仰見候樣、可被遊外無之御時勢之事、
一海防筋之儀等、御伺と申義と不可然哉ニ奉存候、御處置御取極ニ相成候上、被爲進仰候と格別、萬機御任ニ相成居候處、當今ニ至御伺と相成候あと、却あ　御懸念御生シ可被遊哉と奉存候事、

右等之儀申上候と、恐多御坐候得共、私此度之御役、身ニ取候あハ大任至極不堪恐怖ニ、赤心より申上候儀ニ付、何卒御憐察被成下、可然御諭奉願候、

五月　　大久保右近將監

儲君之儀も、堂上方品々御說も御坐候樣風聞承之候、右等萬一御噂御坐候も、右と小臣抔之可存筋ニと無御坐候間、關東思召之程ハ難計候得共、全私丈之心底と、世評とと大ニ違候あ、當今之御急務とハ更ニ不奉存、未御壯年之義故、御誕生之程も難計、且御養君御極不被爲　在候あと、御差支と申謂不奉存、　御幼年より奉見上候處、　御失德与申上候義と、素より不被爲　在、下情等御十分ニ　御通被遊兼候義と、老若衆役々御補申上候得と、當今之御大業御遂被遊、御安心ニ可相成と奉存候旨、私際之御答可申上哉ニ奉存候事、大廣間へ御役人面會不可爲在候、○以下缺ク、

幕府、令シテ陪臣ノ蕃書調所ニ就學スルヲ許ス。

〔老中達〕○伯爵堀田正恒所藏本公儀被仰出留所載

○五月二十日大目付等へ

五月廿日、御案詞方達、伊賀守樣御達之御書付寫壹通差出、左之通、○公儀被仰出留

五月廿日、伊賀守殿御渡、（マヽ）日觸、○幕府沙汰書（局津家本安政雜記）

午五月廿日、松平伊賀守殿御渡、大目付・御目付江、○聞集錄

五月廿日、○中略、一、伊賀守殿、大目付江、○溫恭院殿御實紀

五月廿日、○中略、大目付・御目付江渡候書付、○内藤信親日記

大目付江

藩書稽古之儀、去々辰年（安政三年）十二月中相觸置候處、此節ゟ万石以上以下陪臣之儀茂、稽古御差許相成候間、兩文典句讀相濟、格別執心之者共ゟ、藩書調所江罷出稽古可致候、尤其主人々々ゟて、厚ク世話致し、手重ニ不相成樣取扱可申候、委細之儀ゟ、古賀謹一郎江可被承合候、

兩文典句讀修了ノ諸藩士ノ藩書調所ニ就イテ就學スルヲ許ス

右之趣、向々江可被相觸候、

五月

右書付、伊賀守渡之、○内藤信親日記

（幕府沙汰書　島津家本安政雜記　聞集錄　溫恭院殿御實紀　德川幕府書類觸留　高崎藩御書附類　川越藩記錄　安政年錄　高麗環雜記　御書付留　内藤信親日記）

〔老中達〕○公爵德川家順所藏本御城書拔書拾遺所載

○五月二十日水戸藩等城附へ

五月廿日、松平伊賀守ゟ、常阿彌を以御城附江、一紙ニゟ相渡候書付寫、○水戸藩御城書物防御ノ事雜纂

御三家　御城附江

藩書稽古之儀、去々辰年十二月中相觸置候處、此節より万石以上以下陪臣之儀も、稽古御差許相成候間、兩文典句讀相濟、格別執心之者共ハ、藩書調所江罷出稽古可致候、尤其主人々々ゟて、厚く世話致し、手重ニ不相成樣取扱可申候、委細之儀ゟ、古賀謹一郎江可被承合候、

五月

右之通相觸候間、可存其趣候、

〔水戸藩士横山甚左衛門書翰〕○公爵德川家順所藏本御城書拔書拾遺所載

○五月二十日（同藩士）太田誠左衛門宛　横山甚左衛門

太田誠左衛門樣

以手紙啓上仕候、松平伊賀守殿ゟ、常阿彌（贊ヘノ誤ナ指ス）を以御城附共江、一紙ニゟ相渡候（上ニ掲グル老中ヨリ城附ヘ達ス書付ヲ指ス）御書付壹通、則差出申候、以上、

五月廿日

〔大目付廻達〕○侯爵池田仲博所藏本公儀御觸留所載

○五月二十三日福井藩等江戸留守居へ

安政五年五月二十日

五月廿三日、大御目付中ゟ御達書、阿州樣ゟ到來、津山樣ニ致順達ス、

松平伊賀守殿御渡候御書付寫壹通相達候之間、被得其意、無遲滯順達、留ゟ田村伊豫守方ニ可被相返候、以上、

（上ニ掲グル老中ヨリ大目付ヘノ達ヲ指ス）

五月廿三日

松平越前守殿（慶永、福井藩主）
松平阿波守殿（蜂須賀齊裕、德島藩主）
松平薩摩守殿（島津齊彬、鹿兒島藩主）
松平三河守殿（慶倫、津山藩主）
御
松平兵部大輔殿（慶憲、明石藩主）（池田慶德、鳥取藩主）

右留守居

大目付

〔大目付廻達〕○子爵池田政保所藏本鴨方藩記錄所載

○五月二十三日鴨方藩等江戸留守居へ

五月廿三日、一、御隣樣衆より、大目付觸到來、松前樣衆ニ順達、

松平伊賀守殿御渡候御書付寫壹通相達候間、可被得其意、無遲滯順達、止ゟ遠山隼人正方ニ可被相返候、以上、

（上ニ掲グル老中ヨリ大目付ヘノ達ヲ指ス）

五月廿三日

御例通り、

大目付

〔津山藩記錄〕○子爵松平康春所藏本

五月廿三日、陰、折々小雨、

○中略、

一大御目付田村伊豫守殿ゟ、左之御觸書御留守ニ到來、

（上ニ掲グル老中ヨリ大目付ヘノ達ヲ指ス）

〔津山日記〕○子爵松平康春所藏本

六月十六日、晴、

○中略、

一東武去ル二日出、早幸便御用狀到來、

上々樣益御機嫌能被成御座候旨、且又左之通申來、

一蕃書稽古之儀、去々辰年十二月中、相觸置候處、此節より万石以上以下陪臣之義も、稽古御差免相成候間、兩文典句讀相濟、格別執心之者共ゟ、蕃書調所ニ罷出、稽古可致旨之御觸書、大御目付田村伊豫守殿ゟ、去ル廿三日、御留守居ニ到來之

旨、

一右ニ付、大坂去ル十二日出、柳仙太郎・柴田權之助ゟ送り狀到來、尤御用使一人、飛脚請持歸候處、箱根御關所過書失念、江戸表ニ立戻過書請取、五日出立ニ〆來坂之旨、但、奥村牧夫義、京都表御用有之、出役罷在候付、本文之通、

〔鳥取藩江戸留守居日記〕○侯爵池田仲博所藏本

五月廿三日、

一大御目付中ゟ御達書到來、○中略、

但し、藩書調所ニ、陪臣之儀も、稽古御差許之御達〻、

〔萩野山中藩記錄〕○子爵大久保教尚所藏本

五月廿五日、折々雨、

一松平伊賀守樣御渡御書附寫、御同席樣御廻狀ニ〆御到來之儀、御用人衆ゟ爲見候、

○五月二十日、老中ヨリ大目付等ヘノ達、下ニ掲グルヲ以テ之ヲ略ス。

〔久留米藩御內證記錄〕○伯爵有馬頼寧所藏本

五月廿七日、晴、○中略、

一藩書稽古之儀ニ付、別紙　公儀御觸書之趣、御家中之面々爲承知、向寄申傳候樣、諸頭中久留米藩聽藩中ニ通達

ニ、可申聞旨、岸相模より渡瀨平太夫ニ、切紙を以申渡之、

〔福岡藩在府家老書翰〕○侯爵黑田長成所藏本　江戸御用狀所載

○五月二十八日在國同役宛

以御飛脚一筆致啓上候、

少將樣益御機嫌能被成御座奉恐悅候、於當御地

侍從樣　上々樣益御機嫌能被成御座候、

○中略、

一大御目付衆ゟ、去廿三日、御廻狀を以藩書稽古之儀、此節ゟ万石以上以下陪臣之儀も、稽古御差許相成候旨、委曲申來候、則寫差上之候、

一右○中略、御書付之趣、爲心得縫殿ゟ大目付ニ相達申候、

○中略、

五月廿八日

御國　惣　中　　江戸御留守方　惣　中

〔福井藩士本多飛驛書翰〕○橋本景岳全集所載

○五月二十八日　同藩士　橋本左內宛

一翰致啓上候、○中略、次に弊子道中無異儀致歸着候、乍慮外御放情被下度候、誠に詰中は萬端御介抱に相成、御禮不知所謝、○中略、先は一筆御禮旁御見舞如此御座候、恐々謹言、

五月廿八日　遠齋

景岳賢兄

二伸、○中略、

三白、洋學之儀も、去る二十五日に、振出しに相成申候、左樣御承知可被下候、以上、

〔村垣範正公務日記〕○村垣範正遺所藏本

七月十九日、快晴、午後村雨、夕晴、午未風、

一今日出帆之處、逆風ニ付逗留、（シラヌシニ在リ）

○中略、

六月廿九日附、壹箱入、

○野州表狀一通、

○中略、

一蕃書稽古之儀ニ付伊賀守殿御渡御書付

蕃書稽古之儀、陪臣も不苦旨、

萩野山中藩主大久保教義長門守　藩士ニ諭シテ藩帑窮迫ノ狀ヲ告ゲ、財政釐革ニ關スル意見ヲ徵ス。

〔萩野山中藩主大久保教義諭書〕○子爵大久保教尙所藏本　萩野山中藩記錄所載

○五月二十日藩士へ

舊來勝手不如意之処、近年種々物入打續、格外之及大借、家政迄茂屆兼候樣相成、是迄樣々仕法取立候得共、一同承知之通減借之道も無之、時々借用を以其場を取賄候事故、借付彌相嵩及難儀、家政も相亂候ニ付、昨年申聞候通　御本家御家來拜借之上、家政改革之見込ニて嚴敷取調候処、借財六万兩余ニ相成居、分限を遙ニ立越、何分ニ茂手段之道無之、公務初家中之扶助茂出來兼、誠ニ以當惑之到ニ付、有浦元右衞門儀、小田原表迄も罷越、及賴談吳候處、彼地ニ茂厚御配意茂被成下候得共、近年引續候天災、多分之御物入、加之昨年格外之出水故、莫大之御增借ニ被爲及候趣ニ付、御融通も出來兼候由、實ニ無御據次第、其上最初相願候節、金銀御融通ハ聢与御斷も有之候儀、押茂可申出樣無之、重役共茂種々勘辨致し候得共、此上凌之術無之、唯々當惑之旨ニ申出、日々時々ニ茂儲与差支、何分取續之道不相見、上下之難儀及今日候間、自分ハ何程嚴酷之取縮ニ茂茂不厭見込ニ付、一同に茂厚賴入候事故、銘々家事同樣ニ深勘考致し、向後取續之道可有之哉、下々迄存寄之程、聊

藩債六萬兩ニ及ブ

藩士ニ財政整理策ヲ徵ス

之儀ニ茂爰書面ニ致し差出可申、可然心附も有之候ハヽ、速ニ相用度、家之浮沈と上下一致一和之勢力ニ依候事故、妻子共迄篤ゟ申聞、舊習之仕癖を改、一貫之省略相立候通勘辨も可有之哉承知致し度、委細之儀と猶家老共ゟ可申聞候、

五月廿日

御家中江

〔荻野山中藩家老達〕○荻野山中藩記錄所載

○五月二十日藩士へ

五月廿日、

今般

御直ニ被　仰出候通、御家政初御番向御改革被遊候　思召ニ茂、夫々取調被　仰付候処、年來御不如意之御臺所ニ付、專御借用を以取賄候間、積累之御借財相嵩、御分臺を遙ニ立越候、今日之御凌之道爰無之、

御公務と勿論、御家中之御扶助爰被遊兼候程之御場合ニ陷り候間、聊ニ茂爰御凌之道取立申度、御勝手御役ニ爰樣々勘辨之上、嚴敷御省略之道を見込候得共、別帳之通御大借ニ有之、差當り御融通金無之候茂と、御法難相立差支候ニ付、兼茂其邊之儀と御斷も有之候得

本家小田原藩主大久保家亦財政ニ窮ス

藩士ニ意見ヲ徵ス

共、儲と御差支之御場合ニ付、押茂

御本家樣ゟ申上、猶小田原表迄爰種々及御賴談候処、

御本家樣ニ茂爰近年異國船渡來之度々、御人數被差出御入用差湊、加之天災打續、追々御增借ニ被爲及、御差支之中、昨巳年、御領分格外出水、御田地多分之流失故、猶又御增借ニ相成、御家中之御扶助爰如何可相成哉、樣々御取調之折柄、

此方樣御凌御賴談申出候處、厚御配意と被成下候得共、前書之次第ニ付、小田原表ニ茂爰御手段無之、無御據御賴談も相整兼、甚當惑之到、然ル上と、　御家政と差置、今日之御凌爰出來兼、列座初是迄勘辨無之、斯之御時節ニ陷り、誠ニ以恐入候儀ニ付、委細申上候処、

御上ニ爰御當惑被遊候御樣子ニ茂、實ニ恐縮之到、此上と君臣元一体之儀ニ付、諸士幷末々迄之衆議を以、御取計被遊度旨被

仰出候ニ付、斯御危迫之御時節故、聊ニ茂爰御凌之道可有之哉、御收納高幷御借財帳拜見之上、所存之程被申達候樣致し度、右樣御難儀之御時節ニ相成候段と、妻子共ニ爰能々被申諭、銘々之覺悟爰有之候樣被遊度

思召候ニ付、此段篤と可申聞旨被

仰出候、

口達

今日被

仰出之御錠書、四五日中、銘々印封ニゟ、御目付方迄、可被差出候事、

五月廿日

外ニ、御借財帳・御收納高帳・御番正御入用帳添、

〔荻野山中藩記錄〕○子爵大久保敎尙所藏本

五月廿日、雨、

一晝四半時迄、　御居間ニ

御出座、左之趣

御意被遊候、年寄格之井戸作右衞門初メ、御用人方同格、且表向之者ハ御書記ニゟ

御意可被遊筈之処、當時御間席無之故、御物頭席ゟ以下、奥表之諸士迄、御同所ニ一列ニ

被召出、平伏拜聞之、列座御障子之方御間内ニ出席、右之

御書孫兵衞へ御渡被成候間、年頭之者御小蓋之儘相渡候上、何ゟ茂難有奉畏候段、御請

御取合申上候、

御入座被遊、夫より列座正面へ居直り、右

藩主直諭ス

御意之趣、退座之上、御目付役所ニゟ拜見、熟得可有之旨申達、別段左之趣、孫兵衞申達

末ニ有之、御目付方ハ何ゟも相詰居候、尤御場所柄故脫劔之、

但、有浦元右衞門・鵜澤丈助、上之間入口外へ着座有之故、後ロ屛風を建置、

○中略、

五月廿四日、曇、

○中略、

一去ル廿日、御家中游士幷番外之者ニ茂、被

仰出候

御主意之趣ニ付、兼ゟ達置候通、諸々印封ニゟ御請書差出候間受取候旨、今日御目付ゟ

列座へ差出候間、則開封之上、各致披見、入

御聽置、

御覽濟一纏ニ致し、小簞笥ニ仕廻置、

○中略、

五月廿七日、

○中略、

安政五年五月二十日

一此度御改革ニ付、當正月中ゟ御勝手筋ゝ勿論、諸向々迄追々取調候処、和田善太夫松長表退役之砌、引送帳ニ不分明之廉も相見候間、去月善太夫山中表ゟ出府爲致爲取調候處、利運ニ相違有之、清算仕候上ハ貳百四拾六兩余上納ニ可罷成義ニ付、去月八日ニ書面差出、同十二日上納方願書差出候間、其砌猶不審成義相尋候処、別紙之通書面差出候故、其外之向相尋候処、追々書面差出、左之通、

口上覺

私儀、退役之砌引送候村々貸附之内、百兩ゝ何ゝニ取扱候哉之旨、御尋御座候、右ゝ七ヶ年前、去ル子之御勘定、翌丑三月湯山善右衞門出府御勘定之処、下し金之内百兩、難澁村々御救御手當米之代ゝ、名目振替有之、如何ニ付相尋候得共、江戸御勘定所御詰合ニゟ御差圖ニ付、其通認直し候由申聞候、尚又同九月中出府之砌、小岩十藏ニ内々承り候処、是ニゝ少々次第有之趣申聞候、誠一旦御勘定相濟候儀ニ付、其儘過去候得共、前書之通全下し金仕候ニゟ相違無御座候、其節之御用狀幷案詞等御座候ゟ後相分候儀ゝ奉存候、右御尋ニ付、有樣申上候処、相違無御座候、以上、

四月八日　和田善太夫

口上覺

此度和田善太夫勤役中取扱金御調御座候処、去ル子年御領分御勘定帳之内、難澁村々御手宛ゝ名目御座候金百兩ゝ、全江戸下しニ相成候段、善太夫ゟ申上候、依之取扱方御尋御座候、

右ゝ高橋勝太郎内願之次第有之ニ付、取扱候樣横山兵右衞門殿御差圖ニ付、同役小岩十藏、吟味役並河儀助ゟ後爲申聞、別紙書付之通取扱申候、右殘金之内、天野津太夫・堀田又兵衞ゟ、是又別紙書付之通取扱申候、右多分之御金不束之取扱仕候段恐入奉存候、此段御尋ニ付申上候、以上、

四月　本庄確左衞門

覺　天野津太夫

一金三兩　堀田又兵衞

一同六兩　本庄確左衞門

一同壹兩　高橋勝太郎

一同九拾兩

〃百兩

右之通御座候、以上、

安政五年五月二十日

四月　覺　本庄確左衛門

一金壹兩也

右と去ル子年十二月、名目替相成候金百兩之内、書面之通私内拜借仕罷在候段相違無御座候、横山兵右衛門殿御承知と乍申、右樣之次第奉恐入候儀ニ御座候、此段御尋ニ付申上候、以上、

五月　本庄確左衛門

去ル子ノ暮、亡父兵右衛門勤役中、松長下金之内百兩、翌丑年御勘定之節、難澁村々ニ御手當と名目振替候儀、心得候哉之旨御尋御座候處、亡父退役、私ニ引送之節、右樣次第有之候趣、何共不申聞候、此段申上候、以上、

四月九日　横山吉右衛門

口上覺

此度和田善太夫勤役中取扱金御取調御座候処、去ル子年御領分御勘定帳之内、難澁村々御手宛と名目御座候金百兩と、全江戸下しニ相成候段、善太夫申上候、依之取扱方御尋御座候、右と高橋勝太郎内願之次第有之ニ付、取扱候樣横山兵右衛門殿御差圖ニ付、本庄確左衛門ゟ差上候書面之通、子之暮取扱候旨、丑ノ正月二日、右同人ゟ申聞候、右樣多分御金、不束之取扱仕候段承置候儀恐入奉存候、此段御尋ニ付申上候、以上、

四月八日　小岩十藏

去ル子之暮、松長下し金之内百兩、翌丑年御勘定之節、難澁村々ニ御手當と名目振替ニ相成候ニ付あと、右引合セ之儀立會候あ取扱候事ニ可有之段、御尋御座候、右と横山兵右衛門殿ニ伺濟之趣、御勘定奉行ゟ通達御座候間、引合セ仕候儀ニ御座候、右樣多分之御金、不束之取扱仕候段奉恐入候、此段以書取申上候、以上

四月八日　齋藤九十九

私、吟味役勤役中去ル子暮、松長下シ金之内百兩、翌年御勘定之節、難澁村々ニ御手當と名目振替ニ相成候ニ付あと、右引合之儀立會候あ取調候段、御尋御座候処、右と横山兵右衛門殿ニ伺濟之趣、御勘定奉行ゟ通達御座候間、引合仕候儀ニ御座候、右樣多分之御金、不束之取扱仕候段奉恐入候、此段以書取申上候、以上、

四月八日　並河儀助

私儀、去ル子年御勘定帳持參、翌丑年三月中出府仕候節、前年御下シニ相成候金百兩、

難澁村々御手當と振替可申旨、本庄確左衞門ゟ御沙汰ニ付、名目相改申候、尤歸村之後、和田善太夫に右之段委細相斷置申候、御役人衆ゟ之御差圖とて乍申、右樣之義仕候段奉恐入候、今般御尋ニ付、御請書奉差上候通毛頭相違無御座候、以上、

四月廿二日　湯山善右衞門

天野津太夫去ル子年金三兩拜借仕候證書御座候ニ付、疑と心得居候哉可相尋旨御沙汰ニ付、津太夫家内幷姉に相尋候処、津太夫存生中、右之儀私共に一向不申聞候得共、右樣證書御座候上と、拜借仕候ニ相違無御座儀と奉恐入候、今般御尋ニ付、私ゟ相尋候処、右之通相違無御座候、此段申上候、以上、

四月十三日　齋藤彌五兵衞

一金六兩也

右と去ル嘉永六丑年十二月拜借仕、今以返上納不仕、今般右御金拵御取調ニ相成候処、去ル子年暮、名目替ニ相成候御金之由、始ゟ承知仕奉恐入候、全右御金拜借仕候ニ相違無御座恐入奉存候、御尋ニ付此段御請奉申上候、以上、

四月　堀田又兵衞

私儀、去ル嘉永五子年十二月中、御名前ニ茂抱り候程之義茂出來可仕哉茂難計大借ニ相成奉恐入候、右ニ付、極内々奉歎願候処、本庄確左衞門取扱ヲ以、同年之暮ゟ翌丑年三月迄ニ、金九拾兩内拜借仕候、尤追上納被　仰付候樣仕度段茂奉申上置候得共、其段行屆不申、未々少シ茂上納不仕、右樣身分不相應之大金奉拜借候段奉恐入候、御尋ニ付、委細奉申上候通毛頭相違無御座候、以上、

午四月　高橋勝太郎　印

弘化三午年十一月二日、

公家衆御馳走御觸之節、御順番ニゟ御坊主部屋御借用御會釋之内納殘り、

金貳兩壹分貳朱

銀五匁

嘉永六丑年十二月二日、

將軍　宣下御祝儀之節、右同斷御會釋、

金七兩貳分ト

銀三匁貳厘

貳口

〆金九兩三分貳朱ト

銀八匁七分貳厘

右之通御取集ニ付、類役衆ヶ寄到來仕候節々上納可仕候処、何分ニ茂入費多ニ付、上納延引仕候間、兵右衞門殿ヶ茂度々被仰聞ゟ御座候間、右躰奉申上候処、不埒ニヶ候得共、一時ニ上納出來申間敷候間、追々上納方可仕旨被仰聞候後茂、兎角入用多ニ茂難行屆、重々奉恐入候、今般御尋ニ付、委細書取ヲ以申上候通毛頭相違無御座候、以上、

四月十二日

高橋彈治

浮益金御家中内拜借勘定仕候樣御達ニ付取調候處、別紙帳面之通金三拾七兩三朱餘不足ニ相成候、尤亡父兵右衞門年來取扱出納之節々記シ置候処、追々老衰仕候故歟認落等有之、其上記憶も薄く相成、聢ヶ勘定出來兼候ニ付退役、私ニ引送之節、能々取調吳候樣申聞候間、種々取調候得共、何分聢ヶ相分り不申候内、同人病死仕候茂、猶更當惑仕居候処、今般御達書類御下ケニ付、再應取調候處、前書之通不足金ニ相成、猶私茂不束之次第奉恐入候、今般御尋ニ付、以書取申上候段相違無御座候、以上、

四月十三日

横山吉右衞門

一金貳拾六兩壹分貳朱

右ヶ、私勤役中、三橋御普請仕越金、安藤長門守樣類役衆ヶ、安政二卯年ヶ同三辰年三月迄、書面之金子追々御割戻シ相成候ニ付、取揃早々上納可仕筈之処、今以不納相成居奉恐入候、今般御尋ニ付、右始末申上候通相違無御座候、此段申上候、以上、

午四月

堀田又兵衞

去ル嘉永三戌年、ぬけ米御拂相成候代金拾兩、相州山中表ヶ相廻候節、横山兵右衞門殿御承知ニ茂、右金子之内五兩、私儀内拜借仕罷在候處、此節上納仕候、尤先年御賄衆御承知ヶヶ午申、御納戸帳ニ不相納、永々内拜借仕、上納延引仕候段奉恐入候、此段御尋ニ付申上候、以上、

午五月

小岩十藏

去ル嘉永三戌年、ぬけ米御拂相成候代金拾兩、相州山中ヶ相廻候節、横山兵右衞門殿御承知ニ茂、右金子之内五兩、私儀内拜借仕罷在候処、此節上納仕候、尤先年御賄衆御承知ヶヶ午申、御納戸帳ニ不相納、永々内拜借仕、上納延引仕候段奉恐入候、此段御尋ニ付申上候、以上、

就國延期届出

午五月　本庄確左衛門

五月廿八日、晴、暮六半時過地震小、

一殿様　御在所表ニ此節御發駕も可被遊処、此度御改革御取調最中ニゐ、御勝手方御都合ニ寄、何ぞも評議之上、此程中ゟ入　御聽、　思召相伺之処、先ッ御出立御見合之御含ニゐ、去ル十日、御願奥御右筆原彌十郎様ニ、添役松下武八郎罷出、御内意相伺之処、思召も不被成御座候間、當月廿九日頃迄ニ、御用番様ニ御内慮御伺御差出ニゐ不苦旨被仰候旨、右ニ付、御用番脇坂中務大輔様御勝手ニ、今朝武八郎罷出、公用人ニ出會、右御屆書入御内覽候処、思召も不被成御座、表ニ差出候様御差圖ニ付、御表ニ相廻り差出候処、御落手相成候段、罷歸申聞、左之通、

私儀、在所ニ御暇被下置候ニ付、此節發足可仕候処、時候相感、持病之痔疾差發、痛强難儀仕候、此分ニゐて、何分旅行相成兼候間、暫保養仕、快方御座候者、早速出立仕度奉存候、此段御屆申上候、以上、

五月廿八日　御名

二十一日乙未　老中堀田正睦（備中守○佐倉藩主）・同松平忠固（伊賀守○上田藩主）・同久世廣周（大和守○關宿藩主）・若年寄本多忠德（越中守○泉藩主）・同遠藤胤統（但馬守○三上藩主）・同酒井忠毗（右京亮○敦賀藩主）・同本郷泰固（丹後守）講武所ニ臨ミ、武技ヲ閲ス。

〔堀田正睦日記〕（○東京帝國大學所藏本）

五月廿日、○中略、

一四ッ御太鼓ニゐ出宅、登　城四半ニ武寸前、○中略、

一明廿一日、自分・伊賀殿・大和殿・若年寄越中守・但馬守・右京亮・丹後守同道、講武所ニ爲見廻、五半時出宅相越候之旨、御取次相模守を以、自分より申上之、

一右ニ付、登　城御用捨之儀、御取次土佐守を以被　仰出、直御礼同人を以、申上之、

一右之如、表ニも心得ニ御同朋頭を以、申達之、

同廿一日、

一今朝評定所出座紀伊守殿、

一自分・伊賀殿・大和殿・越中守・但馬守・右京亮・丹後守同道、講武所諸術爲見置相越候故、

登　城御用捨之儀、昨日被　仰出候ニ付、五半時出宅、（野羽織・伊賀袴）、乘馬ニゐ相越、例之通見置相濟、一同退散歸宅、

但、天氣合ニ付、越中島ヱ見合相成、不相越候、

一出宅・歸宅案内、月番中務殿ニ差出之、

老中若年寄等講武所ニ赴ク

一掃部殿・紀伊守殿・中務殿例刻登
城後、爲伺　御機嫌部屋番之者
御城ゟ差出、例之通手紙等、持歸之、

〔佐倉藩戊午年集〕○伯爵堀田正恒所藏本

五月廿一日、曇、
一卯中刻前　御目覺、
一五半時御馬揃ニゟ、御野羽織・伊賀御襠被爲召、四ッ前二寸御出宅、築地講武所ゟ　御
出、　御歸掛八丁堀御屋敷ゟ　御立寄、　御歸家七半時前壹寸五分、
一騎馬御供左之通、
澁井甚兵衞　志村水之助　梯内勘之丞
三木庄太郎　田中文助
丹治金平　佐治岱次郎

〔内藤信親日記〕○子爵小笠原長生所藏本

五月廿日、○中略、
一四ッ御太鼓ニゟ出宅、

堀田正睦講武所ニ赴ク

内藤信親講武所ニ赴ク

一登　城、四半ゟ二寸前、
一御機嫌御側衆日向守ゟ伺之、○中略、
一明日備中殿・伊賀殿・大和殿、講武所ゟ被相越候付、登　城御用捨、御取次土佐守を以、被
仰出之、○中略、
同廿一日、
一今朝登　城前逢、自分ゟ評定所出座、且備中殿・伊賀殿・大和殿、講武所ゟ被相越候付旁
無之、
但、掃部殿ニも、初對客有之候、
○中略、
一四ッ御太鼓ニゟ出宅、
但、備中殿・伊賀殿・大和殿ニも、講武所ゟ爲見分被相越候、登
城昨日御用捨被　仰出候事、

〔幕府沙汰書〕○東京帝國大學所藏本

五月廿一日、
殿中無別條、

一備中守・伊賀守・大和守・本多越中守・遠藤但馬守・酒井右京亮・本郷丹後守、講武所ニ爲見置、今朝宅より相越、

〔石川成章日記〕○維新史料編纂會所藏本

五月十九日、○中略、

一榮吉方へ、講武所廻狀、廿一日年寄衆御廻り付六時前、達來ル、○中略、

五月廿一日、

一榮吉今日天氣相ニ付、講武所出席不致候、

〔本間大學日用雜記〕○維新史料編纂會所藏本

五月十八日、壬辰、天氣、

講武所ニ出席、歸宅之節、谷・關兩氏來り、直ニ歸宅、○中略、

同十九日、癸巳、天氣曇、朝小雨、

遠山三之丞殿より、昨日炮用立候挨拶と〜て、鰈三尾到來、○中略、

內藤源一郎殿より、大的定日月番箱送り、明日出席斷申來ル、○中略、

同廿一日、乙未、曇雨止、

○中略、

今日講武所ニ〆、御老若御見廻り、三兵合一之業可罷出候処、風邪ニ付斷、組合城鶴次郎方ヘ、昨夕申遣〜、今日金澤瀨兵衞殿ニも遣ス、○中略、

同廿八日、壬寅、天氣、夜五ッ時地震、

今朝講武所ニ出席、九ッ半時過、關・谷兩氏同道歸宅、夕刻兩氏歸宅、

三兵調練ヲ行フ

京都所司代役邸竣工シ、所司代本多忠民（美濃守○岡崎藩主）之ニ徙ル。

所司代邸竣工引移

〔桂宮日記〕○宮內省圖書寮所藏本

五月廿一日、乙未、天陰、

○中略、

傳奏萬里小路大納言使（大倉主稅）、觸書到來、注于左、（加點之後、以中番使、及返却候、）

口上覺

本多美濃守殿御役宅普請出來寄ニ付仮請取、今廿一日被引移候、此段可申入旨、兩傳被申付候、以上、

追〆、御覽之後、万里小路家可被成御返上候、以上、

五月廿一日　兩傳奏　雜掌

桂御所　諸大夫御中

〔殿様御玄關日記〕○長谷信篤家日記 纂新史料編纂會所藏本

五月廿二日、申、雨、

○中略、

一從五条様來、

口上覺

本多美濃守殿、御役宅普請出來寄ニ付仮請取、今廿一日被引移候、此段可申入旨、兩傳被申付候、尤御相番様方へも、御傳達可被成候、以上、

兩傳奏

雜掌

五月廿一日

右之通申來候間、可得貴意被申付候、早々御廻覽、御返し可被下候、已上、

六角三位殿家

雜掌

五月廿二日

〔曇華院日記〕○纂新史料編纂會所藏本

五月廿一日、乙未、雨、

一傳奏ゟ觸書來、

本多忠民移轉ノ廻文

本多美濃守殿御役宅普請出來寄ニ付仮受取、今廿一日被引移候、此段可申入旨、兩傳被申付候、

〔土山武宗日記〕○宮内省圖書寮所藏本

五月廿一日、

○中略、

一本多美濃守殿御役宅普請出來ニ付、今日引移候旨、美濃守殿ヨリ被申越候段、御附衆達有之、

〔平田職修日記〕○宮内省圖書寮所藏本

五月廿一日、

一武傳廣橋家ゟ、

本多美濃守、御役宅出來ニ付仮請取、今廿一日被引移、

右觸狀來ゝ、

〔六角博通雜記〕○子爵東園基愛所藏本

五月廿三日、先晴、

所司代屋敷出來寄ニ付、相移旨也、

〔小倉藩京都留守居　三澤十太夫書翰〕○伯爵小笠原長幹所藏　小倉藩記錄所載

○五月二十五日　同藩家老　小宮四郎左衞門宛

一筆啓上仕候、

殿樣益御機嫌能被遊御座奉恐悅候、然ゝ、京都御所司代本　美濃守樣御役宅先達ゟ御燒失之處、御普請御成就、去ル廿一日御引移被成候、右ニ付、御歡御使者御進物之義、御先例取調ゝ候處、天明八申年、御所司代御役宅御類燒、其後御普請御成就ニ付、御引移之上、爲御歡鮮鯛一折被進之候趣、記錄ニ相見申候、依之此度も右御振合を以、鮮鯛一折・金五百疋被進之義、取計申候、此段爲可得貴意、如斯御座候、

五月廿五日　三澤十太夫

四郎左衞門樣

〔小倉藩京都留守居日記〕○伯爵小笠原長幹所藏本

五月晦日、晴曇、

一本多美濃守樣ゟ御使者を以、此度御役宅御普請成就御引移相濟候爲御歡、御目錄之通被進之候御挨拶被仰進候、

小倉藩祝賀ノ使者

〔桂宮日記〕○宮內省圖書寮所藏本

五月廿五日、己亥、天陰、

○中略、

從傳奏万里小路大納言使　大倉主殿、觸書到來、注于左、加點之後、中番使ヲ以、及返却候、

口上覺

本多美濃守殿御役宅ニ引移ニ付、當春年始御使之廉、最早何日ニゟも被請候趣ニ候、其外御使向、已後尋常之通ニ候、此段可申入旨、兩傳被申付候、以上、

追ゟ、御覽之後、万里小路家へ可被成御返候、以上、

五月廿五日　兩傳奏　雜掌

桂御所　諸大夫　御中

所司代新邸ニテ年賀ヲ受ク

〔雲華院日記〕○續新史料編纂會所藏本

五月廿五日、己亥、雨、

一傳奏ゟ觸書來、

本多美濃守殿御役宅ニ引移ニ付、當春年始御使之廉、最早何日ニゟも被請候趣ニ候、其外御使向、已後尋常之通ニ候、此段可申入旨、兩傳被申付候、

六月二三日所司代年賀ヲ受ク

〔雅俗日簿〕○山科言成日記 宮内省圖書寮所藏本

五月廿五日、屬晴、

○中略、

一家僕申云、關東年始御祝儀、所司代亭諸家行向、來月二日・三日兩日之中云々、予依所勞、以使者可申入旨申了、依非順番ゝ、

〔平田職修日記〕○宮内省圖書寮所藏本

五月廿五日、

○中略、

一武傳廣橋家ゟ、

年始爲御祝儀、所司代江、來月二日・三日兩日、諸家行向候、

右之趣觸來ゝ、

廿六日、

○中略、

一來月二日・三日兩日之内、爲年始所司代行向、三坊主・御車童子・同惣代江申遣也、

〔非藏人日記 乾〕○東京帝國大學所藏本

所司代在府中ニ付年賀出向延引ノコト

六月二三日公卿祝賀ノ爲メ出向

五月三十日、甲辰、晴、當番議奏右大將殿、宿替坊城中納言殿、傳奏兩卿參侍、

一來月二日・三日、所司代亭辺諸家行向有之ニ付、同列可行向之處、此節所司代在府ニ付、行向延引申度止乃一紙、幷參府中行向無之例書一通、寛政七年正月、文化六年二月、嘉永五年正月等之例、奉行西洞院左兵衞督殿ヘ附進、御落手也、文面委願書留、

〔橋本實麗日記〕○東京帝國大學所藏本

六月二日、丙午、晴、辰斜向于岡崎侍從亭、年始祝詞申入、去正月五日、役宅燒亡、仍于今延引之、予今日近臣申合順番之、仍行向了、依之順番帳、次源宰相中將ニ傳了、

〔菅葉〕○五條爲定日記 宮内省圖書寮所藏本

六月三日、丁未、陰、未刻後雨下、昨今之内、本多美濃守亭ニ、年始行向之義、過日自武傳被觸之處、依所勞、今日以使申述了、爲榮亦相同、爲榮三番詰宿等、爲大夫實方番代參仕、

〔長谷信成日記〕○維新史料編纂會所藏本

六月三日、未、晴、

本多美濃守ニ、爲年始、以使者申入了、

〔雅俗日簿〕○宮内省圖書寮所藏本

六月一日、陰晴不定、溽暑難堪、

○中略、

家僕申云、所司代年始行向之人可申置云々、本多美濃守依召關東下向中云々、使者尤可遣云々、

○中略、

三日、陰晴不定、溽暑難堪、

○中略、

一關東年始、所司代行向、依所勞以使者申遣、家公・予・内藏頭等、

本多美濃守依召、參府道中、留守中、而猶可行向云々、年始言入之處、依留守中可申置云々、予非順番之間、以使者申遣了、

〔高辻以長日記〕○子爵高辻宣麿所藏本

五月廿七日、晴、

○中略、

一五条へ修長行、近々諸(所)司代へ行向順番故、尋合之事、

○中略、

六月二日、晴、聊曇、今曉寅過、松原麩屋町出火、

○中略、

一諸(所)司代ゟ年始礼、修長行、歩行玄關言置、直ニ歸宅、

〔平田職修日記〕○宮内省圖書寮所藏本

六月二日、

○中略、

一所司代江爲年始、予名代ニ本多一麻上下、參、玄關昇使者間江通、

年始御祝詞申候、關東江御序宜、尤參上可致処、御用多故、以名代申上候、

右之趣申歸、○中略、取次安增長左衛門式臺迄送出候ゝ、所司代去月廿九日宿立、江戸下向中、所司代屋敷、以前通出來致シ有之候ゝ、本多一咄ゝ、

二十二日　宇和島藩主伊達宗城遠江守　大老井伊直弼掃部頭○彦根藩主ヲ訪ヒ、後、福井藩主松平慶永越前守　邸ヲ過リ、幕閣ノ情勢ヲ告グ。

〔伊達宗城御手留日記〕○侯爵伊達宗城所藏本

五月廿二日、くもる、雨、

「六ツ過、御めさめ、御膳御二もり、うろゝい出る、岩瀬内記樣御出在、竹のこ〜志よふ布（兵部少輔）

伊達宗城井伊直弼松平慶永ヲ訪フ

〻ようゆふ樣御出ニて、御出座、」「對めんする、（宗城自筆）昼飯二ツ、九半時、供揃ようかもんへ參り、それゟ越前へ參る、夜食ゟちまて三ツ、五時前歸り、奥へ參る、酒少々のむ、五半時、若兩所・永歸る、直ニ寢候事、」

伊達宗城松平慶永ヲ訪フ

〔昨夢紀事〕

五月廿二日、○中略、

一、此日、遠江守殿大老へ御出ありし御歸途、申の刻はかりに御出ありて、大老へ御對話の次第、御物語ありしハ、大老の話にも、京使も今以定り兼、西城も紀とも決し不申、心痛被致候よし、近頃ハ伊賀殿（松平忠固）逆威以の外にて、初の程ハ大老をも、殊の外敬重いたされ候へと、此比とふりてハ、大老を倒さんとする勢にて、量り難き心底にも見え、又宜しからぬ事共の聞えもあれハ、此節御庭番へ内調申付置るゝよし、備中殿ハ京師の處置は宜しからざりしかと、外にあしき事もなけれハ、まつアノマヽにてあるへき歟なと申され、閣中も更に調和セす、穩かならぬ樣に聞ゆるとの御事ふりしとそ、

〔山内豐信書翰〕（○昨夢紀事所載）

○五月二十三日松平慶永宛

一、（五月二十三日）此日、土佐殿ゟ被遣御内書、如左、

山内豐信ノ一策

前條略、（伊達宗城）藍山へ相談仕候策ハ、（井伊直弼）愛牛と（松平忠固）桐とを離間するの策ニ御座候、其離間の仕樣ハ、愛牛を出候其心底、不殘愛牛へ密告仕候はゝ、少ハ疑を生可申哉、萬一其色相顯候ハゝ、又策ハ其機ニ乘し出可申候、先此位の策、所謂定見ニ至候ゑハ、雖吾不知ゑ、

○中略、

○又々藍山參堂候趣、愛牛ノ近況申上候と奉存候、○下略、

福井藩主松平慶永（越前守）時勢ノ危殆ニ迫ルヲ憂ヒ、其狀ヲ前水戸藩主德川齊昭（前權中納言）ニ告ゲテ對策ヲ問ヒ、且、宗家ノ爲ニ盡瘁センコトヲ囑ス。

〔福井藩主松平慶永書翰〕（○昨夢紀事所載）

○五月二十二日　（前水戸藩主）德川齊昭宛

陳は、過日以（安島、水戸藩士）彌次郎奉申上候方今廟堂之御景況ニ付、又々愚衷相認汚尊覽候、尚尊考之義、無御遠慮可被仰下候、扨又彌次郎其後屋敷へ罷越、尊意之趣も篤と拜承仕候事御坐候、委曲家來へ口上申含、彌次郎方迄差出候間、彌次郎ゟ御聞取奉願候、右之段申上度如此御坐候、頓首九拜、　五月廿二日

尚々、時下御自重爲天下奉拜祈候、差出候愚衷、昨夜於燈下認、亂筆誤字落文多く、御判讀御海量奉希候、別紙申上候書中、宗室英望と認候は、他人を奉斥にハ無御坐候間、此段御亮

察可被下候、已上、

○別紙

第一、

過日彌次郎召呼申上候通り、方今之御時勢、實ニ危殆相迫り、御同事恐入候儀ニ奉存候、畢竟方今　廟堂之御處置、言路を塞き、忠良を擯斥いたし候ニ相違無之、其子細は、土岐丹波守は、過日隊帥と相成、鵜殿民部少輔も、昨日駿府市令被命候事、何共痛歎之至ニゐ、是等之輩は、才識ハたとひ劣少ニ候共、何分直情徑行ニゐ、屢諫爭仕候者共ニ御坐候、右兩人擯斥ニ相成候ゐは、其外之有志迄も、追々無餘類被退候歟、又は從銘々御役御免可相願と奉存候、小子も兼ゐ海防懸りへハ、登　城之砌り抔、時々面會密話仕候處、何れも上之御爲深く存詰罷在、戴星出入仕候位ニゐ、品々遠圖も有之事、常ニ感服致居候義ニ御坐候、當今廟政之御多事ハ勿論、追々内外之御處置無之候半ゐハ、難相成御時節之處、かゝる排斥等被爲在候ゐは、啻ニ德川氏之舊甌を保ち難きのミにあらす、天下之安危ニも係り候事と苦心仕申候、頃日備中へ逢ニ罷越候節、今後之御處置振等、舊知己之廉を以、折入承候處、殊の外歎息之次第而已にて、有志之者擯斥ニ至り候も、聊ニゐも擧公論候者ハ、悉く黨類之名を爲負候由、則備中を以テ其巨魁と斥し、夫よりして土岐丹波・同攝津・岩瀨肥後・鵜殿民部・永井玄蕃・津田半三郎、半三郎儀は、堪兼先日重大之事件諫爭申候より、黨名を蒙り候よし、列侯にては越前・土州・伊達・薩摩等一切、建淸議候者ハ黨名を免かれす、且奥向御小姓も、有志之者二人有之、卽諏訪安房・權太遠江ニゐ、此等も近々之内、内轉可申哉と申事ニゐ候、依て小子尙又備中へ申述候は、畢竟備中も、閣老として是を座視傍觀、他人之成を仰候理ハ萬々無之筈、討論說破有之上、　君前ニ被出、肺肝吐露致し候ゐも、御聞入無之候ハヽ、切腹を以て　京師之不出來を始、首坐之罪を償候義、至當ニ可有之段申聞候處、中々左樣ニハ參り不申、此節は御前ニ罷出候事も度々は難相成、たとひ罷出候ても、大老・上田之内（松平忠固）、一人は差添罷出候樣之事ニゐ、存分ニ申上も出來兼候仕合ニ有之、已ニ備中も其内には褫職可相成哉之口氣に御坐候、是等一切、上田之伎倆ニ出申事ニ候、　右ニ就て、愚考仕候ニ、右之次第ニゐハ、大御變革所には無之、却ゐ今日よりも層倍之因循ニ相成可申は、不待識者事ニ御座候、然ル處、　廟堂に於ては、七月限之約束を以ゐ、亞米利加使節へ調印之事御許御坐候よし、既ニ過日來大名之申上も、大概條約御結可然と申事に候へは、不遠又々京師ニの御答も可被爲在と奉推察候、併し前文之爲體ニゐハ、中々被安宸襟候處ニてハ無之のみならす、列侯も一同失望可仕、左すれハ、又候叡慮をも被爲勞、速ニ伺濟ニも難運奉存候、自然右樣京師相縫候内、期限指迫候ハヽ、廟堂

忠良ノ有司多ク廟堂ヨリ排斥セラルルハ憂フベシ

堀田正睦以下諸大名并ニ有司等黨名ヲ蒙ル

幕府益々因循タラン

賢明ノ建儲ヲ必要トス

三家ノ蹶起ヲ要ス

ニゐは、是非不待　勅許、仮條約調印御執行可相成候、其節ニ到り、外藩抔ゟ違　勅之廉責付候ハヽ、以之外なる御大事と奉存候、是を程能鎮定候ニは、第一賢明之建儲有之、關東之威權を嚴ニし、續て京師之宿衛を壯にし、衆望を爲厭候事等、種々施設無之候半ゐは不叶事ニ御坐候、此策被行候上にてならハ、從　京師は、從來大政御委任之　征夷府故、或は一時之權宜を以て、一々不應

叡慮とも行末之見詰ニ基き、外國御處置抔有之候ゐも不苦義歟と奉愚考候、乍去萬々一只今之姿而已ニゐ、御違　勅と相成候ゐは、臣子之者痛慼無限ハ不及申、御同事ニ親藩ニ乍在、是を坐視傍觀仕候ゐハ、全く閣老同罪と奉存候、右樣

御違　勅に相成候ゐは、和戰共ニ定見無之事ニゐ、爲國家萬々恐入申候、尊君ニハ、碩德重望親藩之御長者ニも候へハ、此時世ニ當り、回天之御獻策御坐候ゐ、　德川家之社稷を太山之安ニ御措可被下候、最私儀も、幺麽微弱ニハ候得共、兼々爲御家寸忠心掛居候義故、如何底之儀ニゐも、隨驥尾精勤可申上奉存候、抑

東照宮之三親藩を被立置候儀も、後世を深く御憂痛被爲在候御義にして、即今日之御爲に御坐候へハ、此邊ハ尾公にも篤と被仰談可然奉存候、但、紀藩は御幼少之上、御承知之譯合も有之事故、御見合セ之方と奉存候、

方今我ヨリ戰端ヲ開クハ無謀ナリ

採長補短以テ國力ヲ充實スベシ

第二、

皇國之御儀は、全世界無比之御國體ニゐ、智勇共卓絶ニ有之、王化隆盛之頃ハ、

皇威も海外ニ輝候事、御承知被爲在候通一々不及贅說候、然處、近年西洋諸國は、開國之勢ニて兵力財用日ニ相增し、　皇國は夫ニ反し、何共歎ヶ敷事ニ相運候、實ニ切齒之次第ニ御坐候、依ゐ熟方今之形勢相考候ニ、諸侯之疲弊も不救、兵士之訓練も不熟、沿海之警備も不整、財用之本も乏しく、人心も游惰に成居、殊ニ上ニ凛然たる英明之大元帥も不被爲在、下ニ哲輔も無之内ニ、卒然我ゟ兵端を開候ハ、無謀之儀ニゐ、萬一及敗衂候ハヽ、無論之事、自然鏖戰取勝利候ても、此上益疲弊を加可申ハ必然ニ候、其際ニ、饑饉流寇叛賊一揆等群り起り、西洋同盟之族、其隙ニ乘し、入換り〳〵侵襲候ハは、黎庶不聊生之患可不免、此甚可憂之至ニ奉存候、左すれハ、當今外夷御處置之儀は、內政調ひ、守禦十全相成候迄ハ、暫和候も又一策ニゐ、彼貿易も、仕組より御國益之廉も可相立、且上に英明の大元帥被爲在候得は、叨りニ因循ニ流レ、夷風ニ化候憂ハ、萬々無之義ニして、其間ニ彼長を取て我短を足し、彼虛を覷て我實を補、財用を饒にし、疲弊を救、船艦を造、操練を演し、今日ゟ專ら武事講習を專務と致し候ハヽ、他日夷警有之候共、今日卒爾ニ戰とハ難易大ニ相違可仕奉存候、

奸兇ヲ除キ國是ヲ一定スベシ

齊昭ノ奮起ヲ促ス

第三、

右和ゐ戰之方略有之なから、其策不被行、益因循ニ陷り、今日太平之安きを偸ミ、明日不測之變あるを不知も、畢竟智識之開けさるニ出候得共、如斯姦人握權、忠直擯斥ニ逢候ハ、切齒憤懣難堪次第ニ御坐候、仍之方今之急務ハ、先ッ奸兇を除て、威權を宗室ニ歸し、宇内渴望之國是を定候儀、大肝要之儀と奉存候、

第四、

前條奸兇を除き、宗室へ權を與へ候義は、實ニ古今至難至危之事ニゐ、劉漢之末抔ニも、種々忠憤ニ堪兼、勃然決策、盡死力候者有之候得共、何レも事之不成ハ、或は屬天運候義も可有之候得共、全く人事不盡之故と奉存候、方今之如く、宗室之御内に、頭德重望尊君之如き御方被爲在候上ハ、右除姦之策、必被行可申事、天運人事兩全と可申と奉存候、則過日彌次郎以て、御内々被仰下候御直御逢之義、最喫緊之御策ニ可有之御坐候得共、其間ニ二十分之御思慮不被爲在候ゐハ、實以御大事至極と奉存候、乍併右之御策程能被行候ハヽ、區々上田之一奸を打倒候位ハ勿論にて、引續天下之公論ニ隨、宗室中英望之御方御推薦ニゐ、追々良法善政御施行御坐候ハヽ、斯民始て望霓之情を慰し、外夷亦自ら跳梁を止可申、至尊も大君も眞誠ニ御降意被遊、洶々之衆議も忽鎮定仕候ゐ、四海靜謐、　德川家之社稷も血食は不及申、

禍ヲ轉ジテ福ト爲スノ時ナリ

皇國萬古不朽之御事業も、相建可申儀ニゐ、是實ニ千歲一時之會、轉禍爲福候機、括目今ニ止り候儀にも可有之哉、天生大英雄も不啻義と奉存、苦悶境堺、却て一喜を爲し居候儀ニ御坐候、乍併此御施策、萬一顚躓仕候時ハ、乍恐尊體之御安危のミならす、天下之事、終ニ不可如何ニ陷り可申候間、小子かも、倩々碎肝膽、不顧失敬、蛇足之論奉申上候、尊君かも、尚又右等除姦等之御策、御施設之御次第、分明ニ御諭し被下、杞人之愚、御啓發被下候樣、爲

宗家奉懇願候、右等之儀共も、已に時機迫り居候間、何卒早々貴答被仰下候樣仕度奉存候、

〔德川齊昭書翰〕○昨廖紀事所載

○五月二十二日松平慶永宛

朶雲披閱、如貴諭兎角不齊之候ニ候處、先以御勇建大賀いたし候、入梅之景光鬱々敷、何分爲天下御加養奉至願候、此節眼氣不宜、貴答迄草略申進候也、

五月念二

松　越　殿　御報

潛　籠　老　人

御別紙熟覽仕候、每々

良策ナシ

慶永安島彌次郎ヲ召シ徳川齊昭ノ宗家ノ爲盡瘁センコトヲ囑ス

幕府御爲、御懇篤ニ被思召候義ハ奉感服候、拙老とても不安寢食、色々考候へ共、兎角不行事とのミ被存、可申進良策も無之候、又何そ天下の御爲、御良策も御座候ハヽ、伺申度候、以上、御火中〳〵、

いつ晴ん程もしられす押なへて
世はさみたれの空にそありける
やすからぬ御代にしあれハ、力つくさんなと、いひおこされける、御返しにはあらねと、かくなむ、
徳川の恵を受て暮す身は
濁れるときそ汲うからまし

〔昨夢紀事〕

五月十六日、○中略

一此夕、未半刻比、召によつて安島彌次郎參上せり、御居間へ被召出、廟堂之近況、且昨日（五月朔日ノ條參照スベシ）備中殿御密話之趣共被仰聞、如此宗家の内亂を御鎮定あらせられんハ、老公の御責任と被思召候間、其段老公へ申上、早々御運籌被爲在候樣、可取計旨を被仰含けるに、彌次郎も大に仰天いたし、何分彌次郎風情の何角可申上事も無之候へハ、罷歸老寡君へ委敷申上候半と御請ニ及ひたり、○中略

彌次郎齊昭ノ意ヲ傳フ

良策ナシ

五月十八日、一昨日、安島彌次郎迄、老公御建策の事を被仰合て、御良猷あらせ給はんにハ、天下の爲に賀すへきなれとも、若思召よられたる御事なくハ、公の御策ハ如何と御尋あらんは必定ふれハ、其節御答あるへき爲メ、立地に姦邪を除かるへき計策如何ンと、日々帷幄の御討論有之、漸二三の御策略は得させられしかと、いまた十分の御定見も立せられさりしに、此夕、彌次郎過日の御返答に參上せり、早速御前へ召出されしに、彌次郎申上けるハ御内諭の趣早速老寡君へ申上候ひしかハ、老寡君も殊之外驚歎、心痛に及はれ候へとも、更に謀略の出る處を得給はす、責て存し寄られ候ハ、尾張殿同道にて登　城いたされ、御前を願はれ、巨細申上られんかと存しられ候へと、是は必定支へ候者あるへしと懸念いたされ候、又伊賀殿を京都へ御呼ひ上せになるへき手段容易ふらす、又伊賀殿へ極親戚の者と存しられ候へと、京都へ御呼ひ上せになりて、京都ニて挫きたるもよからんかより、白地に忠告に及はせ然るへからん歟抔と、唯大凡の處ハ彼是と申試られ候迄にて、定策と申程の事ハ立兼候へハ、御舘に御良策あらせられんなれハ、承り參れと仰付られた る由を申述たり、　公には指當り御談しに及はれ候程成御策もあらせられねハ、猶御熟考の上仰上らるへく、其節ハ老公へ御直談被遊度候へは、御差支もあらせ給はすや、伺置候

齊昭慶永トノ直談ヲ避ク

師質彌次郎ヲ訪フ

様に仰付られて、彌次郎は退出せり、

○中略、

五月廿一日、安島彌次郎か師質へ書翰を以申越せしハ、公、老公へ御直談の義ハ、嫌疑盛んなる此節柄なれハ、御双方の御爲不可然思召候間、御見合せの方よろしかるへしといへる御事の由なれハ、其段申上たりしに、さらはせんかたふしと、御書取にて仰せ進せらるへきにふされたり、外に建儲御申立之儀ニ付、尾藩の景況をも報告せり、此事も其儘申上たりしに、是ハ遠江守殿へ御談あらせらるへきとの御事なり、

○中略、

五月廿二日、師質今朝水老公へ進せらるゝ御書、并御書取を持參し、安島彌次郎か許へ往きて、指出して演舌に及ひしハ、御直談ニ候へは、御應答の上にて、種々被仰上度御儀共も候へと、御書面にてハ御意衷盡兼候次第もこれあり候へハ、思召に適ひかたき品々ハ、委敷御教示被爲在候樣被遊度、左候へハ、又公の思召通りも打返し仰上られ候半との御事なり、彌次郎も、此頃は老公も殊の外御心痛の御樣子ニ相伺はれ候事候へは、何にまれよろしと思ひ付たらん事ハ、遠慮なく申試よと責たれと、師質式か吻を容るへき際にはあらすと固辭たりしに、彌次郎も今後の天下の形勢によりて、國家の盛衰も目前なれは、いかに

師質平岡圓四郎ヲ訪フ

もして挽回せまほしと、千思萬考肝腦を碎けとも必勝の策なくて、殆と困究至極せりと切齒扼腕、落涙に及ひて歎息せり、御直書如左、

○五月二十二日附、福井藩主松平慶永前水戸藩主德川齊昭宛書翰、上ニ收ムルヲ以テ、之ヲ略ス。

一、此夕、平岡圓四郎か許へ、此頃不快にて引籠り在れハ、師質に來るへき由を申越せしかハ、圓四郎か許へ往たりしに、頃日の新聞共心得にもなるへきかとて申聞かせしハ、伊賀殿實弟大御番頭酒井某の方へ所緣ある者より承はりたりしハ、伊賀殿、某への物語りまて、相談の樣に申さるゝハ、西城の御事も種々六ヶ敷事共にて、別ゐ越前は橋を嚴敷申立、大老ハ紀を主張、實に難評となりたる故、我カ考へにハ、越ハ橋とは申せとも骨肉の事なれハ、田安なれハ猶以宜しかるへし、左すれは、田を西城へ立て、大老を倒し、其跡へ越を任せハ、大凡見込ハ立へきにや、何分當時の爲体にてハ、手を下す所なしと申されたる由、此事を告る者ハ、圓四郎か親類にて、橋の立給はさるを歎きて申出したる事なる故、何の心もなくて、越公は如何なる人にや、けしからぬ所より宰相か出來て、如何なる事やらん抔と申せしよし、此一條、伊賀殿腹心の談說か、又口舌の謀言か、更に辨し難けれと、參考の爲承もたる儘を語れるよしなり、又他か大老の姦計にて三親藩を離間して、宗室を弱め、己か威權を逞ふせんとする目論見もあると聞えたるよし、兎角姦を除くか急務なり、西城の事

定りてハ其詮なけれハ、三親藩と我公の建白を御引付ケ給はんかよかるへきか、又備中殿ゟ大難題を出して籠居あられなハ、決議遷延にも及ふへし、其内ニ姦凶を退治セはよからんなといへる策をも申出たりき、

○中略、

一、此夕、左内岩瀬肥州へ往たりしに、肥州の申されしハ、近來の形勢、朋黨ハ根を斷ち、葉を枯らさんとの勢にて、危險の時とふりて、肥州も條約調印濟迄も在職無覺束、永井・堀も近々外轉にも成るへき歟、土岐攝津ハいまた波及の沙汰なきよし、當時の人心、正論家ハ朝に立つを愧る勢故、奥御右筆中にも有志の者は、閣老衆へ聞えよかしに正論の同類ハ追々貶黜、我々ハ幾日比、誰々ハ何日頃、堀田遠からす抔、高談憚る處なき故に、閣老衆も甚迷惑致さるよし、言路ハ熟く閉塞して、誰あつて言を發する者なく、寂然たる事共にて、海防懸りも甚閑暇、伊賀殿ハ鎮定策を得たりと、自得の体にハ見ゆれとも、人心十分離反、御大切の時節に及ひし由、鈴木藤吉郎も追々罪を得へき運ひともなりたれハ、本郷丹州初奸黨に連坐も出來可申候、是ハ聊愉快なるへしと、物語られたりとそ、

五月廿三日、○中略、

一、此日、水老公ゟ、昨日の御返書を安島彌次郎持參して申けるハ、老公にも深く御憂勢被

橋本左内岩瀬忠震ヲ訪フ

安島彌次郎齊昭ノ書ヲ持シテ師質ヲ訪フ

為在候へとも、兎角御定策を不被為得候へハ、公の思召付かせられたる事も被為在んにハ、御承知被成度との御事ニ、今日は御逢無之により、此段師質ゟ申上ゟかハ、此頃中被思召寄たる御事も被為在候へとも、御書取にはなされかぬる故、師質に仰セ含められ被指出なハ、老公へ御目通りも可被仰付歟、彌次郎に承るへしとの仰なりし故、其旨彌次郎へ申聞せしに、外ならぬ御事に候へハ、聊御差支有間敷道理候へとも、是迄諸藩臣へ御逢と申事更ニ無之事故、此節柄左樣の事候はんにハ、闔藩の取沙汰にも大に嫌疑を生し、御双方の御為不可然奥存由を申たり、さらハせんかたふけれは、また御書取にて被進ンとの御事にて、彌次郎ハ退出せり、御返書如左、

○五月二十二日附、德川齊昭松平慶永宛書翰、上ニ收ムルヲ以テ、之ヲ略ス。

一今日ゟ久世大和守殿御不快にて御登城なし、鈴木藤吉郎の波及と聞えたり、此侯御勝手向殊に逼迫せるを見込、藤吉郎ゟ五萬金を調達し置る抔風評あり、

○中略、

五月廿五日夜、左内平岡圓四郎か許へ往たりしに、圓四郎いへるハ、是も此比申たる伊賀殿樞機ある者ゟ出たる由にて、伊賀殿のいはるゝハ、京使を命せらるゝ見込にて彦根を出し、彦根も初の程は行くへき氣色なりしかと、家來の承引せさる由にて固辭て行かす、全

橋本左内平岡圓四郎ヲ訪フ

幕府重臣上京ヲ辭ス

酒井忠顯ヲ大老ト爲スノ策

ク行て備中の如くならんも拙く、又行たる跡も懸念なり、大和も同様の次第なれハ、近く覺へもあれはとて、中務を進むれと勝手向難澁ふりとて行き得す大老をといへる、重任なれハ大和以下ニゐハ其任に適はす、更に其人なけれは、越前はよけれとも、威德ある者に大權を仮さぬ御舊制もある事にて、越に權柄執らせては宜しからすといへる説もあれと、外に人なけれは越に極り可申候、左あらは越も權を假せと申へし、其時に又假てはならぬといへる評論起り決すへからす、其時に當り酒井雅樂頭伊賀殿實甥、を今一人大老となし京都へ遣はし、仕課ふせて歸りなハ彦根ハ倒して、次て、備中・大和も罷免せられなハよからんと思へる由を語られしとそ、夫に就て圓四郎に一策あるよしにて申けるハ、町奉行井澤美作守ハ鈴木藤吉郎に關係なけれハ、彼をして藤吉郎を鞫問さすへし、さすれハ關宿始贓罪ある面々は、封書尋ねと成て籠居すへし、上田ハ態と除き置へし、さて京使の議となりたる時、彦根へ姫路を出す伊賀殿の姦計を密告して、彦と上とを離間し、彦の怒に乘して上の贓罪を發露し、封書尋とならハ上も亦籠居せさるを得す、是姦を除くの策にして、大老の羽翼を殺いて孤立とするの術なりと申出せるよしを、左内罷歸りて申上たり、

福井藩士本多修理書翰〔○橋本景岳全集所載〕

○五月十五日　同藩士　橋本左内宛

只今迄相待候處、何之御沙汰無之、如何相成候事に候哉、御問合申候、何か不落付物に付如此候、尚御報御待申候、

五月十五日　本多修理

〔本多修理書翰〕〔○橋本景岳全集所載〕

○五月十五日橋本左内宛

御細書之趣致承知、何分期明朝候、失望之極、血涙之仕合御座候、已上、

五月十五日　橋本左内様

〔本多修理書翰〕〔○橋本景岳全集所載〕

○五月二十日橋本左内宛

拜披、御内話之件々、細縷御申越致謹諾候、自然不待駕樣之事も候はば、程能御相談申上度奉存候、先は御答迄、草々如此に御座候、不備、

五月廿日　復齋拜　景岳雅契要答

〔橋本左内書翰〕〔○橋本景岳全集所載〕

福井藩士松平慶永德川齊昭ノ會見ヲ熟望ス

○五月二十日同藩士村田巳三郎宛

拜見、然ハ、縷々御懇書、依舊御忠切奉感佩候、且清恙中、存外長文御認ニて、殊更驚喜仕候、此般之義、貴密候と果決との事ハ到底配慮仕、君上始同志も篤と被心得候間、御安心可被下候、礫川へ密使と申事は、未タ不定、宇君ニも眞實ハ御打明無之候、失機之患も御同然ニ奉存候、乍去不遠御出之運ニ可相成奉存候、内々ゝ今日等礫川へ御使ニて御申越可有御座と存居候處、未タ御徹底無之廉有之、其運ニハ成兼申候、

過日御添心之小拙龍出候義扨も、雪江迄ハ密ニ申置候、此も御含迄ニ申上候也、

五月廿日　紀

戀堂賢契　極密謹答

〔一橋家家士平岡圓四郎書翰〕○橋本景岳全集所載

○五月二十一日橋本左内宛

景岳先生　御親析　方中拜具

入梅鬱陶敷天氣、先以益御萬祥奉賀候、扨御一條、其後御模樣如何御座候哉、天下之安危、實以此一舉と、不及ながら焦思苦心龍在候得共、素より御承知被下候私輩之儀、只々拱手傍觀仕候外致方無之、其御上下樣是迄無量之御蔭忠被爲盡、回天之御斡旋被爲在候御儀、奉仰歎候而已に御座候、私場合責ゐ者時々御機嫌並御起居等相伺、犬馬之勞何成共被命候樣奉願候處、賤恙半井君より御聞も被下候半、又候意外之惡症相發し、一時甚困却仕候次第、實以御不音申上、背本懷候儀、御賢察可被下候、既に其頃御一診相願、且は御模樣も相伺度奉存候處、其以前御密話之神策、必定御果行に可相成と恐察仕候折柄にて、盟兄には一入御煩擾、晝夜御寸隙も無御座御事と御察申候ゐ差控候得共、御模樣之義は、實以不堪苦念候、天下之御大事、至難之時勢、九敗一成之地に至り、回天之御斡旋被成下候御儀も相辨居乍申、微恙之故を以、如此迄御不音相成候段、多罪之至、諸賢思召之程恐入申候、返々御海恕可被成下候、賤恙一昨日以來、肩背腰部灸事仕、盜汗潮熱兩日共無之、全快相覺申候、今一兩日相試み、歩行願差出し候はゝ、不取敢内々拜謝可申上奉存候、中根・石原兩君御起居如何、御疎遠御詫、御同樣申上候事、乍憚御傳言可被下候、右は是迄之御詫、且は時下御尋問旁、拜陳如此御座候、頓首拜具、

病ヲ告ゲ同志ノ努力ヲ請フ

五月廿一日　平遠

尚以、時下御自重奉祈候、中・石御兩所へも宜敷奉願候、この小器の内、折節申附候間、奉入尊覽候、

○半井先生御來診、千萬奉拜謝候御儀に御座候、宿疾御治療相願申度旨、御約束申上置候、御來診之御禮、先御序盟兄よりよろしく奉願候、

○小生不快中には御座候得共、盟兄御密話之神策一助にも可相成かと、極密施行仕候儀も有之候處、先々より夫々挨拶も御座候御儀も、兩三條御座候、一日も早く御合迄申上度祈念罷在候、昔日以來、申上度事共相積り、山岳に御座候事、

〔橋本左内書翰〕○橋本公爵家所藏

○五月二十三日　同藩士　近藤了介宛

本月十二日立の御手帖、同十八日相達致披見候、如御示梅天日々濛々の氣候御座候處、先以　君上益御機嫌克被遊御座奉恐悦候、隨而愈御安康被成御勤珍賀之至奉存候、然ば、過日來呈一書、此地之模樣等仔細可得御意存居候處、兎角　廟議不致一決種々轉變致し、恰如當節之時候に付、一日々々と見合、大延引に相成、嘸御退屈と奉存候、

一、小子儀過日引取候後は、先萬事都合不悪、まだ　皇國之御威靈も不落地と奉存、深喜居候處、近來上田閣老・御大老邊邪説相始、正論直言之者被忌嫌候て、既に過日、土岐丹波・川路左衞門・鵜殿民部抔、有志之御役人、追々轉役被仰付、御時節柄不相當之事に候て、一統惶驚仕候、何れ岩瀬抔も不遠御役も可被成御免抔、風説も有之候位、其上西城之事も種々の説起り、中々一橋公を建候樣の儀難被行、實に殘念之至りに候、御大老抔は專ら南紀主張之由、此も御賢明かも不知候得共、何分御幼稚之事にて、指當り將軍家御名代と申も御六ヶ布は目前の事、夫さへ推て一己の便利を計り、西城に可致抔企候爲體、笑止之事萬々御推察可被下候、

大老ハ專ラ南紀ヲ推ス

○此仕合故、　君公御都合も甚悪相成、誠に困居候、　君公には何分幕府之御爲深く被思召、西城は一橋公に可止旨、御申立有之候故、閣老抔も迷惑に被存候樣子に御座候、當年御滯府に相成候は何故か頓と相分り不申、此は何ぞ閣老に御考可有之儀かと被存候、乍去只今之勢にては、閣老にも却て　君公之御滯府は御困り可被成と被思候、三國（大學）よりも又閣老に御諂被成候抔申參り候由、此は全列藩より申通候者有之に相違なし、夫は阿・尾之内と被察候、阿・尾之二公は只今にては　叡慮さへ相立候へば、幕府之義は御構不成と被申御論、　君公は何地迄も幕府を見捨候ては不相成と申御論にて、萬事幕府之御爲御計り被成候故、二公とは大に御議論有之候事にて、定て此二藩よりは悪口可申參被存候、併し閣老之悪み候事は、二公よりも　我公を悪み居るに相違なし、御建白抔も既に諸家よりは出候て、皆和親交易之論と申事、在府之御方には皆申立等相濟候得共、唯我公御一人は未だ御見詰不相立との御見にて、御建白無之位、此にても閣老に媚諂候とは餘り無識之論、不堪

松平慶永一橋慶喜ヲ推シ幕府ノ爲ニ謀ル

井伊直弼松平忠固幕府ノ獨裁ヲ主張ス

堀田正睦ハ一橋ヲ松平忠固ハ南紀ヲ主張ス

立腹候、御序に此段三國へも御傳言可被成下候、

○閣老と申中、堀田は近來十分に京師之思召御了解にて、今度は何分篤と見込を相立て可伺との御論のよし、脇坂(安宅)も同樣、唯上田は關東にて獨裁にて可然と申見込にて、大に異論相立、當時之勢堀田閣老之身分も危位に相成居候、御大老と上田は隨分同說のよし承及申候、乍去閣中の事故、詳切には知れ兼申候、何分有志の御役人左遷致候は、上田の所爲ならんと衆人皆申居候、

○西城の事不行候ゑは萬事不先行、殊に於京師御內命も被爲在候事故、何分一橋公に無之候ては不相成候處、右堀田と上田との爭より、堀は橋、上は紀と申說相立、大に六ヶ布運に相成居申候、其上此節は　我公迄をも疑始め候鹽梅、此も天下の爲め一橋公を御すゝめ被成候得共、矢張田安公の御好みにて有之と申說のよし、誠に兒戲同然、嘆息之至に御座候、上之○印より此邊迄は、三國へも森寺へも薄々御噺し可被成、堀田と上田との事、西城の事抔は能く御話可被成候、

○京師之風說幷機密等、時々御探索御申越可被下候、此表へ彼是より聞候處にては、餘程御說も寬候樣に申來候如何、三國は舊說と奉存候、尙外へも逐々御手を被附御探索可被成候、

○池內(大學)是は不知其心、座田右兵衞大尉此は服部(熊五郎)思意之筈、此人は近來說變り、交易之論に成候筈、此座田の同役稻波主膳此も交易說、抔へも手筋を求め、御交被成候へば可然哉、小子の事は深く御秘し置可被下候、後日如何樣之義有之も難計候間、拙名は頓んと御申被下間布候、橋本を不言して桃井伊織と申事相尋候はゞ、そこ〳〵に御答置、御賴申上候、

○此節、京地より此表へも細作人來居申候、

○亞米利加使節は當月七日、都合能引取、此節下田滯在仕居候、

○和蘭領事官も無程出立に可相成候、○本多君(修理)・村田兄(氏壽)共、海防之事に付見込有之、出府に相成申候、乍去小拙存寄も大段同樣にて、直に話合も相濟申候、乍去當時餘程困難之場合、且色々外御用も有之候故、未だ御滯留に相成居申候、

○村田は着後腸胃熱にて五六日引籠に候、乍去先逐々宜方に御座候、御休意可然被存候、

○小子方へ度々御投書一々落手致候、服部(熊五郎)よりも同段、定ゑ御報も不申、御不審に可有之、小子も着以來餘程煩多、其上氣分も爾々不致、來人等晝夜斷不申に付、不得止意外御不沙汰申候儀に御座候、多罪御寬宥可被下候、此後は折々御書通も可申、其御地よりも折々御申越可被下候、　君上にも京師之事は殊之外御案勞被遊候、右當便大略得御意候迄如斯、尙期後信之時候、不宣、

五月廿三日

了介　兄

左內

再伸、時中萬々御保養專祈罷在候、小子も去月十八日別紙之通、結構蒙仰冥加至極難有仕合に奉存候、以上、

〔目付 岩瀨忠震書翰〕○橋本景岳全集所載

○五月二十四日橋本左内宛

昨日は御紙面、退出展閲、條約二本收手、此條約之事は、他に漏泄無之樣に致度、近日表向御達可有之候也、御新聞二條之内、未決の二字は最可喜、

○本日は姦黨外に遷轉有之候、後議は又可及姦黨歟、前後錯綜、令人眩目、良工の好手段なるべし、呵々、

○溝口手簡差出候、御返却に不及、

○箱館會所切手七枚爲持上候、價は過日差出し候切手に記し有之通に御座候也、○本日は砲臺破損所見分相越、只今歸船、舊製飛揮一粲に供し申候、昨日御示しの佳什は、近日登城の節、轎中にて攀和可致と樂み申候、萬々面晤に讓、草略頓首、

念四　　蟾洲

把志猛特兄

〔平岡圓四郎書翰〕○橋本景岳全集所載

姦黨遷轉

來訪ヲ求ム

○五月二十五日橋本左内宛

特筆

一、御斡旋御一條に付、御含迄拜陳仕度事共、兩三條御座候、貴兄御繰合相成候はゞ、今明日にも御枉駕希度候、若又御差支被爲在候はゞ、中根君御光來希度候、御都合如何、御寸答希度候、尤時宜により候はゞ、明日は安島姓來問にも可有之、今夕に候はゞ、一段大幸に御座候、一體拜參可申上候儀は勿論に候處、未歩行願にも至り不申候て、他行相成難く候間、略儀之至失敬至極、甚恐入候へ共、此段相伺申上候、御寸答奉煩候、頓首拜具、

五月廿五日　　方中拜

橋本兄

○參考

〔幕臣古賀謹一郎家臣 藤森恭助書翰〕○橋本景岳全集所載

○五月二十一日　福井藩士 横山猶藏宛

要用御直披

肅啓、御清穆抃賀、過日は御光貴大慶仕候、扨其節御談申候伊云々之一條、彌被命候者、少々先入致置候都合も有之、幾日頃被命候と申事、前以一寸爲御知置可被下候、左樣無之候ては、萬一不都合出來候ては不宜候間、宜希候、草々不乙、

五月廿一日　　藤森恭助

安政五年五月二十二日

横山猶藏樣

〔藤森恭助書翰〕○橋本景岳全集所載

○五月二十二日横山猶藏宛

昨日は御手簡、又々御模樣相替候に付、今日御出可被下段、被仰遣候處、今日は老拙芝邊迄講義に罷出候間、午前より留守に相成候間、明日御光駕被下候樣奉祈候、昨朝尾人來候て談候處、是又老拙見込とは少々替り候處有之候に付、說得は致置候得共、是亦御咄不申候ては不相成候に付、御出は幸の事に御座候、乍併人情薄俗に相成、國事の間に私意を挾み候故、何方も議論正大に參らぬには困申候、此節に當り、眞に憂國事候ものならば、少々の了簡の合はぬ位は捨置、合同盡力に無之ゐは不相成事に候處、畢竟忠貞之意の薄き故と致慨歎候、老拙抔は何も關係無之身分に候得共、日々氣を揉候も、全く憂國の婆心而已、外に望は無之候、然るに、有位の人は何故にかゝる身に入らぬ事と竊に慨歎仕候、御一笑可被下候、匆々不乙、

五月廿二日

藤森恭助

横山猶藏樣

〔水戸藩士〕熊谷半之丞書翰〕○橋本景岳全集所載

○五月二十二日頃横山猶藏宛

過日は御光來被下候處、何之風情も無御座失敬仕候、扨壹件弘庵先輩へ御相談被下候處、至極都合宜敷趣、先大慶仕候、依て只今より可罷出樣被仰下、委細承知仕候、未朝食不仕候に付、食事次第早速參堂、心緒縷々可得貴意候、草々拜復、

即刻

猶藏樣貴閣

半之丞

夷賊降伏祈禱勤修ノ命

二十三日丁酉　左大臣近衞忠熙、内旨ヲ奉ジ、命ヲ金剛峰寺ニ下シテ外患祈禳ノ祕法ヲ修セシム。

〔左大臣近衞忠熙書翰〕○高野山金剛峰寺所藏本仁王大法記錄所載

○五月二十三日高野山金剛峰寺寺務青巖寺等宛

夷賊邪心速疾降伏、四海泰平、萬民娛樂御祈之事、

右四所明神法樂、并太元明王祕法、三七箇日之間可勤修旨、

叡慮之趣、宜令承知、可抽精誠條如件、

安政五年戊午五月廿三日

左大臣忠熙

高野山金剛峰寺

寺務青巖寺并衆徒中

高野山衆徒祈禱嚴修ノ事天聽ニ達ス

〔左大臣近衞忠熙書翰〕○仁王大法記錄所載

○五月二十三日高野山金剛峰寺衆徒宛

從先達、夷賊退去祈禱之事、憑入候處、其山大衆一同、凝丹誠勤修之旨、委曲從信海傳聞之上、極内々達

安政五年五月二十三日

（後水尋山内成就院住持）

天聽候處、

叡感之餘、今般四海靜謐等之

御祈被　仰出候、爲檀料、判金五枚被　下之候、此等之旨能々相心得、彌無油斷勤修可有之者也、

五月廿三日　　忠熙　花押

高野山金剛峰寺

衆徒中

〔高野山寺務青巖寺住持鋭信等書翰〕○孝明天皇紀所收御府文書所載

○五月左大臣近衛忠熙宛

今般依

御內勅、爲夷賊退去、四海泰平之御祈、四所明神法樂、并太元帥祕法、三七箇日可奉勤修御旨、被爲　命、且爲　御壇料、判金五枚被爲　下置、闔山大衆、誠惶誠恐、謹奉拜請件々、

一從來六月朔日、至同廿二日、三七箇日之間、於山王院、每日三時、催二十口伴僧、仁王經大法勤修之、可奉備四所明神之法樂事、

一從同朔日、至同廿二日、三七箇日之間、於勸學院道場、催六口伴僧、每日三時、可奉勤修太元帥祕法事、

右之趣、宜御執奏可被成下候、恐惶謹言、

安政五戊午五月

高野山

寺務青巖寺鋭信　花押

衆徒中

祈禱勤修ノ請書

〔近衛家奥日記〕○京都帝國大學所藏本

五、廿一日、乙未、雨、

一御機嫌よ〜、

一小林民部權大輔參上、御對面、

一昼後、御參　內、夕景御退出、

○中略、

一忍向參上、

五、廿二日、丙申、雨、

一御機嫌よ〜、

忍向及ビ信海近衛邸ニ出入ノコト

一忍向參上、
一小林筑前守參上、御對面、
一久我右大將樣ふらせゝ、御對面、暫御ハふゝ、
一御所ゟ、御封中ゟらせゝ、
一三條樣ゟ、御書進せゝ、
一夕景、御所ゟ、又々御封中御到來、
一入夜、御步行ニて、一條樣へふらせゝ、
○中略、
五、　廿三日、丁酉、雨、
一御機嫌よゝ、
一御內用ニて、召せゝ參上、
御對面ゟらせゝ、
一右府樣ならせゝ、御對面、暫時御とゝ、還御、
一眞心院樣ゟ、御吏ニよゝ河參ル、
一昼後、御參　內ゟらせゝ、

牧加賀介

近衞忠熙忍向信海ニ對面祈禱ノ品々ヲ渡ス

信海登山

一忍向・信海參上、御內々御祈禱の御しゝ、御對面ニて、御渡ゝ被遊候、兩人ゟ、御もと
へ御らさひら被下候ゝ、
○中略、
五、　廿七日、辛丑、晴、申剋頃夕立、
一御機嫌よゝ、
○中略、
一忍向參上、御對面ゟらせゝ、

〔仁王大法記錄〕○高野山金剛峯寺所藏本

安政五年戊午五月廿七日、京師清水成就院信海登山、年預坊ゟ被見、口述ニ、今般亞墨利加國使節渡來、申立之條々、不容易事共有之、深被爲惱宸禁候、就ゝ當山四所明神ゟ、異賊降伏之靈神ニゝ、弘安年中、蒙古退治之先蹤も有之事ニ候へハ、爲國家安全、異賊退去、四所明神之法樂、并大元明王秘法、三七日之間、可致勤修之御旨、
御內勅被仰出、則依近衞左府公之御內命、
御綸旨并御撫物等、守護仕登山之旨、被申出候ニ付、不取敢御碩老中御出張、綸旨等頂戴

寺務門主碩學集議

有之、翌廿八日、於青巖寺、御寺務幷御門主・碩學集議中例席、御綸旨・御撫物等、被遂恐拜候事、

○五月二十三日附、左大臣近衛忠熙・高野山金剛峰寺・寺務・青巖寺等宛書翰、上ニ收ムルヲ以テ、之ヲ略ス。

近衛左大臣御添書云、

○五月二十三日附、左大臣近衛忠熙・高野山金剛峰寺・衆徒宛書翰、上ニ收ムルヲ以テ、之ヲ略ス。

右

仁王經大法勤修ニ治定

詔意幷公命之趣、一同奉恐畏、衆評之上、自來ル六月朔日、爲四所明神威光倍增、於山王院、三七日之間、仁王經大法可致勤修旨、治定ニ相成、則老分掛り親王院・櫻池院、中蔦掛り如意輪寺、圓滿院ニ被申付候事、

如意輪寺及ビ圓滿院ヲ掛リトナス

安政五年午五月廿八日夜、如意輪寺・圓滿院御呼懸ニ付、罷出候所、於御評席、異國船每々渡來一條ニ付、從京都、御内勅ヲ以、是迄重々御祈禱被仰付有之處、尙又今般も同斷、極密ヲ以、可致御祈禱幷四所明神之法樂之旨、極密之勅書有之、來ル朔日より、三七箇日之間、於御社、大法致修行候條、兩院爲懸りと出勤、夫々可取計旨、被仰付候事、

一廿九日五ツ時分、御碩老高室院・正智院、老分懸り親王院・櫻池院御出張、行用次第向、其外法則類等、取調有之候事、

一最勝講近寄候ニ付、一七箇日、於御社執行、一先結願、次二七日ヲ、於西塔、引續修行之旨、治定候事、

信海歸京ノ途ニ就ク

附り、中蔦幷三十人中へも、同斷筋御移り有之、尤勤方等之義ヲ、追而手扣ヲ以、夫々相移り可申治定事、

近衛忠熙ヘ答書

一御使成就院へ、歸京ニ付、御答口述案、左之通り、

一從來六月朔日、至同廿二日、三七箇日之間、於山王院、每日三時、率貳十口伴僧、仁王大法勤修之、可奉備四所明神之法樂事、

一從同朔日、至同廿二日、三七ヶ日之間、於勸學院、每日三時、率六口伴僧、可奉修太元帥秘法事、

午五月

一近衛左府公ヘ、御答書案、左之通り、

今般　御内勅、爲夷賊退去、四海泰平之御祈、四所明神法樂、幷太元帥秘法、三七箇日、可奉勤修御旨、被爲　仰出、且爲御旦料、判金五枚被爲下置、從來六月朔日、至同廿二日、三七箇日之間、於山王院、每日三時、催貳十口伴僧、仁王大法勤修之、可奉備四所明神之法樂事、

一從同朔日、至同廿二日、三七ヶ日之間、於勸學院內陳、催六口伴僧、每日三時、可令奉勤修太元帥秘法事、

安政五年戊午五月

高野山
寺務撿校法印鋭信 花押
衆徒中

近衛御殿
諸太夫御中

一御使成就院歸京ニ付、請取書案、左之通り、

證

一御內勅書　壹紙
　井御添書　同
一御釵　壹振
一黃金　五枚

右從　近衛左府樣、　御傳達被爲成下候之處、慥落手仕候、以上、

高野山學侶

安政五年戊午五月廿七日

信海法納

集議中 小印

○中略、

一中檀阿闍梨御寺務、尤開結耳御出仕、其餘一七箇日之間、爲手替、高室院本尊且修行、附り、護摩師一七日之間、正智院受持ニ而修行、十二天・聖天神供、且御本地供ゝ、日々一坐ツヽ、入替修行之事、

一十二天旦、日々初夜一時、尊天ゝ、后夜日中二時、神供ゝ、一七ヶ日ニ、初中後三度ツヽ、合九度、御本地供、三時共修行、具ニ配役時割帳之通りゝ、

但、御老分之時割ハ、於懸り致之、其餘中蘆等之時割ハ、中蘆月番ニ而致之候樣、申入候事、

一仁王經讀誦、中蘆阿遮り四人、入寺四人、助咒衆分中、尤三十人、兩人ツヽ、出勤之內、一蘆咒頭、貳蘆前後讃頭相勤、助咒之內、中坐貳人、下座四人、都合伴僧廿人之內、役人四口相除、十六口之事、

一中蘆井三十人、兩月番へ、明晦日、未鐘ゟ、於靑巖寺、京都ゟ之　御內勅書、井御撫物等、一統拜見可被致、尙又御祈禱要旨等、御移有之候間、各々無遲滯、御出席可被成旨、御移

安政五年五月二十三日、

り有之候事、

一丸屋宗兵衛方へ、香具申付、左之通り、

香具

一並塗香　五兩目　一切白旦　半斤
一丁子　三兩目　一沉香　三兩目
一七種香　三斤　一丸香　壹升
一五藥　一散香　五合程

調物

一會所坊ニ而、調物左之通り、

一大小佛供　一切餅
一小豆　汁用　一柏實　燈明用
一柏ヒ油　一種油
一神酒（尊天 明神）　一御團
一爛燭　一白砂糖
一白胡麻　一洗米
一五穀 品數、稻・大小麥・大豆・胡麻、　一房花・切華
一付松　一精進供　明神用

一大奉書 佛布施用　壹帖　一美の紙　三帖
一半紙 布施用等　拾貳帖　一燈心押　金六丁 燒拾丁
一羅川燭　十二天用　一ら川燭皿　十貳
一閼伽用大土瓶　壹ッ　一白木綿　貳反
一羽二重 本尊覆、絹用　壹反　一座蒲團　三枚
一上ヒき草履　七足　一薦　貳枚
一金釘　尊天用
一上菓子 斤ニ付、六匁、　一大根
一ゐら草履　一疊糸 屏風綴用
一次第紙　一十二輻輪 金紙切形
一桐箱　壹ッ　一大鷹檀紙
一護摩木
但し、請書等、入之遣ス、

以上、

一溫座用座蒲團、勤學院へ三枚相用、三枚不足ニ付、新調ニ申付候事、
一北室院本尊戸帳無之ニ付、絹ニて新調申付事、

安政五年五月二十三日

一勸學院寶庫ゟ、溫座用座蒲團・精好白麻褊衫・閼伽桶・同杓・火杓子・鈍色箱・爐・下水入桶・五寶・香具・塵取・手箒・臺火斗・明障子并（襖障）汀用之燈明臺・油皿等、出庫候事、

一請書并認物ニ、行滿院早朝ゟ被相詰候事、

一中旦護摩供・十二天・聖天御本地供、轉經助咒之下操、致別冊置候事、

一道場莊附手傳人、淨眼院・澄禪分・靈湛分・龍賢分、右四人相賴、道具借用、其外出庫物等ニ、差向候事、

一晦日、早朝ゟ、老分御懸り、中藺懸り、并手傳之衆、出勤候事、

一諸次第向、其外祈願之文・表白・神分等、校合相濟、夫々筆者へ、相賴候事、

一三十人中ゟ、下座一統、今般御祈禱ニ、致出勤候得ハ、勅書等拜見被仰付度旨、被申出候ニ付、御懸り御方より、嚴重之連名書、被指出候得ゑ可然段、御答有之候事、

一、無量壽院ゟ、絹幕壹張、借用候事、

一惣持院ゟ、花臺四・燈四本、借用候事、

一中院ゟ、借用左之通り、

一絹幕　壹張　　一眞鍮四面器　壹通

一眞鍮佛供皿　三十貳　　一天尊　厨子入

修法用諸品ノ借入

一天尊用金皿大中小六ツ　　一圓旦　脇机壹添、

一十二天（曼陀羅）マタラ　壹軸　　一白木旦十二天用　貳

〃

一南院ゟ、神供旦壹通り、借用候事、

一寶城院ゟ、借用左之通り、

一明屏風　壹雙　　一四面器　壹通　但、佛供皿三十貳共、

一西禪院ゟ、借用左之通、

一蒙古對治明神　　一神酒德利　貳ツ

一蘿蔔皿聖天旦用　貳ツ　　一神酒器聖天旦用　貳ツ

〃

一正智院ゟ、借用物覺、

一大旦　　一護摩旦佛具共、

一銅四面器　壹箱　　一舍利塔

一五瓶造花　　一ゆい臺　壹ツ

一五種鈴　　一輪羯摩　壹箱

一佛像懸　壹ッ　一精進供膳　壹膳
一禮盤半疊　壹ッ　一平袈裟　阿—用

一高室院ゟ、中院流大法次第、幷法則拾貳卷、借用候事、

一高室院ゟ、唱禮用法則拾貳卷、借用候事、
一親王院ゟ、大旦用經箱、借用候事、
一經机八ッ之内、四ッ御影堂ゟ、四ッ御社用ニゟ、爲濟候事、
一舊譯仁王經、寶庫ゟ出之、
一十二輻輪、勸學院寶藏ゟ、出庫候事、但、今般新調物、不用之、
一北室院本尊、大幅ニゟ、御社ニ難掛ニ付、南院より借用奉懸、北室院本尊ヒ、箱儘安置候事、
一小道具等、會所坊ニ有合候分ハ、取寄候事、
一天尊前具、如意輪寺ゟ、借用候事、
一同日、中臈幷三十人、兩月番ヒ、御移り手扣、如左、
一來ル朔日、七ッ時前ゟ、内會所西禪院ヒ、御詰可被成事、
一仁王經大法立、七ッ時迄ニ、御社出仕、後勤方左之通り、

一唱禮長音之事、
　但、後夜時除之、
一前讃、四智梵・心略梵・佛讃、但、無鉢、立扇頭出之、
　附、后夜時除之、
一三力金后、佛眼咒、
　但、仁王經、入寺以上ニテ讀誦、
一振鈴後、本尊咒、
一一字金ヨり、一字咒、
一后鈴ヨり後讃、四智漢・心略漢・不動讃、
　但、後夜時除之、
一回向、如常、
　但、后夜時ニハ、后夜偈唱之、
一饗東、襲精好之事、
　附り、内衣皆白之事、
　以上、

安政五年五月二十三日

祈禱勤仕ノ者綸旨撫物等拜見

一於内會所、沐浴之用意、致之置候間、各々其御心得ニて、御出可被成旨、申入置候事、
一同日、未鐘ゟ青巖寺ニおゐて、中藺并三十人已下、御祈禱出勤之面々、密ゟに御綸旨・御撫物等、令拜見之候事、
附り、今般御祈禱之規則、樣々要旨、披露有之候事、
一承仕貳人、指出候樣、他方へ申遣、治定事、
一御祈禱中、一時替ニ、三沙汰出勤被申付候事、
一中旦阿闍り裝束、鈍色平袈裟・檜扇・藺草ゟ、護摩師、白褊衫精好・金中啓・半裝束・椶櫚草履、十二天尊御本地供・神供師と、襲精好・内衣皆白之事、
一助兇之人、寺家壹藺ゟ配之、（雖在國ノ仁、任藺次配之）、在國とも、尤現病等、無據差支之時と、黑袈裟ハ黑袈裟、衆分と衆分、代勤可被指出筈、治定候事、
一暮六時ゟ、本尊爲迎請、圓滿院、守護人三人召連、北室院ニ參向、於持佛堂、致法樂、夫ゟ出門、御社へ相迎、南側ゟ入御、箱之儘、中袒正面ニ、奉安置候事、
一今朝ゟ、懸り道心四人、御社ニ相詰、莊嚴大部ニ出來、本尊安置之上、夫々引取候、尤山人兩人、夜番申付候事、
一朔日、早朝ゟ、昨日之通り、懸り兩院、手傳四人、年預ゟ、人足四人被指出、御社懸り、金堂道心とも相詰、九時迄ニ、莊嚴相調候事、
一、廿九日ゟ、晝・晩兩食、懸り・手傳不殘、於年預坊營之、明二日ゟと、於自坊、營出之筈、治定事、
一祈願之文相認、助兇へ賦之置、御老分座へハ、起居書、指出之置、座配并道場模樣、下ニ如圖、
一佛布施包、大旦開結用四本、聖天・十二天・明神旦分六本、上包奉書・中ハミの半帖ツヽ、賦、佛布施、外ミの、中ハ半紙壹折ツヽ、仕立候事、
一勸學院ゟ出庫之明障子、五袒各々圍用ニ相成、承仕扣所圍用不足ニ付、借用候事、
一護摩木、奥院立木枯ヲ以、仕立ニ相成候事、
一助兇座配、紙標ヲ以、相定候事、
一於西禪院、三七ヶ日之間、沐浴用意、并煎茶等、賴入ニ相成候事、
一大旦不斷香、大火舍ヲ以、晝夜不斷絶候樣、道心へ申付候事、
一九ツ時ゟ、懸り御老分中立合、莊嚴見相濟事、
一含香・塗香、南北差出置候事、
○圖アリ、之ヲ略ス。

一旦線、運心ニあ引之、旦引、中旦・護摩旦壹反ッ、、十二天・聖天壹反立合、相用候事、

一祈願文、左之通り、

祈願

金輪聖皇　天長地久　征夷將軍
武運長久　准后御所　御產安易
大臣公卿　一味和順　文武百寮
忠誠堅固　列國諸侯　發勇猛心
渡來夷賊　速疾降伏　邪法退去
正法紹隆　四方異船　無有來嬈
天變地妖　未然消除　一天泰平
四海靜謐　風雨順時　五穀成熟
万民豐樂　所抽丹誠　如件

一例年ノ御撫物箱、本尊前ニ、相備置候事、

一本尊前、霧香爐（キリノ香）・生花・貳拾目懸燭壹丁ッ、、相備候事、

一承仕共ニ、爲致覆面、檜爲含、支具等、爲取扱候事、

一爐中之灰除用火箸・火杓、承仕ニ相渡置候事、

一大旦造花・護摩旦生花・聖天旦生花、用候事、

一十二天マタラ不懸、本式ニ候所、有合候故、相掛候事、

一明神・聖天每修法、神酒相備候事、

一供物、大旦三拾貳杯、護摩旦・明神旦・天尊八杯ッ、、相備候事、

一中旦・護摩旦四燈、明神壹燈、聖天貳燈、十二天壹燈、相挑候事、

一七ッ時、開白ニ付、內會所西禪院ニ相詰候衆中、八ッ半時ゟ、出仕候事、

一於青巖寺、下座一統へ、從京都之御品拜見ニ相成、尤兩門各々連名書判帳、三十人ゟ被指出、受取有之候事、

下座一統京都ノ御品拜見

一諸供物類、通箱ニあ、時々年預坊ゟ、爲送候事、

一七ッ時前、御寺務御出仕、開白御登旦有之、御老分中不殘、御出席有之事、

一如意香貳箱、丸家ゟ獻備候事、

一八日四時、一七箇日御祈結願ニ相成、直樣今晩ゟ、第二七日御祈開白ニ付、取急西塔ニ相移、八ッ時迄ニ、旦替莊嚴相調、七時ゟ相始、尤御寺務御不快ニ付、御出仕無之、手代として西室院、中旦行法被相勤、護摩師、今日ゟ櫻池院被相勤、準前七ヶ日之間、勤行候事、

安政五年五月二十三日

一檀模樣少々相替候得共、御社之通り、五檀共、内陳ニて相濟申候、明神旦、東方西向、聖天、西方東向ニ構候、承仕扣所裏、堂之外陳、供物ゟ同所ニ長檀を置、不觸塵穢樣、取締置候事、

一廿二日晝、三七日之結願ニ付、後夜御祈相濟次第、時之鐘ニ不抱、引續結願いたし候ニ付、五半時、御寺務御出仕、結願相濟、御撫物御加持有之ニ付、明り屏風取拂、御老分御一統、西ノ内陳へ御揃、慈救咒誦之、無滯相濟候事、

一發願文相認、所々へ相賦、其文左之通り、

至心發願　唯願大日　本尊界會
般若金剛　四大八大　諸大忿怒
兩部界會　諸尊聖衆　外金剛部
護法天等　各々還念　慈悲本誓
護持今上　厄難消除　玉躰安穩
增長寶壽　渡來夷賊　速疾退治
作障難者　摧破微塵　天變怪異
未然消除　一切惡事　皆悉消除

眞言威力　加持感應　無邊御影
皆令滿足　決定成就　決定圓滿

一七ツ時迄ニ、莊嚴道具、借用目錄之通り、夫々ゟ相戻、懸り兩院列參、禪詞申入候事、

一諸調物等之義ゟ、年預代手元ニ有之候ニ付、致筆略候事、

勸學院寶庫納物左之通、

一新調座蒲團　三枚
一旦引　四通
一殘香具并五藥　大袋壹ツ

一初一七ヶ日　中旦護摩師　（高室院　正智院）
一中一七ヶ日　中旦護摩師　（西室院　櫻池院）
一終一七ヶ日　中旦護摩師　（寶性院　三代正智院）
一十二天旦　（北室院　金剛三昧院　平等院）
一聖天　（清淨心院　遍照光院　無量光院）

一御本地供

一神供

以上、

一南院護摩師補欠衆如左、

一朔日　金剛三昧院　一四日
三日　北室院　一七日
一五日　平等院
六日　一二日　惣持院

以上、

（惣持親王院　明院　持院）

釋迦文院　五六八

〔近衛家奥日記〕○京都帝國大學所藏本

二、十六日、壬戌、晴、

一御機嫌よゝ、

一忍向參上、御對面ゐらせゝ、

長壽花（キスイセン）ちゝ上る、

○中略、

一成就院信海、忍向も同伴參上、内々御對面ゐらせゝ、御内々御祈禱之事、御賴ゐらせゝ、信海ゟ、御菓子一箱、ちゝ上ル、

近衛忠熙内々祈禱ヲ依賴

一御所ゟ、御封中、こふさゟ、御請ニ御返答、

一久我大納言ゟ、今出川北ノ御門ゟ、御内々ゟらせゝ、

○中略、

二、十七日、癸亥、晴、

一御機嫌よゝ、

一忍向參上、一寸御對面ゐらせゝ、

○中略、

二、廿三日、己巳、晴、

一御機嫌よゝ、

一忍向參上、御對面ゐらせゝ、御内々修法、

○中略、

一未刻頃、御參　内、申半剋頃、御退出ゐらせゝ、

○中略、

二、廿四日、庚午、曇、夕景雨、

一御機嫌よゝ、

一青門樣ニ、御書進ゆゝ、

○中略、

一忍向參上、御對面修法致ス、

一太閤樣方、ゟ二て、昨日ハ御出仕ニそハゝ候よゝ、御ろく別御ニさり及もニらセゆゑや、御見舞仰進ゆゝ、御まふ一折進ゆゝ、

一申刻頃、御參　內、御退出掛ニ、鷹司樣ニならきゆゝ、暮過ニ還御、

一忍向又參上、御對面ニらセゆゝ、

一今日、左大將樣ならセゆ、內大臣御內意　仰出さゆゝ御吹聽、仰置ゆゝ、

○中略、

二、　廿六日、壬申、曇、少々雨、

一御機嫌よゝ、

一昨夜地ゝんの　御機嫌御伺とゝて、巳半刻、御參　內、御退出掛、青門樣御里坊へふらきゆゝ、夫ゟり三條樣ニふらきゆゝ、暮過ニ還御、

一御留主中ニ、三條樣方御封中ニて、御蒸くゝ一箱進ゆゝ、

○中略、

一忍向參上、修法アリ、

○中略、

三、　三日、己卯、雨、

一御機嫌よゝ、

○中略、

一忍向參上、御內々修法致ス、御むゐふ及拜見致、

○中略、

三、　五日、辛巳、曇、

一御機嫌よゝ、

○中略、

一忍向參上、御修法アリ、

○中略、

三、　八日、甲申、快晴、

一御機嫌よゝ、

信海高野山ヨリ歸京參邸

一忍向參上、信海も參上、高野山ゟ歸京いさ〳〵候とて、御札尊・御念珠、外ニ高野槇ゟ植さ〳〵上る、

兩人に、先日ゟ段々功勞とて、羽ふさへ呉服被下候ゑ、

一内府樣ゟ、御内々度々御書進ゟ、

一青門樣ゟ、御内々隱岐長門守、御封中進ゟ、則御返書進ゟ、

一御所に、御封中御上遊へ〳〵候、

○中略、

三、十一日、丁亥、雨、

一御機嫌よ〳〵、

一中山ゟ、御封中御上、御返書、

一内府樣ゟ、同斷、

一右府樣ゟ、同斷、

一萬里小路ゟに、御封中出ル、

一御所に、御封中御上遊と〳〵候、

○中略、

一忍向參上、修法アリ、

○中略、

三、十七日、癸巳、晴、

一御機嫌よ〳〵、

一忍向參上、修法アリ、

一午剋過、御參　内、戌剋過、御退出、

○中略、

三、廿七日、癸卯、雨、

一御機嫌よ〳〵、

一忍向參上、修法勤る、

三、廿八日、甲辰、晴陰不定、

一御機嫌よ〳〵、

一忍向參上、御對面ゐらきゟ、

一成就院信海參上、御對面遊へ〳〵候、高野山に被下ノ御染筆物被下ゑ、

近衞忠熙信海ニ高野山ヘノ染筆ヲ授ク

○中略、

高野山ヨリノ菓子信海持參

一高野山ゟ、御蒸くゟ〜一箱さ〜上る、信海持參ス、

○中略、

三、廿九日、乙巳、晴、

一御機嫌よ〜、

○中略、

一忍向參上、修法致ス、

御ろちむはち〜上る、

○中略、

四、六日、辛亥、晴、

一御機嫌よ〜、

○中略、

一忍向參上、修法例之通、

○中略、

四、九日、甲寅、晴、

一御機嫌よ〜、

○中略、

一忍向參上、修法、

○中略、

四、十二日、丁巳、快晴、

一御機嫌よ〜、

一忍向參上、修法致ス、

一三條前内府樣ゟ、御封中御到來、御返書進ゟ、

一右府樣ゟ、御封中、御返書被進候、

一萬里小路ゟへ、御書出ル、

一成就院信海參上、高野山ゟ歸京致候とて、御札さ〜上る、

一萬里小路大納言ゟ御參、御對面ならせゟ、

○中略、

四、十五日、庚申、曇、

一御機嫌よ〜、

一忍向參上、修法致ス、

信海高野山ヨリ歸京參邸

○中略、

四、廿一日、丙寅、晴、

一御機嫌よ〳〵、

○中略、

一忍向參上、御對面修法致ス、

○中略、

四、廿四日、己巳、快晴、

一御機嫌よ〳〵、

○中略、

一忍向參上、修法致ス、才輔宅へ立寄候由、先日申上置候、須磨琴献上致ス、

○中略、

四、廿七日、壬申、雨、

一御機嫌よ〳〵、

一忍向參上、修法、

○中略、

信海祈禱終了ヲ報告ス

近衛忠熙等成就院ニ赴ク

近衛忠熙信海忍向（物ヲ與フ

一御祈禱無滯相濟候とて、御札ち〳〵上ル、

○中略、

五月大朔日、乙亥、晴、

一御機嫌よ〳〵、

一兩御所樣御參　内、午剋過、御退出、

○中略、

一（參院大僧都應照）門樣御里坊にふらきゝ所、今日清水成就院にふらきゝニ付、午半剋御出門、御忍ニて、

兩御所樣、清水に御參詣、成就院へふらせゝ、

花〳〵園・大進・つる參ル、

一門樣へ、御土產ニ、御九こん進ゝ、

御包物御三ツ組御まきる入進ゝ、

坊官ゑ〳〵めへ、御をく錄五百疋被下候、

成就院信海へ、宣德花生花臺一そこ、

安政五年五月二十三日

成就院信海

忍向ニ、御提重御干くゝ入、

燭臺御人形

信海附弟淺丸へ、御愛敬ゝ物、

右之通被下候ゝ、

御慰ニとて、淺丸席書致ス、

○中略、

五、十六日、庚寅、晴、

一御機嫌よゝ、

○中略、

一成就院信海參上、批把ち〜上る、

○中略、

五、十八日、壬辰、快晴、

一御機嫌よゝ、

○中略、

一忍向參上、

○中略、

一成就院信海參上、御對面、御さつゝり事ゐらせあゝゝ、

〔僧信海口供〕○宮内省圖書寮所藏本武家吟味書所載

○安政六年二月京都町奉行小笠原長常吟味書

「成就院信海吟味申口書」（表紙）

小笠原長門守

成就院住持

信海

未四拾歳

申口書

右信海父老、大坂立賣堀（完）喰屋町玉井總榮ト申、醫業ゐゐゝ、兩親竝兄宗久共、一緒ニ相暮罷在候處、兩親共先年相果、兄宗久儀、幼年之節、知ル人世話を以、清水成就院住持藏海弟子ニ相成、得度ゐゐゝ、忍向ト改、隨身修學罷在、此者幼名綱五郎ト申、九歳之節、兄忍向同樣、右藏海弟子ニ相成、得度いたゝ、信海ト改、隨身修學罷在、同年、山内光乘院住持ニ相成、拾五歳之節、病氣ニ付、隱居いたゝ、高野山ニ立越、右山内學寮ニ入、勤役罷在、二拾八歳之節、右山内萬勝院住持ニ相成、去ル丑年九月中、前書光乘院ニ再住罷在、

原田才助

忍向信海ト近衛家トノ關係

師匠藏海儀者、先年病死いたし、忍向儀、成就院ニ住職罷在候處、同人儀、右丑年十月中、出寺いたし、行衛相知不申候付、翌寅年二月、此者儀、成就院ニ轉住いたし、其後同月、忍向儀、京地ニ立歸候得共、寺務一乘院宮より、境外隱居被申付候付、所々庵室等ニ住居罷在、大宮里方近衛殿ニ館入いたし候薩藩原田才輔者、忍向知ル人ニ付、右才輔を以、境内隱居相成候樣、一乘院宮ニ、取成之儀、近衛殿ニ内願いたし貰、一昨年より、山内寶性院ニ逗留被差免、同院ニ罷在候姿ニ付、成就院ニ同居罷在候旨、

一近衛殿ニ、此者並忍向館入いたし候儀、忍向者四ヶ年以前、此者者三ヶ年以前より、歌道門人相賴、折折罷出、老女を以詠歌差出候得共、此者者、多分面謁無之、忍向儀者、去午二月以來、左府殿星祭祈禱ニて、日日親敷罷出、蒙懇命を、一體左府殿ニ者、靜成性質ニ付、忍向儀も性質靜成ものニ有之、格別左府殿氣ニ入罷在候趣、且忍向儀、墨夷交易和親御取結相成候ものニ者、邪宗門追追弘り、國家之大患を相招、其上佛法破滅之基ニも可相成之旨、兼兼相歎罷在、左府殿ニも、忍向同樣存慮之由ニ付、每每歎話議論被致候儀も有之候旨、忍向内内咄聞候得共、此者儀、心を留聞取等不致候付、聢ト者相覺不申候得共、左之廉廉、

○中略、

安政五年二月近衛忠熙忍向ニ祈禱修法ヲ命ズ

一去午二月中、近衛殿ニ忍向罷出候節、渡來之外夷退去、天下泰平之祈禱修行可致旨、左府殿直書・詠歌、

「今上皇帝寶祚萬歲、文武百官忠誠堅固、渡來夷賊改心退去、奉安叡念、大樹安意、武運長久、一天泰平、諸民安樂祈禱之事、五大明王護摩秘法、殊可致精誠之條如件、

安政五年二月十七日　左大臣忠熙判

高野山金剛峰寺

碩學中

高野山衆

ちゝて

おもふ心をとゝめる

明らゝ支法乃

左大臣忠熙

安政五年五月二十三日